

岩手県埋文センター文化財調査報告書第42集

岩手県松尾村

野駄遺跡第2次発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター

日本道路公団

野駄遺跡第2次発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県には数多くの遺跡が存在しております。昭和55年度末における埋蔵文化財包蔵地は4719ヶ所が遺跡台帳に登録されております。

文化財は私たちの祖先が長い歴史のなかで創造し、現在に伝えてきた貴重な財産であります。この文化遺産を保護、保存し、次の世代に引継いでいくと共に、文化財を活用することによって私たち自身もこの文化財に学び新たな文化創造への基礎とすることが重要な課題であると思っております。

この貴重な文化遺産の保存と、現代生活を豊かにするという開発指向との均衡を保つため県教委文化課と開発事業者間でその調整について努力しているところでありますが、止むを得ず破壊される遺跡については記録保存の措置をとることとしております。

当センターでは昭和52年発足以来、埋蔵文化財保護の立場に立って発掘調査に取り組んでまいりました。本年度は新たに資料課を設置し、調査と同時に、資料整備、普及活動、報告書の刊行等を進めてまいりました。

本報告書は東北縦貫自動車道建設に関連し、昭和55年度に調査した松尾村野駄遺跡の報告書であります。県北部における発掘調査の機会は少なくこの報告書はその点においても歴史解明上貴重な資料を提示できるものと思っております。いささかでも関係各位の参考になり、斯学向上の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書刊行にご協力、ご援助賜りました県教育委員会、日本道路公団仙台建設局、はじめ地元関係者、考古学研究者の方々に感謝すると共に、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和57年3月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	新里 盈	(県教育長)
副理事長	中原 良一	(県教育次長)
常務理事	菅原 一郎	(県埋文センター所長)
理事	吉田 良和	(県農政部次長)
〃	田代 太志	(県農林水産部長)
〃	後藤 光雄	(県土木部次長)
〃	板橋 源	(岩手大学名誉教授・県立博物館長)
〃	草間 俊一	(県立盛岡短期大学長)
〃	小形 信夫	(前常務理事)
監事	白石 丈雄	(県教委総務課長)
〃	及川 久男	(県教委財務課長)

職員

所長	菅原 一郎	専門調査員	畠山 靖彦	専門調査員	光井 文行
副所長	小野寺 登	〃	朝野 孝二	〃	佐藤 勝
総務課長	小笠原喜一	〃	菊池 利和	〃	高橋 義介
庶務係長	岡沢 成治	〃	鈴木 恵治	〃	佐々木清文
主事	佐藤久四郎	〃	小平 忠孝	〃	酒井 宗孝
〃	戸草内幸男	〃	大原 一則		
〃	立花多加志	〃	田鎖 寿夫	資料課長	瀬川 司男
技能員	佐藤 春男	〃	佐々木嘉直	専門調査員	高橋与右工門
		〃	柄沢 満郎	〃	本沢 慎輔
調査課長	嶋 千秋	〃	平井 進	〃	高橋 文夫
専門調査員	近藤 宗光	〃	種市 進	〃	工藤 利幸
〃	遠藤 勝博	〃	鈴木 隆英	〃	四井 謙吉
〃	国生 尚	〃	三浦 謙一	〃	中川 重紀
専門調査員	村上 達夫	〃	岩 淵 久	〃	松野 恒夫

緒 言

1. 本報告書は、岩手県岩手郡松尾村大字野駄第2地割字前森392に所在する野駄遺跡の1980年度発掘調査の結果を収録したものである。当遺跡の発掘調査は、1978年と1980年の2カ年にわたって行なわれた。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託により、岩手県教育委員会文化課の指導を得て、(財)岩手県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は1980年4月14日～6月7日の期間内に行なわれた。
4. 調査面積は1980年 2,052m²である。
5. 1980年度の発掘調査において検出された遺構数は、次のとおりである。

堅穴住居址	7棟
ピット	13基
焼土遺構	2基

6. 1980年度の発掘調査は、田鎖寿夫、光井文行が担当した。
7. 発掘調査及び整理にあたっては、次の諸機関の御協力を賜わった。

松尾村教育委員会 日本道路公団西根工事事務所

8. 発掘作業は、田村吉男氏ほか、44名の方々に御協力いただいた。
9. 本報告書の執筆分担は、次のとおりである。

I 調査に至る経過	嶋 千秋
II 調査方法	田鎖寿夫
III 遺跡の立地	田鎖寿夫
IV 基本層序	田鎖寿夫
V 検出遺構	田鎖寿夫
VI 出土遺物	光井文行

10. 挿図・図版及び写真図版の作成は、次の方々の御協力をいただいた。

川村京子、武蔵アサヨ、越場ミチエ、勝政タカ子、瀬川幸子、浅沼幸子、吉田律子、畠山静子、藤田美穂子、高橋不二、中屋敷ケイ子、田貝キミ子、天沼節子、佐藤和也、南館恭子、米内弘子、藤原聡、阿部静子、菅原郁子、佐藤カツ子、浅沼有子、田上ツカ、藤原清水恵

11. 図版及び本文中の方位は、磁北方向を指す。

本文目次

序

緒言

I. 調査に至る経過	1
II. 調査方法と室内整理の方法	4
III. 遺跡の立地	5
IV. 基本層序	6
V. 検出遺構と遺構内出土遺物	10
1. 堅穴住居址	
C-1 住居址	10
C-2 住居址	11
C-3・4 住居址	12~13
C-5 住居址	14
C-6 住居址	15
D-1 住居址	16
2. ピット	24
3. 焼土遺構	28
VI. 遺構外出土遺物	43
1. 土器	43
2. 石器	46
VII. まとめ	62
1. 遺構	62
(1) 縄文時代住居址	62
(2) ピット	63
(3) 焼土遺構	63
2. 出土遺物	63

図版目次

図版1	野駄遺跡と周辺の遺跡……………	3	図版15	遺構内出土土器(1)……………	33
図版2	土層柱状図……………	6		C-1住居址	
図版3	野駄遺跡グリッド配置図……………	7	図版16	遺構内出土土器(2)……………	34
図版4	野駄遺跡遺構配置図……………	8		C-1住居址	
図版5	C-1住居址(平面・断面)……………	18	図版17	遺構内出土土器(3)……………	35
図版6	C-2住居址(平面・断面)……………	19		C-1・2住居址	
図版7	C-3・4住居址(平面・断面)……………	20	図版18	遺構内出土土器(4)……………	36
図版8	C-5住居址(平面・断面)……………	21		C-3・4住居址	
図版9	C-6住居址(平面・断面)……………	22	図版19	遺構内出土土器(5)……………	37
図版10	D-1住居址(平面・断面)……………	23		C-3・4・5住居址	
図版11	……………	29	図版20	遺構内出土土器(6)……………	38
	a. C-51ピット(平面・断面)			C-6住居址	
	b. C-52ピット(平面・断面)			C-51・55ピット	
	c. C-53ピット(平面・断面)		図版21	遺構内出土土器(7)……………	39
	d. C-54ピット(平面・断面)			C-1住居址	
図断12	……………	30	図版22	遺構内出土石器類(1)……………	40
	a. C-55ピット(平面・断面)			C-1・3住居址	
	b. C-56ピット(平面・断面)			C-51ピット	
	c. C-57ピット(平面・断面)		図版23	遺構内出土石器類(2)……………	41
	d. C-58ピット(平面・断面)			C-1・5住居址	
図版13	……………	31	図版24	遺構内出土石器類(3)……………	42
	a. D-51ピット(平面・断面)			C-1・5住居址	
	b. D-52ピット(平面・断面)			C-51ピット	
	c. E-51ピット(平面・断面)		図版25~33	遺構外出土土器(1)~(9)…	48~56
図断14	……………	32	図版34~36	遺構外出土石器類(1)~(3)	57~59
	a. E-52ピット(平面・断面)				
	b. E-53ピット(平面・断面)				
	c. C-101焼土遺構(平面・断面)				
	d. E-101焼土遺構(平面・断面)				

写真図版目次

写真図版 1	66	b. C-6 住居址	
a. 遺跡航空写真		c. C-6 住居址炉	
b. 深掘土層断面		d. C-6 住居址炉 (断面)	
写真図版 2	67	写真図版 8	73
a. C-1 住居址 (土層断面)		a. D-1 住居址 (土層断面)	
b. C-1 住居址		b. D-1 住居址	
c. C-1 住居址炉		c. D-1 住居址炉	
d. C-1 住居址炉 (断面)		写真図版 9	74
写真図版 3	68	a. C-51ピット	
a. C-2 住居址		b. C-52ピット (土層断面)	
b. C-2 住居址炉 (断面)		c. C-52ピット	
c. C-2 住居址炉		d. C-53ピット	
写真図版 4	69	e. C-54ピット (土層断面)	
a. C-3・4 住居址 (土層断面)		f. C-54ピット	
b. C-3・4 住居址		写真図版 10	75
c. C-3 住居址炉		a. C-55ピット	
d. C-3 住居址炉 (断面)		b. C-56ピット (土層断面)	
写真図版 5	70	c. C-56ピット	
a. C-4 住居址炉		d. C-57ピット (土層断面)	
b. C-4 住居址炉 (断面)		e. C-57ピット	
c. C-4 住居址		f. C-58ピット	
埋設土器 (断面)		写真図版 11	76
写真図版 6	71	a. D-51ピット	
a. C-5 住居址 (土層断面)		b. D-52ピット (土層断面)	
b. C-5 住居址		c. D-52ピット	
c. C-5 住居址炉		d. E-51ピット	
d. C-5 住居址炉 (断面)		e. E-52ピット	
写真図版 7	72	f. E-53ピット	
a. C-6 住居址 (土層断面)		写真図版 12 遺構内出土土器(1)	77
		C-1 住居址	

写真図版13	遺構内出土土器(2)……………78	C-1・5住居址	
	C-1～5住居址	C-51ピット	
写真図版14	遺構内出土土器(3)……………79	写真図版17	遺構外出土土器(1)……………82
	C-1・6住居址	写真図版18	遺構外出土土器(2)……………83
	C-51・54ピット	写真図版19	遺構外出土土器(3)……………84
写真図版15	遺構内出土石器類(1)……………80	写真図版20	遺構外出土土器(4)……………85
	C-1・3・5住居址	写真図版21	遺構外出土土器(5)……………86
	C-51ピット	写真図版22	遺構外出土石器類(1)……………87
写真図版16	遺構内出土石器類(2)……………81	写真図版23	遺構外出土石器類(2)……………88

表 目 次

表1	遺構内出土石器類計測表……………60
表2	遺構外出土石器類計測表……………61

I 調査に至る経過

東北縦貫自動車道建設に関連する発掘調査は、昭和47年度から県教委社会教育課によって開始された。調査区は、一関市から盛岡市までの約90km間で、用地取得の先行した金ヶ崎町、北上市、花巻市に所在する遺跡が対象となった。しかし調査の進行と工事工程との間に大幅な差のある事や、東北新幹線関連の発掘調査も10月から開始される等の事情もあって調査体制の整備拡充が急務となり昭和48年4月に文化課を新設し、発掘調査体制の強化をはかった。

しかし、東北縦貫自動車道、東北新幹線、御所ダム、バイパス建設等、県内各地で大型開発事業が増大すると共に、その対応のための野外調査が先行し、調査結果の整理作業や報告書刊行が滞る状態となっていった。この事態の解決と恒久的な調査体制確立を図るため、昭和52年4月に財団法人岩手県埋蔵文化財センターが発足した。これによってこれまで県教委が行ってきた発掘調査は当センターが担当することとなった。

以上の経緯から東北縦貫自動車道西根インター以北における発掘調査は昭和53年度より当センターが道路公団との委託契約にもとづいて実施されている。

西根インター以北における調査対象遺跡の分布調査は文化課によって実施され、昭和48年度に2km巾で、さらに、49年度50年度とそれぞれ路線ルート確定までの段階で、500m巾、路線巾について行なわれた。その間、安代町所在の越戸館が道路公団との協議の結果、路線ルート変更することによって現状保存することができた。

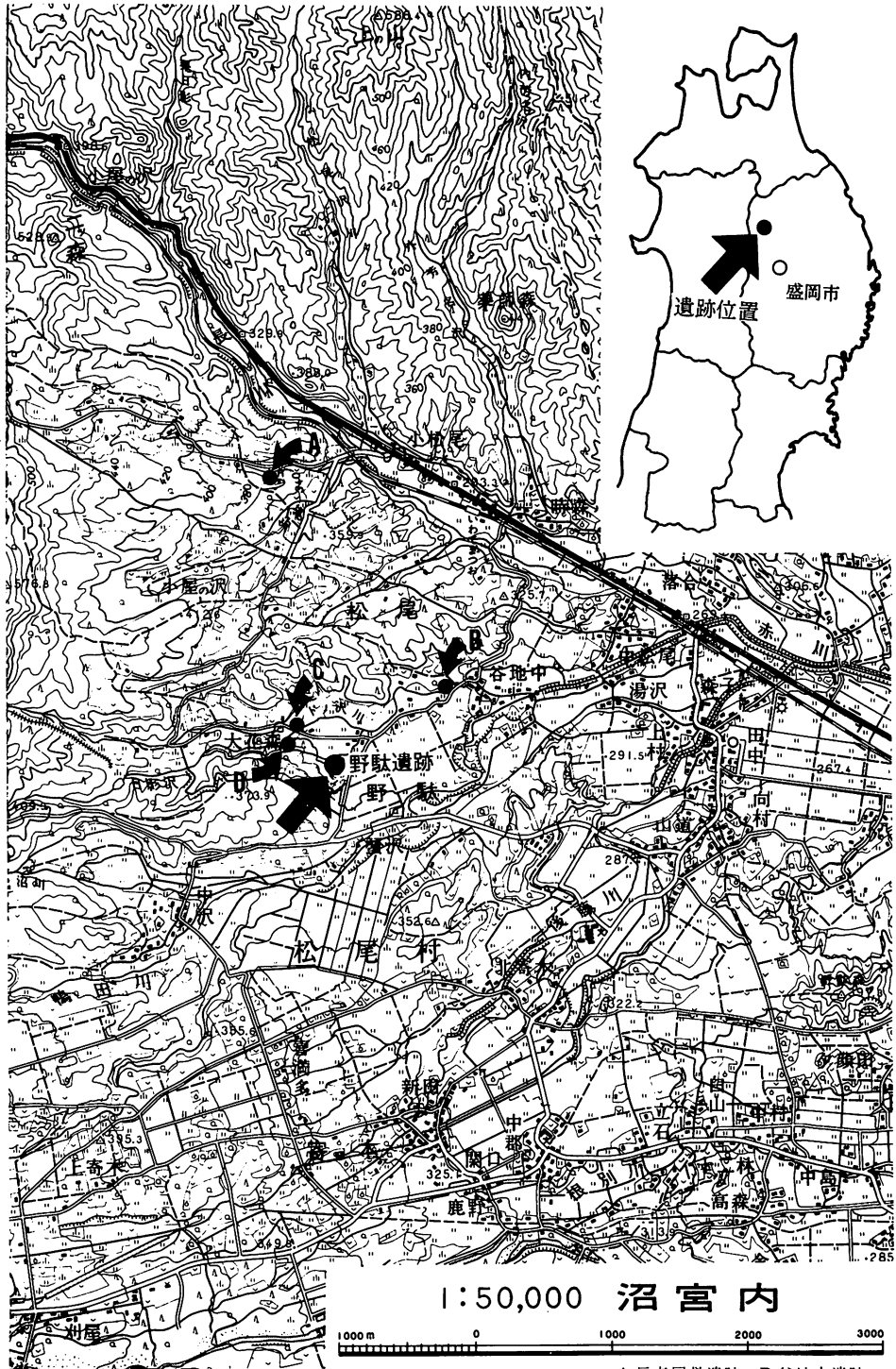
昭和53年度における発掘調査は、第4次施工区間の西根町、松尾村、安代町に所在する5遺跡が対象となり、西根町崩石Ⅱ遺跡、松尾村野駄遺跡、寄木遺跡については調査は完了した。

昭和54年度は前年度からの継続調査となった松尾村長者屋敷遺跡、安代町荒屋Ⅱ遺跡と新たに安代町赤坂田Ⅰ、赤坂田Ⅱ、安代寄木、扇畑Ⅰ、Ⅱ、荒屋Ⅰ、有矢野、上の山Ⅹ、越戸Ⅱ遺跡の11遺跡が調査対象となり、このうち安代町赤坂田Ⅰ、Ⅱ、扇畑Ⅱの遺跡については、粗掘、遺構検出のみの調査とし、他の遺跡については調査を完了した。安代寄木遺跡では遺構を検出できなかった。

昭和55年度は、前年度精査を残した安代町赤坂田Ⅰ、Ⅱ、扇畑Ⅱ遺跡の継続調査と、安代町上の山館、上の山Ⅶ、上の山Ⅺ、曲田Ⅰ遺跡の調査を行ない、松尾村ではインター設置との関連で、53年度調査した野駄遺跡にかかわる路線拡幅部分についても調査した。これらの調査をもって東北縦貫自動車道青森線関係における本県分の発掘調査は終了の見込みであったが、曲田Ⅰ遺跡の範囲が更に500m²西に広がることが確実となり、56年度継続調査となった。

野 駄 遺 跡

1. 遺跡所在地 岩手県岩手郡松尾村大字野駄第2地割字前森392
2. 調査担当者 田鎖寿夫、光井文行
3. 調査期間 昭和55年4月14日～6月7日
4. 調査対象面積 2,052㎡
5. 発掘面積 2,052㎡
6. 遺跡記号 ND-80



- A 長者屋敷遺跡 B 谷地中遺跡
- C 水切場遺跡 D 大花森遺跡

図版 1 野駄遺跡と周辺の遺跡

II 調査方法と室内整理の方法

1. 調査方法

(1) 座標軸の設定

今回の調査区域は、1978年度調査区域の西側にあたり、東西幅6m～18m、南北幅156m、面積2052㎡の範囲である。

調査時の遺構・遺物の平面測量及び整理を容易にするため、調査区域全体を平面直角座標によって区画した。その際に東北縦貫自動車道建設予定地西側に設けられた境界杭No.3とNo.4を結ぶ線、及びNo.4を通り前述の線と直交し、東西に伸びる線を基準線とし、磁北方向を北、反対方向を南とした。(図版3 グリッド配置図参照)

次に基準点を通り磁北と結ぶ線を、基準点を境にして30m毎の方眼に大区画し、基準点より磁北方向にB・A、反対方向にC・D・E・Fの地区名を付した。さらに30mの大区画を南北方向及び東西方向にそれぞれ10等分し、3m×3mのグリッドに細分した。

(2) 粗掘り・遺構検出

調査区域内における遺構の分布を把握するため、2グリッドを1単位として、西側から東側への傾斜面に沿って粗掘りを行なった。次に層位毎に遺構の有無を確認するため、少しずつ掘り下げ、遺構の検出を行なった。

また、旧石器が出土する可能性のある範囲については、1978年に調査を担当した、四井謙吉の指示の下に、C地区東斜面、約48㎡にわたって、2m四方のグリッドを設定し、包含層と思われる、黄褐色土層(第Ⅳ層)と、さらににぶい黄褐色土層(第Ⅴ層)まで掘り下げ、精査した。

(3) 精査方法と遺構登録

遺構精査は、住居址では四分法、ピット類では二分法によって行なった。検出された遺構には住居址は1～、ピット類には51～、焼土遺構は101～と一連の番号を付し、大区画したアルファベットを組み合わせて、C-1住居址、C-51ピット、C-101焼土遺構のように登録した。

尚、精査の段階において、住居址やピット類の埋土が単層であるものについては、その性状をフィールドカードに記載し、土層断面図の作成を省略した。

(4) 実測方法

実測は、遣り方測量の方法によって行なった。

実測図の縮尺は、 $\frac{1}{50}$ を原則とした。また、遺構のレベル計測地点は、50cm間隔に設けたが、状況に応じて計測の間隔を細かくした。

(5) 写真撮影

写真撮影は、遺構精査の各段階において、断面写真、完掘り写真及び炉の平面、断面写真を実測の前に実施するようにした。写真には、6×7cm版カメラ1台と35mm版カメラ2台を1セットとして使用した。撮影に際しては、当埋文センター作成による撮影カードを使用し、整理の際に資料とした。撮影は、調査員の指示のもとに、協力員松村公が担当した。

(6) 任務分担・その他

調査を行なうにあたって、田鎖は主に対外交渉を、光井は主に野外作業に関する指示・点検を行なった。遺跡からの情報収集にあたっては、当埋文センターが作成したフィールドカードを使用した。

2. 室内整理の方法

室内整理作業は、遺構図面の点検及びトレースと遺物の仕分け、復元を並行して進めた。その後に遺物の実測、拓本、トレース、図版作成と順次行なった。これらの作業は、調査員の指示・点検のもとに室内作業員が担当した。

尚、遺構図版の掲載にかかわる表示、縮尺、指示等は図版凡例に記す。

III 遺跡の立地

野駄遺跡は、岩手郡松尾村野駄第2地割字前森392にあり、国鉄花輪線岩手松尾駅より南西約2km、松尾村役場の西2.8kmの地点付近に位置する。ここからは、西は標高1,614mを最高峰とし、岩手・秋田県境にまたがる八幡平火山群を、南には古くから巖鷲山と呼称された、標高2,040.5mの岩手山を眺望することができる。又、東方から南東にかけては、送仙山(472.4m)・白屋山(428.2m)・丹谷山(397.3m)・野駄森(397.3m)などの孤立的山体がある。

遺跡の西側一帯には、八幡平火山群の1つ、標高1,304.7mの前森山から東に張り出す丘陵地が続く。遺跡はこの丘陵地の東端、小判状に張り出した小丘陵東麓部、標高約290m～300mの東傾斜面上に載る。この小丘陵の北側と南側は、前森山山腹を基流とし、東方向へと流れるシドノ沢川とアセ沼川の開析谷にそれぞれ面している。この2つの川は、東方向から北東方向に蛇行を繰り返しつつ流れ、小丘陵から約1.7kmの地点で合流し、赤川へ注ぐが、その沿岸部には低位段丘が形成されている。

周辺の遺跡としては、長者屋敷遺跡(1978・1979年 高橋他)、水切場遺跡(1958年・鈴木)大花森遺跡、谷地中遺跡などがある。

IV 基本層序

調査区の中央部、C地区東斜面下地点での土層堆積状況は、次の通りである。

0層 (10Y R $\frac{4}{4}$ 褐色土層) 表土

I層 (10Y R $\frac{2}{3}$ 黒色土層) 砂質のクロボクであり、やわらかく粘性はない。上部に黒褐色土が帯状にはいる。この層の下部及びII層の上部には、白色細粒浮石がブロック状にはいる。

II層 (10Y R $\frac{3}{4}$ 暗褐色土層) 火山灰起源のシルト層であり、やわらかく、炭化物を微量に含む。

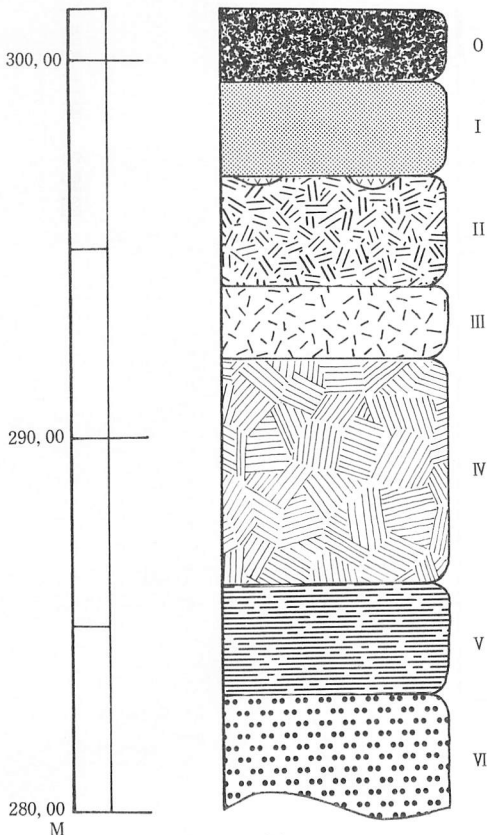
III層 (10Y R $\frac{2}{1}$ 黒色土層) シルト質のや、粘性をもつクロボクであり、暗褐色土が斑状に混在する。この層はC区では厚く(約40cm)、南北に延びるほど薄くなり、最後には消失する。縄文時代の遺物を包含する層である。

IV層 (10Y R $\frac{5}{6}$ 黄褐色土層) 火山灰起源のシルトであり、粘性がある。この層は北に延びるほどIII層との区別がつけにくい。

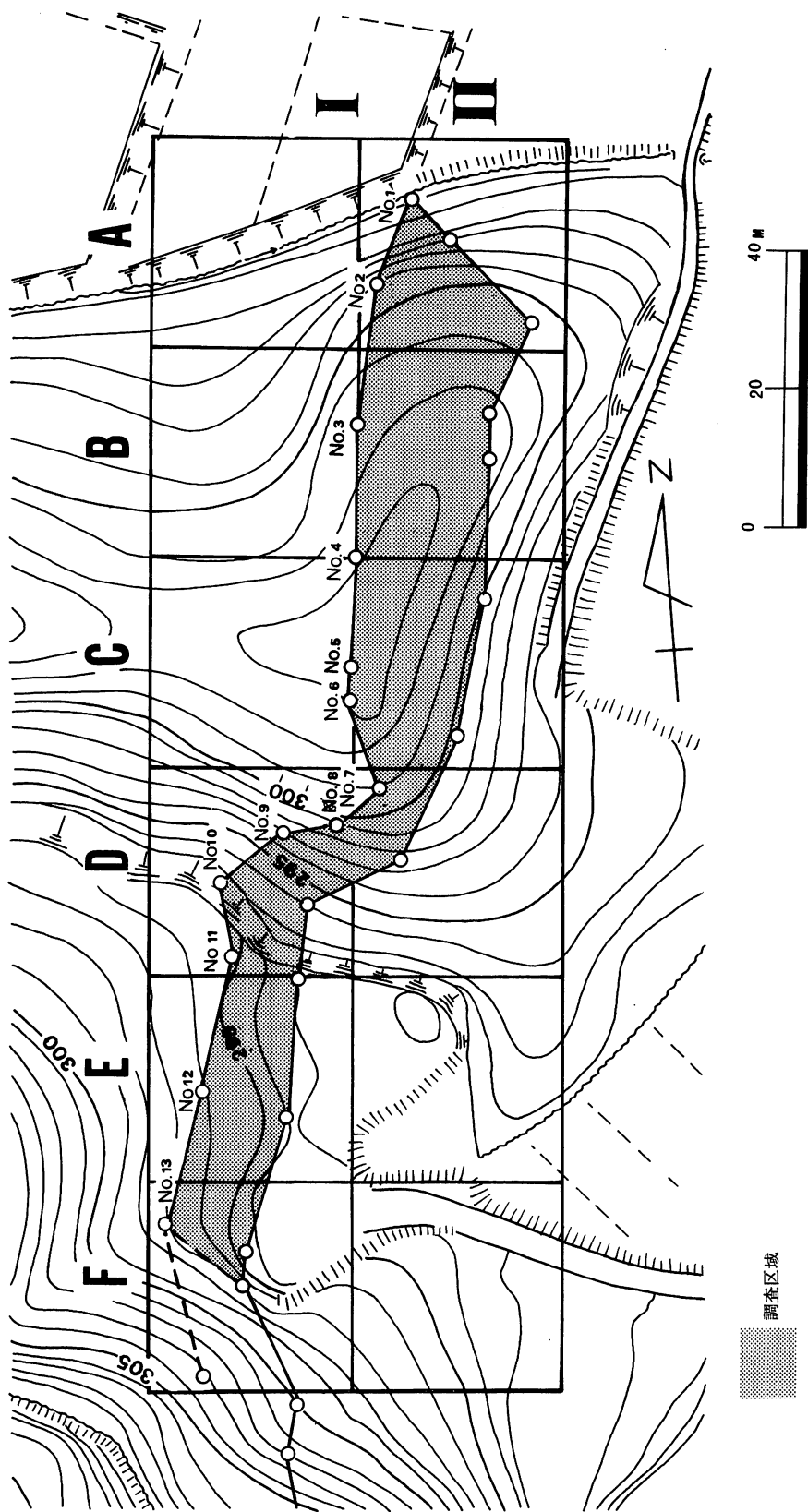
V層 (10Y R $\frac{5}{4}$ にぶい黄褐色土層) 細粒火山灰起源の粘土層で、上部に橙色パミス、白色パミスを包含する。下部は上部よりや、褐色の色調が強くなり、橙色パミスの包含層も少なくなる。

VI層 (10Y R $\frac{6}{6}$ 明黄褐色土層) 火山灰起源の粘土層で、シルトを含む。

筆者が実際に、C地区東及び南斜面と、F地区斜面の断面から、基本層序を検討した結果、1978年に調査した層序と一致をみたので、前回の調査のものに従った。



図版2 土層柱状図



図版3 野駄遺跡グリッド配置図



図版4 野駄遺跡遺構配置図

(1978、1980)(▲は1980調査で検出された遺構)

V 検出遺構と遺構内出土遺物

1. 竪穴住居址

C-1 住居址

遺 構 (図版5・写真図版2)

斜面最上部の、一部平坦面にかかるところで検出された。

斜面下方の東壁の一部は、攪乱を受けており、確認できなかった。東壁北寄り際の床面には、若干の掘り過ぎが見られる。平面形は、南北に長軸をもつ楕円形を呈し、規模は、東西径約4.0m、南北径約5.0mを測る。

埋土は、上位が黒色土であり、中央上部に白色細粒浮石がレンズ状に堆積する。中位から下位は、褐色土で構成され、いずれの層にも炭化物が包含される。

壁高は、東壁で約7cm、西壁で約60cm、南壁約25cm、北壁約40cmを測る。

床面は、ほぼ平坦で堅くしまっている。

柱穴状ピットは、P₁ (径約24cm、深さ16cm)、P₂ (径約30cm、深さ約16cm)、P₃ (径約54cm、深さ約36cm)、P₄ (径約26cm、深さ約38cm)、P₅ (径約24cm、深さ約29cm)、P₆ (径約30cm、深さ約6cm)、P₇ (径約24cm、深さ約22cm)、P₈ (径約25cm、深さ約16cm)、P₉ (径約40cm、深さ約20cm)の9個検出されているが、この住居址に伴う柱穴及び柱穴配置は、不明である。

炉は、地床炉の形態を示し、床面中央部から、やや東寄りに位置する。この地床炉は、床面より約5cm～7cmの盛り上がりを示し、径約55cm×90cmの不整形の範囲にわたって火熱をおびている。特に、この範囲の中央部には、2ヶ所の強く火熱をおびているところがあり、その層厚は約3cmと4cmを測る。この炉の東側には、これと隣接して、径約20cm×38cmの直角礫が置かれている。

出土遺物 (図版15～17-1～39・21-78～79・図版22～24・写真図版12～16)

出土した土器はすべて埋土中からのものである。土器の中で1個体に復元できたものはなく、すべて口縁部、体部、底部の破片である。1は隆線によって渦巻文が構成されているものである。口縁は平縁で、口唇部が脹んでその断面形が丸味をもった逆三角形を呈している。口縁部は内彎している。2・3は1と同一個体のもと思われる。縄文の原体は単節のLRである。1群の1類(※1)の中でも古い方に属するものと思われる。4～7、78は口縁部に隆帯を付し、その面上に刺突工具で連続的に圧痕を施したものである(I群2類)。8は波状の口縁で、それ

に沿って2本の隆帯が貼付されているものです。隆帯の面および縁辺には、捺糸圧痕文が施文されている（I群2類）。9～7は無文の地文に沈線によって平行文、曲線文、入組状文が施されているものである（II群2類）。18は横位と縦位に隆帯をめぐらせ、さらに隆帯と隆帯の交わる点にはボタン状突起が付けられているものである。文様は無文の地文に沈線によって曲線文が施されている（II群2類）。19は口縁に沿って2条の平行沈線をめぐらせ、沈線で囲まれた外側を磨り消して帯縄文をつくりだしているものである（II群4類）。20～27は無節（原体はR、L）、単節（原体はLRが主体）を施文とする縄文土器片である（II群5a・b類）。28～33は無節の縄文、34～37は単節の縄文を地文とする底部片である。32と35の底部には網代目文様の圧痕がみられる。38と39は同一個体のもので、体部に網目状捺糸圧痕文が施されている。79は単節（LR）の縄文を地文として、縦位の綾絡文が体部中位まで施されているものである。

石器類は埋土から石鏃1点（1）、スクレイパー2点（4、6）、使用痕のある剥片3点（2、3、5）、凹石1点（11）、磨石2点（10、12、16）の10点が出土している。4、6は縦長の剥片の片面の2辺に連続的に二次加工を施し、刃部をつくりだしている。2、3、5は不定形の剥片で1辺または2辺に使用痕が認められるものである。11は楕円形の川原石を使用したもので、両面に複数の凹孔を有している。10、12、16は片面または両面に擦痕および敲打痕の認められるものである。（石質などについてはP60の計測表を参照）

この住居址は出土遺物から縄文中期末葉から後期前葉に属するものと思われる。

※1・この分類名は遺構外出土土器の分類にもとづいたものである。P43参照

C-2住居址

遺 構（図版6・写真図版3）

西側平坦面から一部斜面にかゝるところ、C-1住居址の南西側に検出された。層位を見る為設定したセクションベルトを取り除く途中、その中から石囲い炉が検出されたが、調査時の不注意により、既に床面を削剥してしまっていた。従って、埋土断面図を取ることができなかった。埋土の上位は、黒色土であり、上部に白色細粒浮石がブロック状にはいついた事以外、埋土状況の詳細は不明である。

壁は、西壁、北壁、南壁の一部を確認できたが、東壁は確認できなかった。壁高は、西壁で約30cmを測る。

平面形・規模は、残存する壁の位置関係から推定すると、南北に長軸をもつ楕円形を呈し、東西約2.5m、南北約3.6mの住居址であると思われる。

床面は、残存する部分から見限り、ほぼ平坦でやわらかい。柱穴状ピットについては、1個も検出できなかった。

炉は、中央部よりやや南寄りに位置し、石囲い炉の形態を示す。規模は径約40cm×45cmを測

り、径約13cm～28cmの5個の垂角礫で構成される。これらの構成礫は、床面下約3cm～6cmの深度で埋められている。部内は赤く焼きしまり、その層厚は約4cmを測る。

この住居址内には、北壁に接する形で、C-52ピットが検出されている。

出土遺物（図版18-40～43・写真図版13）

土器はすべて埋土から出土したものである。その数量は少ない。40～41は隆帯を横位、縦位に貼付し、面上を刺突具で連続的に圧痕を施したものである（I群2類）。40は横位の隆帯に沿って縁辺に刺突文が施されている。42は単節の縄文の地文に沈線で平行文・曲線文が施されているものである。43は沈線によって平行文、渦巻文が構成されているものである。口縁部の上下に各々3条の平行沈線をめぐらし、その間を渦巻沈線文で施文している。口唇部の面上には半截竹管文が施されている。主に口縁部から下位に無節の縄文が施文されている。

石器は出土していない。

床面直上から土器が出土していないことからこの住居址の時期については明確にできないが、埋土からの出土土器から縄文中期末葉から後期前葉に位置づけられると思われる。

C-3住居址

遺構（図版7・写真図版4）

斜面最上部の一部平坦面にかかるところ、C-2住居址の南側で検出された。

北壁の一部は、C-52ピットに切られており、斜面下方の東壁は、既に削剝を受けており、確認することができなかった。又、調査員の不手際から、西壁の半分以上を破壊してしまった。

平面形は、残存する壁の位置関係から推定すると、隅丸方形を呈し、規模は、東西及び南北共に約3.1mの住居址であると思われる。

埋土は、上位が黒褐色土、中位が暗褐色土であり、上位と中位の境に白色細粒浮石が帯状にはいる。下位は褐色土で占められる。

壁高は、北壁で約8cm、南壁約12cm、西壁約12cmを測る。

床面は堅くしまり、凹凸が激しい。

柱穴状ピットは、P₁（径約17cm、深さ約20cm）、P₂（径約24cm、深さ約40cm）、P₃（径約25cm、深さ約18cm）、P₄（径約24cm、深さ約6cm）、P₅（径約19cm、深さ約21cm）、P₆（径約25cm、深さ約19cm）、P₇（径約20cm、深さ約13cm）の7個検出されているが、この住居址に伴う柱穴及び柱穴配置は不明である。

炉は、地床炉の形態を示し、床面のほぼ中央部と、中央部よりやや南東寄りにそれぞれ1基ずつ設けられており、いずれの地床炉も床面とほぼ同じレベルである。中央部に設けられている地床炉は、径約30cm×47cmの不整形の範囲に、又、中央部よりやや南東寄りの地床炉は、径約32cm×42cmの不整形円形の範囲にそれぞれ火熱をおび、その層厚は約4cmと約8cmを測る。

出土遺物（図版18、19-44~49、51・図版22-7、8・写真図版13、15）

出土した土器は少量である。44、45は縦位の撚糸圧痕文を地文とし、沈線で縦状に直線文、曲線文が施されているものである（II群2類）。47~49は単節の縄文を地文とする粗製土器である（II群5b類）。これらは埋土から出土している。51は床面直上から出土したもので、底部が欠損している。無節の縄文を地文とする粗製土器である（II群5a類）。平縁で口縁部は内彎している。

石器は埋土から石匙1点（7）、不定形石器1点（8）が出土している。7はつまみ部を上にした場合横長の形を呈するものである。つまみは両側面からノッチを入れ両面加工してつくりだされている。8は不整形な剝片で、その一辺の両面が部分的に二次加工されている。

この住居址は出土遺物などから縄文後期前葉に位置づけられるものと思われる。

C-4住居址

遺構（図版7・写真図版4・5）

C-3住居址の床面を約5cm掘り下げた段階で、C-3住居址地床炉の北東寄りに複式炉が検出された。住居址の形状・規模は全く把握することができなかったが、C-3住居址床面及び地床炉のレベルより低いことから、明らかにC-3住居址より古い時期に構成、使用されたものであり、C-4住居址と登録した。

この複式炉は、土器埋設部と石囲い部から構成され、全長約80cmを測る。

土器埋設部は、石囲い部から約20cm南東寄りに位置し、上部が破損した土器を斜位の状態で埋設している。この埋設土器の周囲は、約45cm×50cmの不整形の範囲にわたり火熱をおび、その層厚は約8cmである。

石囲い部は、北西から南東に約35cm、北東から南西に約70cmの規模をもち、北西側と南西側の一部を開く形でコの字型に礫が埋められている。これらの構成礫には、粒径約11cm~35cmの亜角礫6個を使用し、いずれも床面下約2cm~3cmの深度で埋め込んでいる。部内はいくらか火熱をおび、土器埋設部に近づくにつれて、赤く焼きしまっていく。

この複式炉から南側には、西から東にかけて、ほぼ直線上に配列された7個の亜角礫が検出されているが、これらの礫が、住居址に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物（図版19-50）

出土した土器は複式炉に埋設されていた土器（口縁部、底部欠損）1個だけである。土器は体部が内彎し無節の縄文を地文とする深鉢形の粗製土器である。

石器は出土していない。

この住居址の時期についての詳細は不明であるが、炉の形式が埋設土器を伴う複式炉であることから縄文中期後葉以降に位置づけられるものと思われる。

C-5 住居址

遺構 (図版8・写真図版6)

C-1 住居址の東側、斜面上で検出された。

平面形は円形を呈する。規模は、斜面下部が削剝されていた為、東壁は確認することができなかったが、残存する壁の位置関係から推定すると、東西、南北とも径約 2.7m の住居址であると思われる。

埋土は主に黒褐色土で構成され、炭化物、焼土粒を微量に含む。

壁高は、西壁で約45cm、南壁で約10cm、北壁で約17cmを測る。

床面はやゝ凹凸があり、全面的に堅く、特に西側は非常に堅い。

柱穴状ピットは、P₁ (径約18cm、深さ約14cm)、P₂ (径約18cm、深さ約10cm)、P₃ (径約30cm、深さ約13cm)、P₄ (径約40cm、深さ17cm)、P₅ (径約20cm、深さ約50cm)、P₆ (径約60cm、深さ約24cm)、P₇ (径約37cm、深さ約31cm)、P₈ (径約30cm、深さ約7cm)、P₉ (径約20cm、深さ約13cm)、P₁₀ (径約20cm、深さ約7cm) の10個が検出されているが、この住居址に伴う柱穴及び柱穴配置は不明である。又、これらのほかに、P₃ピットを切って、P₁₁ (径約64cm、深さ約18cm)ピットが検出されているが、前述のピットより新しく、この住居址に伴うものかどうかは不明である。

炉は、中央部よりやゝ南寄りに位置し、石囲い部と前庭部から成る複式炉の形態を示す。

石囲い部は、北西から南東に約50cm、北東から南西に約45cmを測り、粒径約7cm～30cmの垂角礫を7個長形状に、床面下約6cm～12cmの深さに埋め込んでいる。これら構成礫のうち1個は、台石を転用したものである。これらの礫の内外と底部には、埋める際、床面を掘り込んだと思われる痕跡が認められた。部内の中央部は、火熱によって赤変しているが、その層厚は約5mmであり、長期にわたって使用された痕跡は見られない。

前庭部は、両側を粒径約20cm～30cmの垂角礫3個で床面と区画されており、南西から南東方向にゆるやかな傾斜をもち、床面のレベルより約10cm～20cm低くなる。部内の土は非常に堅くしまり、やゝ凹凸がある。火熱による赤色変化は見られない。

出土遺物 (図版19-52~55・図版23、24・写真図版13、15)

土器は埋土から少量出土している。52、53は沈線によって直線的区画文を施しているものである。縄文の原体は単節のLRである。54、55は底部片で無文の地文になっている。

石器は凹石1点(13)、台石が2点(15、17)が住居址に伴って出土している。13は複式炉の構成礫の上ののっていたものである。楕円形状の川原石を使用し、両面または片面に複数の凹孔、擦痕、敲打痕を有している。17は複式炉のすぐ脇の床面直上で検出されたものである。片面が擦り減ってなめらかな面を呈している。15は複式炉の構成礫の1つになっていたものであ

る。

この住居址は大木10式に比定される土器片が埋土最下部から出土していることから、縄文中期末葉に位置づけられるものと思われる。

C-6 住居址

遺構 (図版9・写真図版7)

上部平坦面と斜面の境界部、C-1住居址の北側で検出された。

平面形は円形を呈す。規模は斜面下部が削剝されており、東壁を確認することができなかったが、残存する壁の位置関係から推定するに、径約3.4mの住居址であると思われる。

埋土は、暗褐色土の単層であり、パミスを含み、粘性をもつ。

壁高は北壁で約30cm、西壁約23cmを測る。

床面は平坦である。

柱穴状ピットは、P₁ (径約21cm、深さ約33cm)、P₂ (径約23cm、深さ約43cm)、P₃ (径約22cm、深さ約7cm)、P₄ (径約29cm、深さ約32cm)、P₅ (径約26cm、深さ約48cm)、P₆ (径約21cm深さ約38cm)の6個が検出されている。

これらのうち、主柱穴を構成すると思われるのは、P₁、P₂、P₄、P₆の4個であるが、削剝を受けていた東側にも、1個の主柱穴があったものと思われる。

炉は、中央部より東寄りに位置し、火熱による赤変部分に接する形で、北側に1個、南側に1個あることから、石囲い炉の形態をもつものであったと考えられる。この2個の構成礫は、粒径約25cmと20cmの亜角礫で、床面下約15cmの深度に下半分が埋め込まれている。他の構成礫は、住居址が廃絶される時点において、あるいは、後世の耕作等によって取り除かれたものと思われる。部内の火熱による赤変部分は、径約40cm×55cmの不整楕円形状に広がり、その層厚は約5mm～3cmの範囲で、焼きしまっている。

この住居址の中央部には、炉に接する形で、C-54ピットが検出されている。このピットは円周部を除いて、上部のほとんどが粘性ある黄褐色土で閉覆されていた。

出土遺物 (図版20-56~59・写真図版14)

土器は少量ですべて埋土から出土している。56、57は無文の地文に縦位の撚糸圧痕文が施されているものである(II群4類)。58、59は底部片である。58の底面には網代目文様の圧痕がみられる。

石器は出土していない。

この住居址の時期は出土遺物などから考えて、縄文後期前葉に位置づけられるものと思われる。

D-1 住居址

遺構 (図版10・写真図版8)

C区とD区にかかる、南斜面上部で検出された。

住居址の半分は西側の調査区域外にのびている。南斜面は既に削剥されており、東側もC-4住居址に切られているため、検出されたのは北壁の一部と石囲い炉半分、それに柱穴状ピット1個のみである。

平面形は、わずかながら検出された北壁から推定するに、円形状を呈するものと思われるが、規模については不明である。埋土は主に褐色土で占められる。壁高は北壁で約20cmを測る。

床面の状況については、検出面が少ないことから明確にはできない。

柱穴状ピットは、中央部よりやや、南側と思われる位置に1個、P₁（径約14cm、深さ約9cm）検出されているが、この住居址に伴うものかどうか不明である。

炉は石囲い炉の形態を示し、半分は西側の調査区域外に伸びている為、全容をつかむことはできないが、径約20cmと24cmの亜角礫2個が検出され、南側の削剥されている部分からも、礫が埋置された痕跡が認められた。部内は不整形の範囲に焼成をおびているが、その規模については不明である。

出土遺物はない。

この住居址の時期は、遺構の半分以上が調査区域外にあって未精査であることや、時期の決められる出土遺物が検出されていないことから、その詳細については不明である。

図版凡例

1. 遺構図版の掲載は次の通り行なう。

- (1) 住居址は原則として、土層断面図・平面図・炉断面図を掲げる。但し、図面の不備等の理由から掲載を省略する場合もある。
- (2) ピット類は原則として、土層断面図・平面図を掲げる。但し、土層が単一層の場合は土層断面図を省略し、断面図を掲げる。
- (3) 焼土遺構は原則として、平面図と土層断面図を掲げる。

2. 図版中の縮尺及び表示は次の通りである。

(1) 縮尺




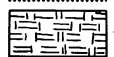
(イ) 図版中の縮尺

住居址 $\frac{1}{40} \sim \frac{1}{60}$ 住居址炉 $\frac{1}{40} \sim \frac{1}{60}$ ピット類 $\frac{1}{60}$ 焼土遺構 $\frac{1}{60}$
 土器拓本 $\frac{1}{2}$ 石器 $\frac{1}{2} \sim \frac{1}{3}$ (一部不定縮尺)

(ロ) 写真図版の縮尺

土器 $\frac{1}{2}$ 石器 $\frac{1}{2}$ (一部不定尺)

(2) スクリーン・トンと表示

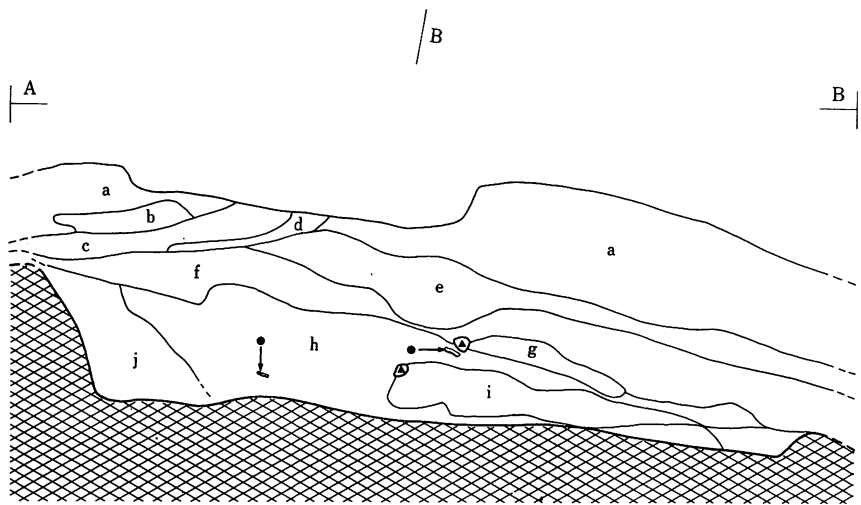
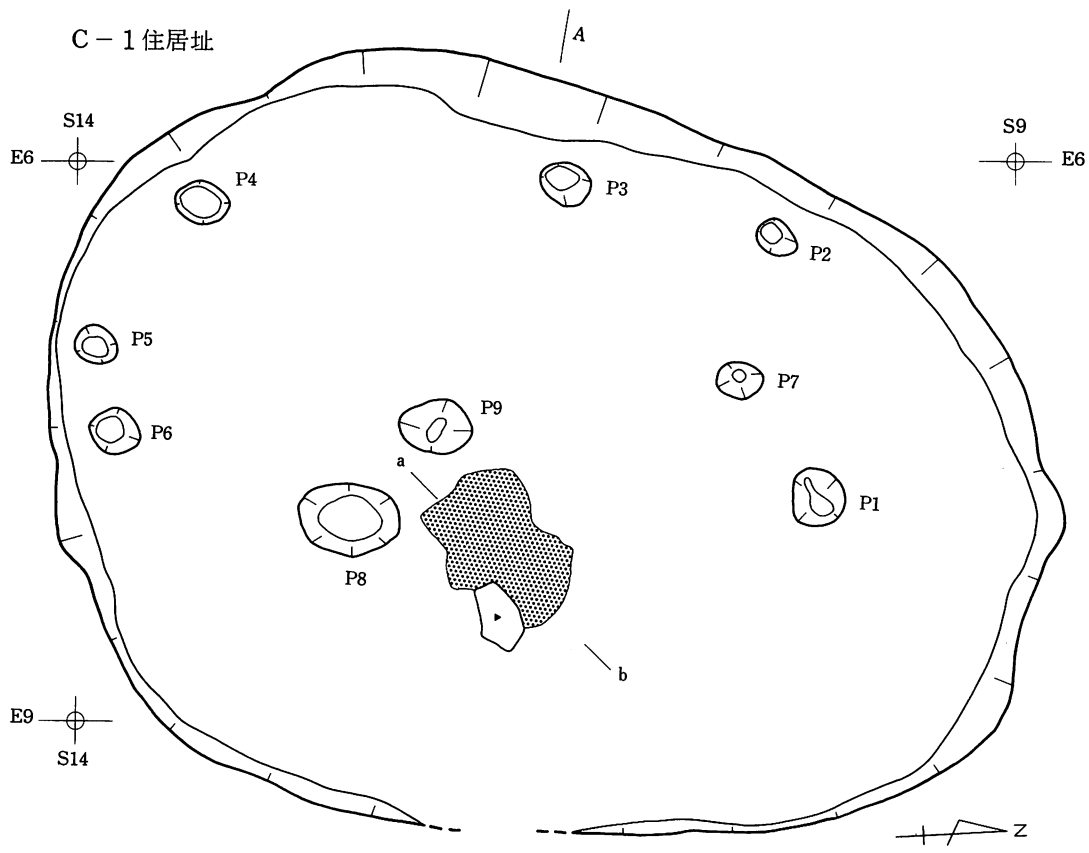
	— 白色細粒浮石		— 焼土
	— 地山		— 炭化材

(3) 記号の表示

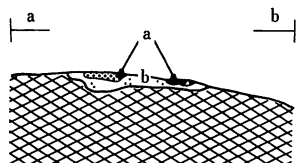
▲ — 礫 ● — 土器 ⊙ — 遣り方座標 ↑ — 磁北
 P₁・P₂……P_n — 柱穴ナンバー

(4) 線による表示

————— — 風倒木・木根などによる攪乱部分 (攪乱という記入)
 - - - - - — 掘りすぎ部分 (掘りすぎという記入)
 - · - · - · - — 調査区域外との境界線

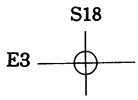


- a. 褐色土
- b. 暗褐色土 (含炭化物)
- c. 暗褐色土 (含炭化物)
- d. 褐色土 (含炭化物)
- e. 黑褐色土 (含炭化物)
- f. 褐色土 (含炭化物)
- g. 褐色土 (含炭化物)
- h. 暗褐色土 (含炭化物)
- i. 褐色土 (含炭化物)
- j. 褐色土

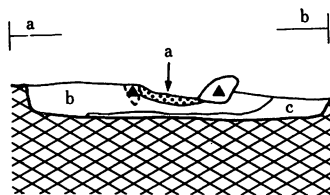
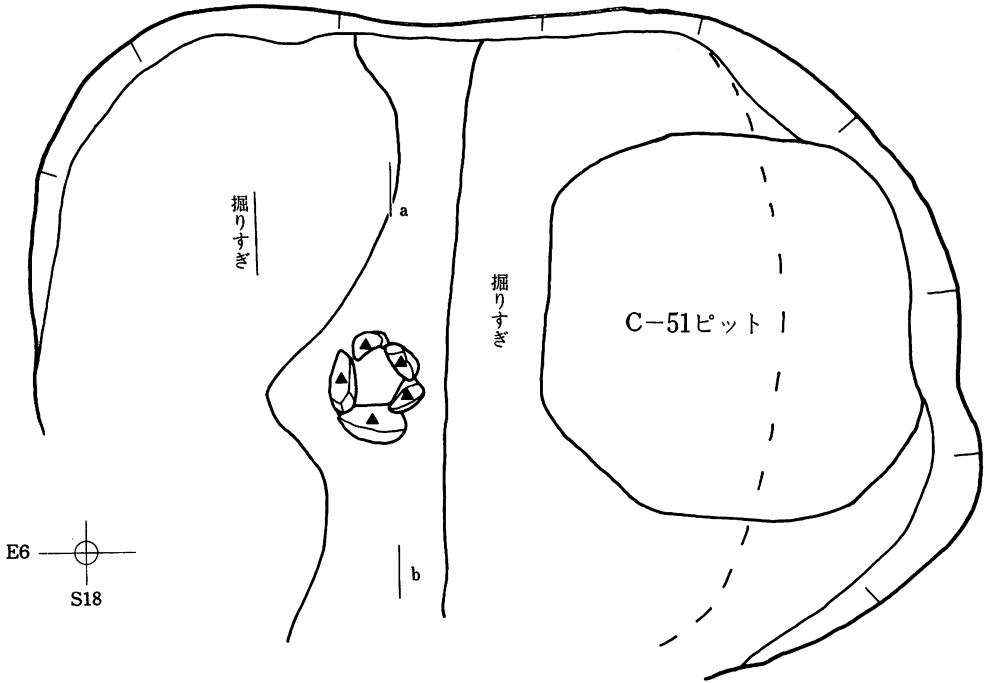
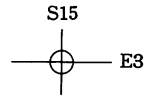


- a. 烧土
- b. 明褐色土 (含烧土)

图版 5

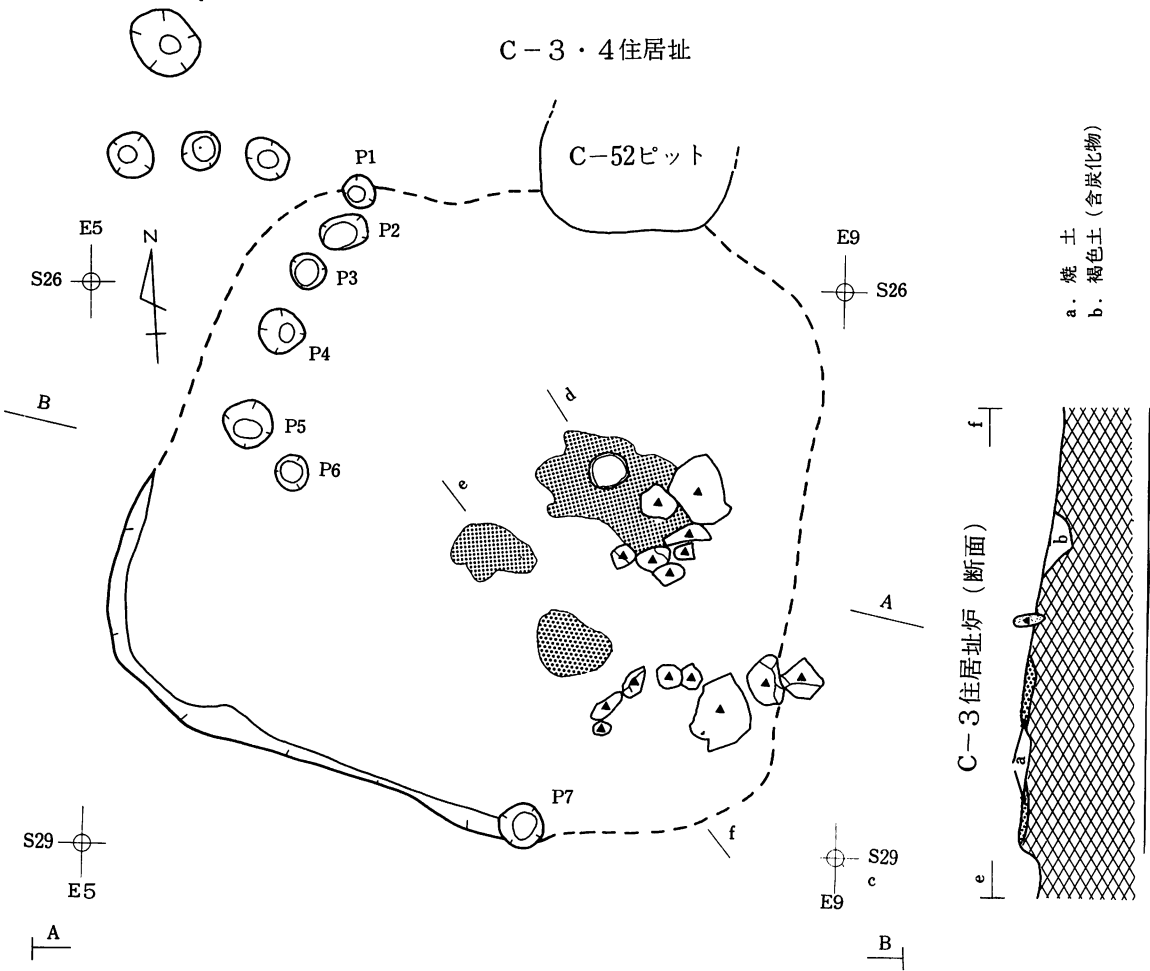


C-2住居址

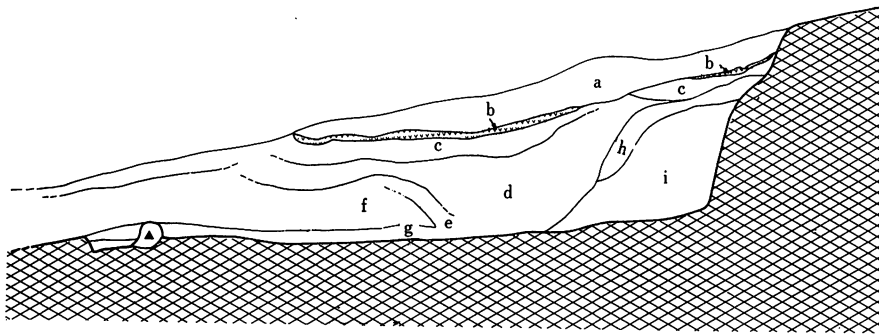
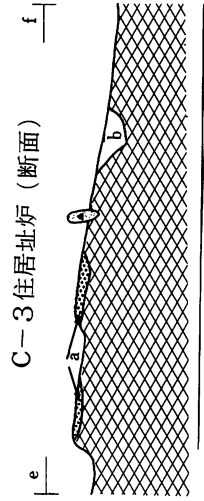


- a. 焼土
- b. 褐色土
- c. 褐色土

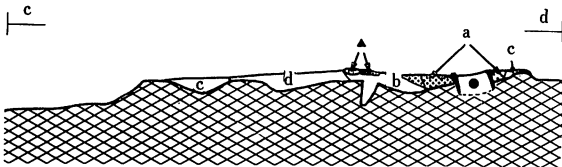
C-3・4住居址



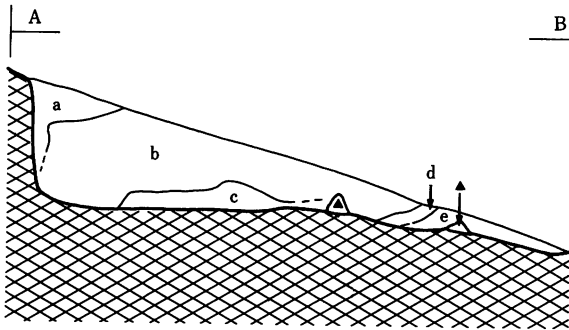
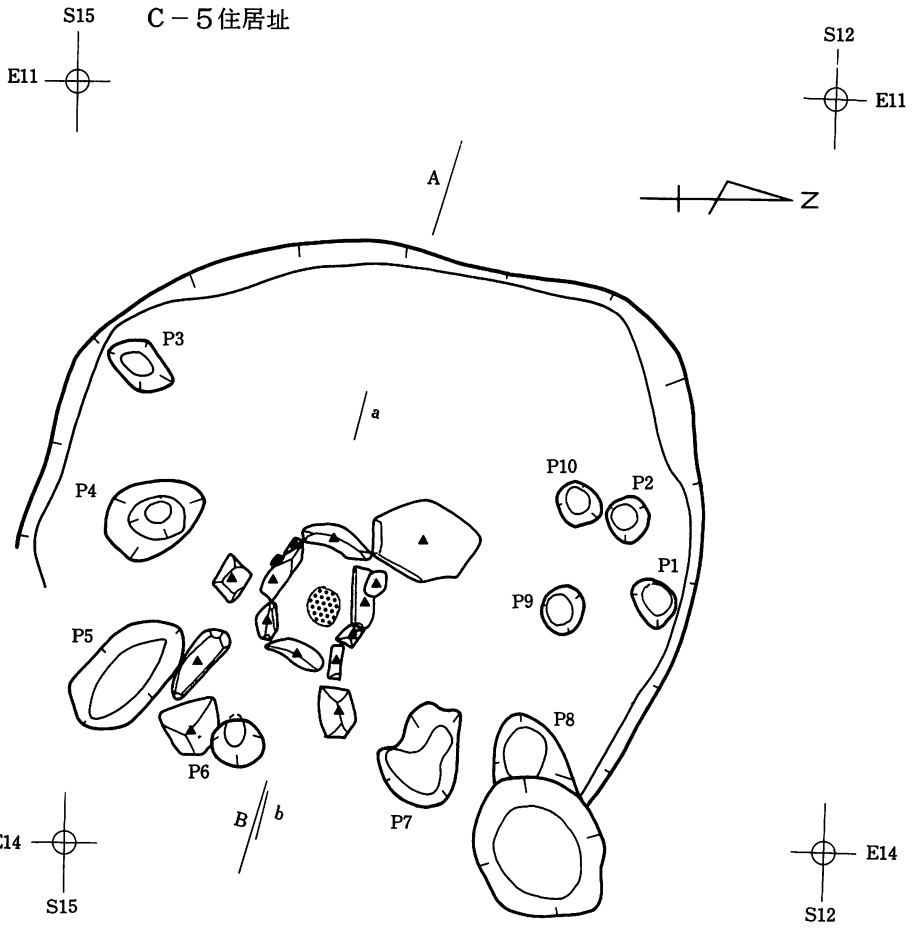
a. 焼土 (含炭化物)
b. 褐色土 (含炭化物)



a. 黒褐色土
b. 白色細粒浮石
c. 暗褐色土 (含炭化物)
d. 極暗褐色土 (含炭化物)
e. 暗褐色土 (含炭化物)
f. 褐色土 (含炭化物)
g. 褐色土 (含炭化物)
h. 褐色土 (含炭化物)
i. 暗褐色土

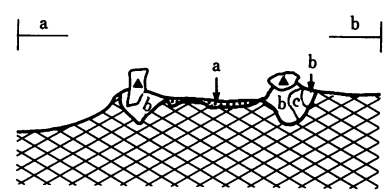
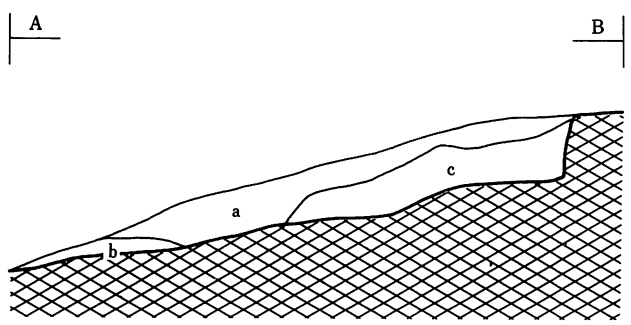
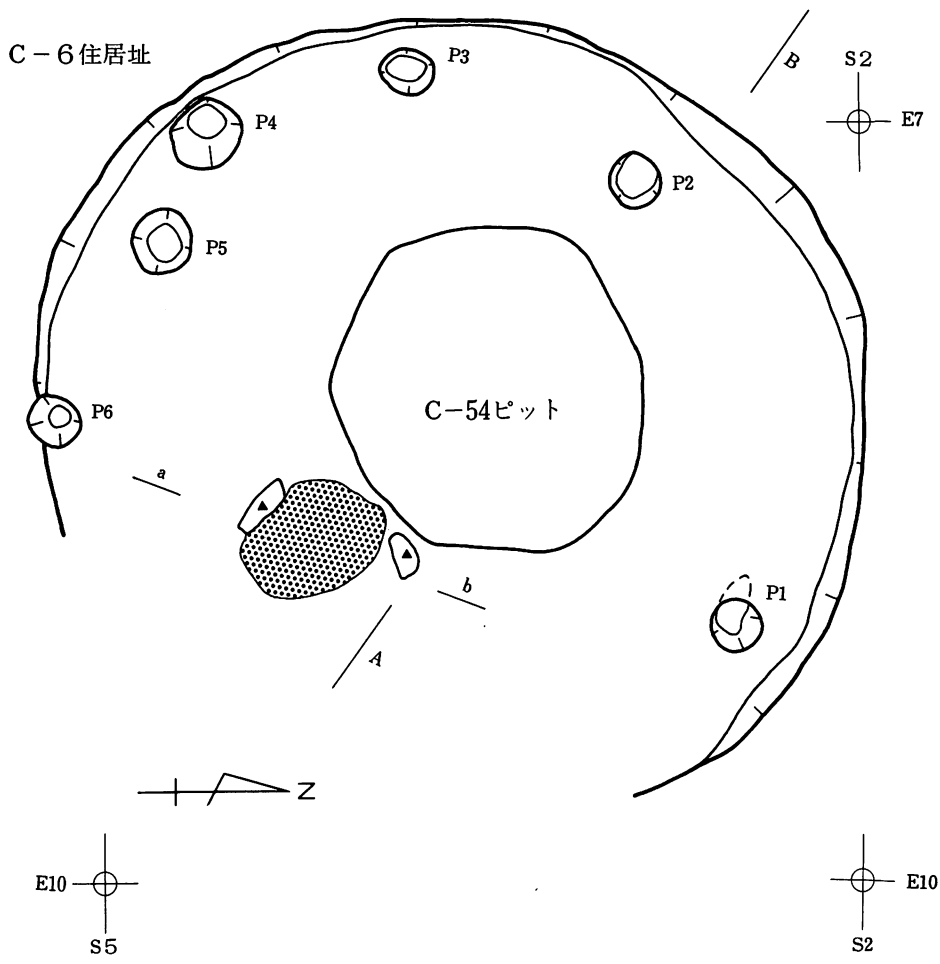


a. 焼土
b. 褐色土 (含焼土、炭化物)
c. 褐色土 (含炭化物)
d. 明褐色土



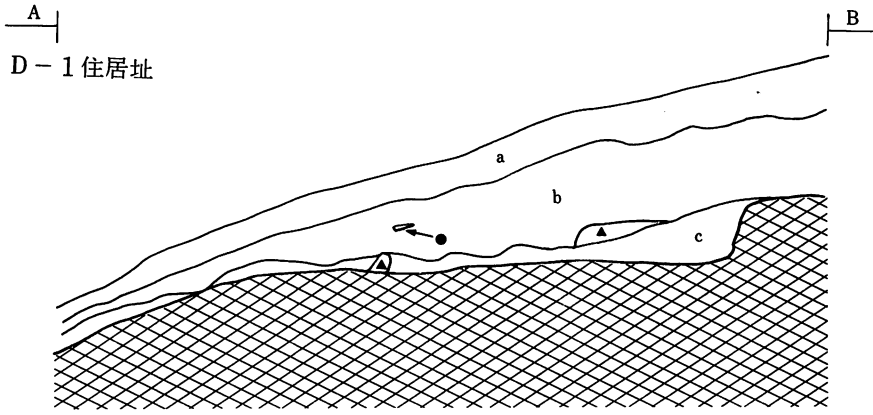
- a. 褐色土(含炭化物)
- b. 黑褐色土(含炭化物、烧土)
- c. 暗褐色土(含炭化物)
- d. 暗褐色土(含烧土)
- e. 暗褐色土(含炭化物)

- a. 烧土
- b. 褐色土(含炭化物)
- c. 褐色土
- d. 暗褐色土(含烧土)

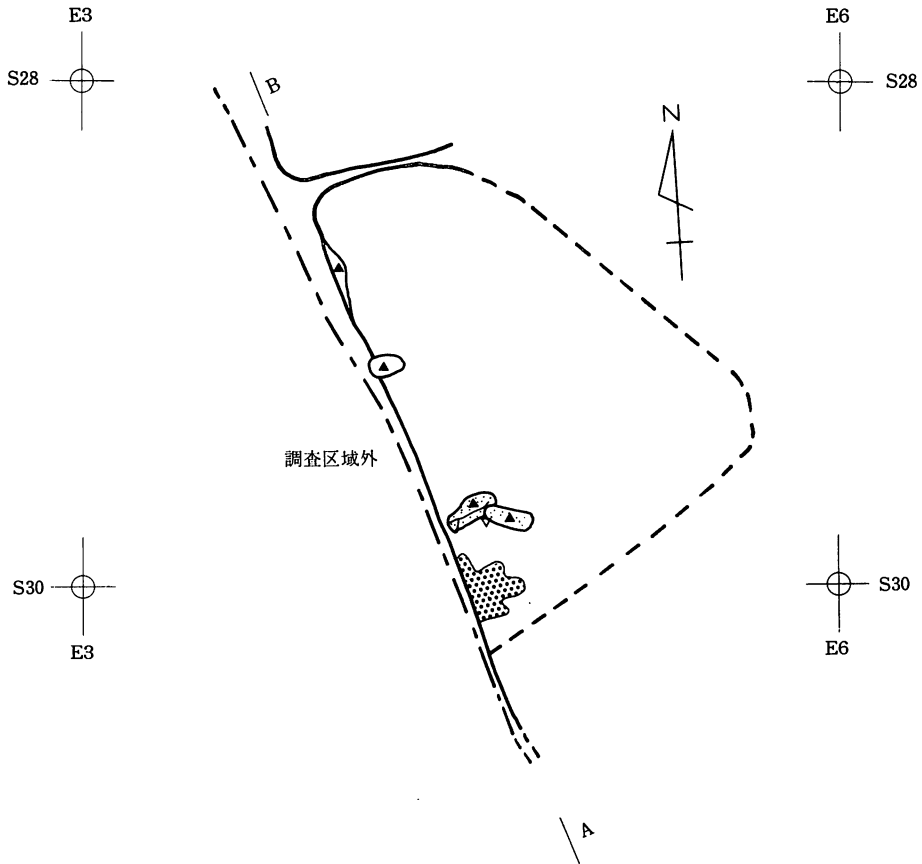


- a. 褐色土
- b. 暗褐色土
- c. 暗褐色土

- a. 焼土
- b. 暗褐色土 (含焼土)
- c. 褐色土 (含焼土、炭化物)



- a. 褐色土
- b. 褐色土
- c. 暗褐色土



图版 10

2. ピット

C-51ピット

遺構 (図版11-a・写真図版9-a)

このピットは、C-2住居址の床面に、北壁に接する形で検出された。平面形は開口部、底部共、円形を呈する。壁は西壁から北壁にかけては底部より開口部にかけて内彎するが、南壁から東壁にかけては、ほぼ直立する部分と、やや外傾する部分とあり、立ち上がりは一定ではない。規模は開口部径約140cm×150cm、底部径約150cm、深さ約47cmを測る。底面中央部は壁沿いに比べ約7cm高く、壁際に向って放射状になだらかな傾斜を示す。埋土は黒褐色土の単層である。

出土遺物 (図版20-60~74、22-9 24 14・写真図版14、15)

出土した土器はすべて埋土中からのものである。60は口縁部に横位の隆帯をつけ、その面上と縁辺に刺突状圧痕文が施されているものである (I群2類)。61~63は口縁に沿って細沈線で数条の平行文が施文されているものである (II群1類)。口唇部近くに幅5mm前後の無文帯がつくられている。61は波状口縁のもので口縁部が内彎している。64は縦位の撚糸圧痕文の地文に沈線によって直線的に文様が構成されているものである。65~67は沈線によって、平行文、曲線文が施されているものである (II群2類)。68は楯状の工具で縦位に施文されたものである。69は単節の縄文を地文とする粗製土器の口縁部片である。70~72は底部片である。70は単節の縄文、71は無文、72は無節の縄文を地文としている。また70の底面には網代目状の圧痕文がみられる。

石器は磨製石斧1点(9)、磨石1点(14)が埋土から出土している。9は基部が破損しているが、平面形が台形状を呈するものと思われる。刃部周辺には使用痕と考えられる刃こぼれや擦痕が認められる。この石斧は擦痕が刃縁に斜反するものが多いことや両刃であることから、縦斧であると考えられる。14は平面形が長方形を呈するもので、その縁辺に多くの擦痕が認められるものである。

このピットは出土遺物から縄文後期前葉の時期に位置づけられるものと思われる。

C-52ピット

遺構 (図版11-b・写真図版9-b・c)

このピットはC-3住居址の北壁を切って構築されている。平面形は開口部、底部共、円形を呈する。壁は底部から中部にかけてはほぼ直立するが、中部から開口部にかけてはゆるやかに外傾する。底面は平坦である。規模は開口部径約110cm×120cm、底部径約95cm×105cm、深さ約53cmを測る。埋土は主に炭化物を微量に含む黒褐色土で構成される。

出土遺物はない。このピットの時期については不明である。

C-53ピット

遺構（図版11-C・写真図版9-d）

このピットはC-3住居址の北側、一部平坦面から斜面にかかるところで検出された。平面形は東西の斜面に沿って長軸をもつ不整楕円形を呈し、底部は南北に長軸をもつ楕円形を呈す。壁の立ち上がりは、底部から開口部にかけて外傾する部分、内彎する部分、ほぼ直立する部分とがあり、一定ではない。底面は堅くしまっており、中央部よりやや西側には一段低い面が見られる。規模は開口部径約90cm×95cm、底部径約65cm×85cm、深さ約36cmを測る。埋土は多量の炭化物を含む褐灰色土で占められる。

出土遺物はない。このピットの時期については不明である。

C-54ピット

遺構（図版11-d・写真図版9-e・f）

このピットはC-6住居址の床面中央部に検出されたピットであり、円周部を除いて上部の大部分が粘性ある黄褐色土で貼り床されていた。従ってこのピットはC-6住居址より古いあるいは住居址を使用している段階において閉覆されたものか、いずれにせよ住居址使用より早い時期に廃絶されたものと思われる。平面形は開口部、底部共、円形を呈す。壁の立ち上がりは、底部から開口部にかけて外傾する部分、内彎する部分、ほぼ直立する部分とあり、一定ではない。底面はほぼ平坦である。規模は開口部径約125cm、底部径約115cm×125cm、深さ約110cmを測る。埋土は上位より、炭化物を微量に含む褐色土、黒褐色土、暗褐色土で構成される。

出土遺物（図版20-75~77・写真図版14）

埋土から土器が数片出土している。73は単節の縄文、74は無節の縄文を地文としているものである。73の口唇部は中央部が窪んでいる。74は数条の平行沈線で縦位と横位に施文して格子目状の文様をつくりだしているものである。石器は出土していない。

このピットの時期についての詳細は不明であるが、出土遺物やピットの規模・形態などから縄文後期前葉に位置づけられるものと思われる。

C-55ピット

遺構（図版12-a・写真図版10-a）

このピットはC-1住居址の北東側、斜面上に検出された。平面形は開口部、底部共、隅丸方形を呈す。壁は底部から開口部にかけて、僅かに外傾しつつ立ち上がる。底面は西側から東側に傾斜をもつ。規模は開口部径約118cm、底部径約106cm、深さ18cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。

出土遺物はない。このピットの時期については不明である。

C-56ピット

遺 構 (図版12-b・写真図版10-b・c)

このピットはC-6住居址の東側、斜面上に検出された。平面形は開口部、底部共、楕円形を呈す。壁は南西側で底部より中部まで内湾しつつ立ち上がり、中部より開口部まで直立する。それ以外は、やや外傾しつつ立ち上がる。底面はほぼ平坦であり、西壁際に粒径約18cm×20cmの垂角礫が確認されている。規模は開口部径約120cm×133cm、底部径約104cm×118cm、深さ約80cmを測る。埋土は上位に堅い褐色土がレンズ状に堆積する。その下位は主に炭化物を含む暗褐色土で構成される。

出土遺物はない。このピットの時期については不明である。

C-57ピット

遺 構 (図版12-c・写真図版10-d・e)

このピットはC-58ピットの東側に隣接する形で検出された。平面形は開口部、底部共、円形を呈す。壁は西側から北側にかけて、底部から中部にかけて外傾し、中部から開口部にかけて内湾しつつ立ち上がる。それ以外は外傾する。底面には、中央部よりやや南寄りに副穴がある。副穴の平面形は円形を呈し、開口部径約26cm、深さ約22cmを測る。規模は開口部径約114cm×120cm、底部径約104cm×114cm、深さ約55cmを測る。埋土は主に褐色土と暗褐色土で構成される。

出土遺物はない。このピット時期については不明である。

C-58ピット

遺 構 (図版12-d・写真図版10-f)

このピットはC-5住居址の北側、斜面中部で検出された。平面形は開口部、底部共、不整楕円形を呈す。壁は北側の一部が内湾し立ち上がるが、それ以外はやや外傾しつつ立ち上がる。底面は西側から東側にゆるやかな傾斜をもち、北壁際には、開口部径約10cm×29cm、深さ約9cmの副穴がみられる。規模は開口部径約106cm×135cm、底部径約92cm×132cm、深さ約28cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。

出土遺物は埋土から縄文の粗製土器が数片出土しているが、このピットの時期については不明である。

D-51ピット

遺 構 (図版13-a・写真図版11-a)

このピットはC-3住居址の南側、南斜面で検出された。平面形は開口部が楕円形、底部は不整楕円形を呈す。壁は南西側と南東側が底部よりやや外傾し立ち上がるものの、それ以外は

内湾して立ち上がる。底面は堅くしまり、北西から南東にかけてゆるやかに傾斜する。規模は開口部径約 127cm×162cm、底部径約 135cm×150cm、深さ約80cmを測る。埋土は主に汚れた褐色土で構成され、中部と下部に暗褐色土が帯状にはいる。

出土遺物はない。このピットの時期は不明である。

D-52ピット

遺構（図版13-b・写真図版11-b・c）

このピットはD-51ピットの南西側に隣接する形で検出された。平面形は開口部、底部共、南北にや、長軸をもつ不整形円形を呈する。壁は北西側と北東側が外傾して立ち上がるが、それ以外は内湾しつつ立ち上がる。底面には堅いパミスが露出しており、凹凸が激しい。規模は開口部径約 130cm×150cm、底部径約 138cm×152cm、深さ約 118cmを測る。埋土は主に褐色土と暗褐色土で構成され、相互に重なり合う。

出土遺物はない。このピットの時期は不明である。

E-51ピット

遺構（図版13-C・写真図版11-d）

このピットはE地区の東斜面に検出された。平面形は開口部、底部共、南西から北東にかけて長軸をもつ楕円形を呈す。壁は底部よりや、外傾しつつ立ち上がる。底面は一部に凹凸があるものの、ほぼ平坦である。規模は開口部径約 100cm×123cm、底部径約86cm×100cm、深さ約22cmを測る。埋土は炭化物を含む黒褐色土の単層である。

出土遺物は埋土から縄文の粗製土器小破片が出土しているが、このピットの時期については不明である。

E-52ピット

遺構（図版14-a・写真図版11-e）

このピットはE-51ピットの南東側、東斜面に検出された。北西壁は風倒木跡により切られており確認できない。平面形は開口部、底部共、ほぼ円形を呈す。壁は底部よりや、外傾しながら立ち上がる。底面は堅くしまり、凹凸が激しい。規模は開口部径約 110cm×115cm、底部径約98cm×104cm、深さ約38cmを測る。埋土は炭化物を含む黒褐色土の単層である。

出土遺物はない。このピットの時期は不明である。

E-53ピット

遺構（図版14-b・写真図版11-f）

このピットはE-52ピットの南東側で検出された。平面形は開口部、底部共、北から南に長軸をもつ不整形三角形を呈す。壁は底部よりや、外傾し立ち上がる。底面は堅く、南壁際に凹凸がある。規模は開口部径約90cm×127cm、底部径約65cm×117cm、深さ約17cmを測る。埋土

は黒褐色土の単層である。

出土遺物はない。このピットの時期は不明である。

3. 焼土遺構

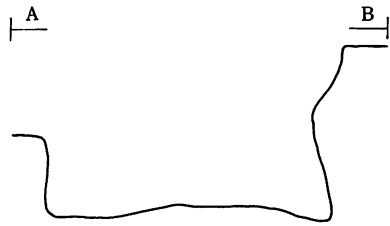
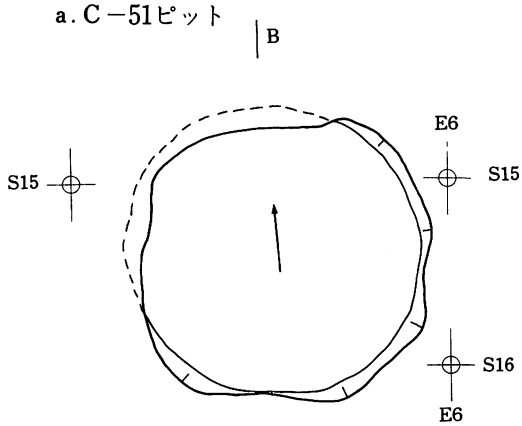
C-101焼土（図版14-C）

この焼土遺構はC地区東斜面最下部に位置する。焼土は現地性のもので、南北に長い不整形の広がりを持ち、規模は径約35cm×50cmを測る。これを囲む形で西側から南側には、幅約15cmの炭化物が分布する。火熱による赤色変化の深度は約2cm～8cmである。

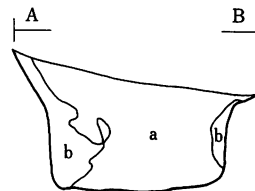
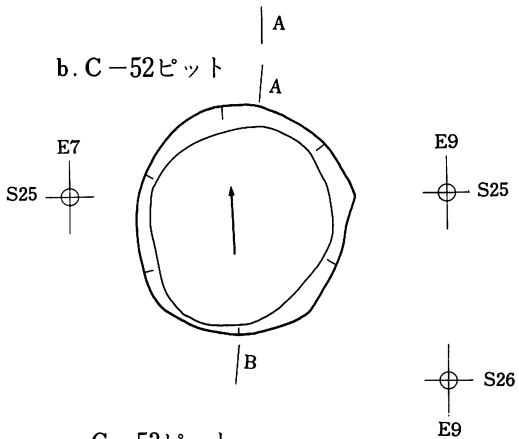
E-101焼土（図版14-d）

この焼土遺構はE地区東斜面、E-51ピットの南側に位置する。焼土は現地性のもので、ほぼ円形の広がりを持ち、規模は径約50cmを測る。火熱による赤色変化の深度は約6cmである。

a. C-51ピット

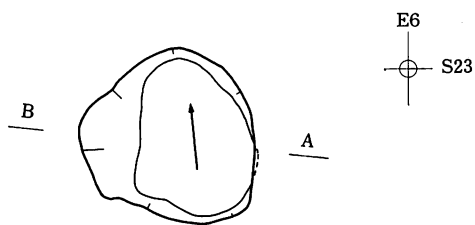


b. C-52ピット

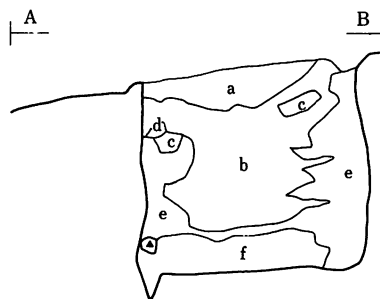
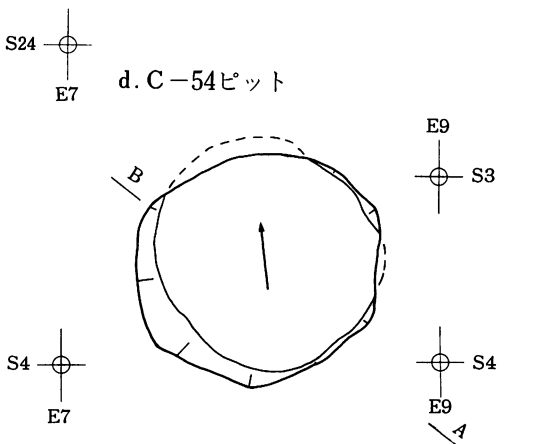


a. 黒褐色土 (含炭化物)
b. 褐色土 (含炭化物)

c. C-53ピット

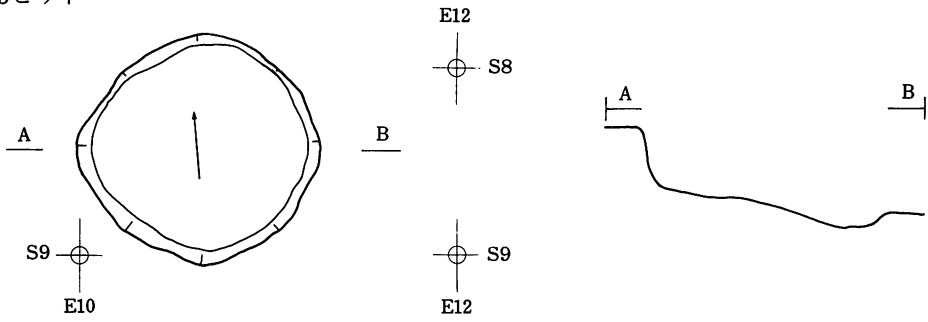


d. C-54ピット

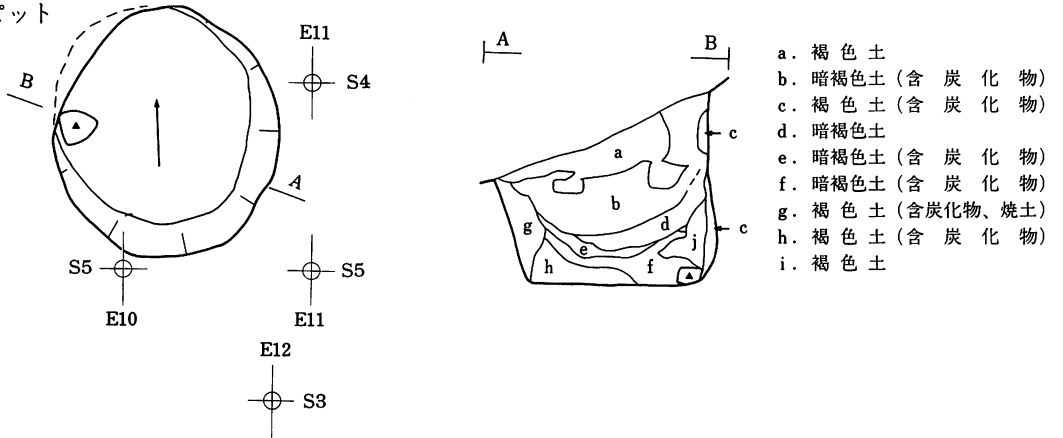


a. 褐色土 (含炭化物)
b. 黒褐色土 (含炭化物)
c. 暗褐色土 (含焼土粒)
d. 暗褐色土 (含焼土粒)
e. 褐色土 (含炭化物)
f. 暗褐色土 (含炭化物)

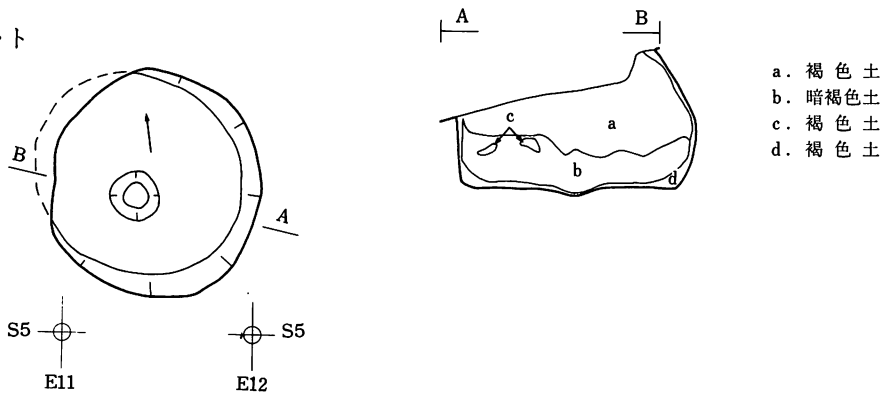
a. C-55ピット



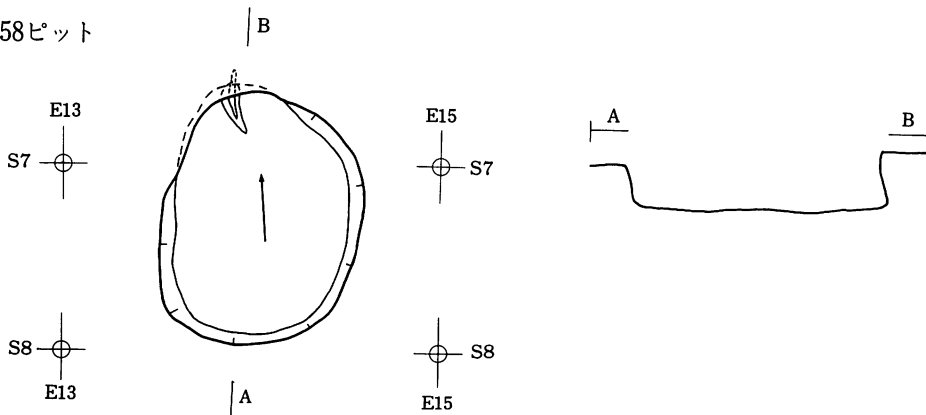
b. C-56ピット



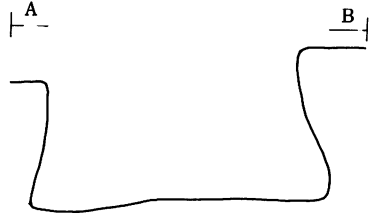
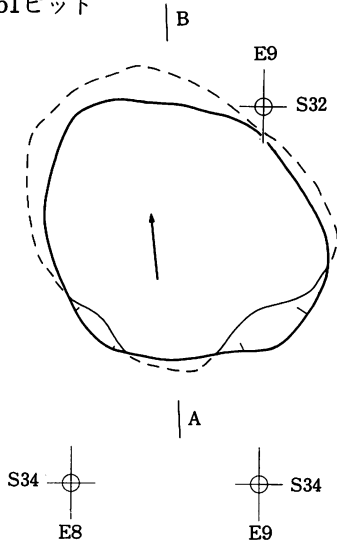
c. C-57ピット



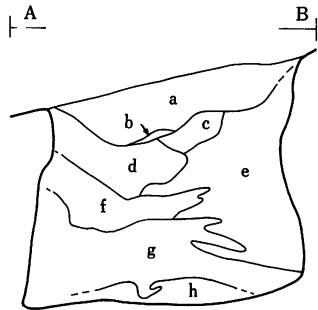
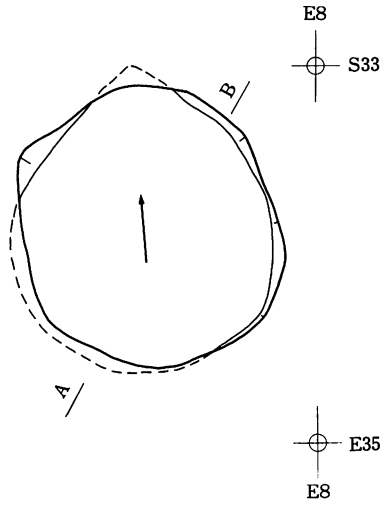
d. C-58ピット



a. D-51ピット

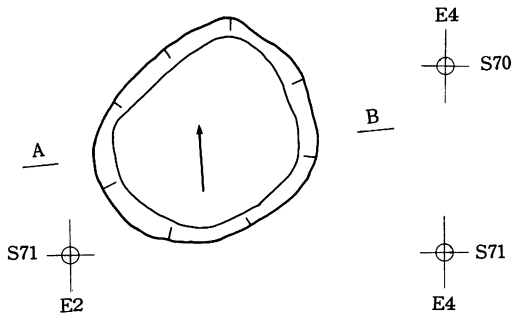


b. D-52ピット

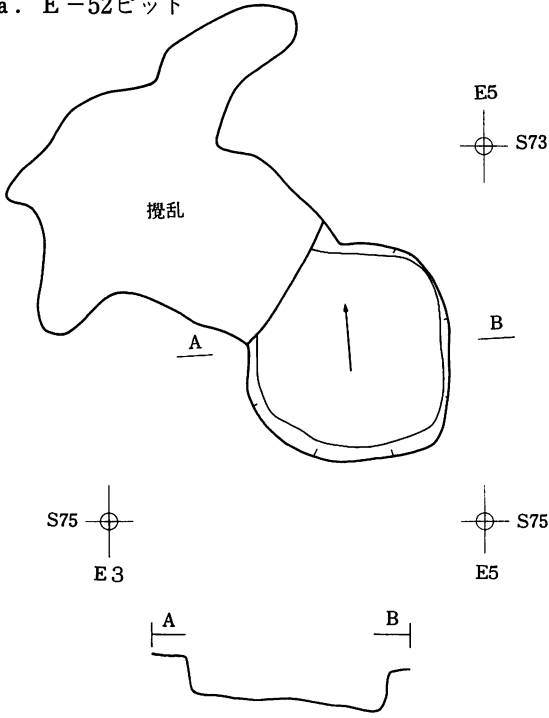


- a. 褐色土 (含炭化物)
- b. 褐色土
- c. 褐色土
- d. 暗褐色土 (含炭化物)
- e. 褐色土 (含炭化物)
- f. 褐色土 (含炭化物)
- g. 暗褐色土
- h. にぶい黄褐色

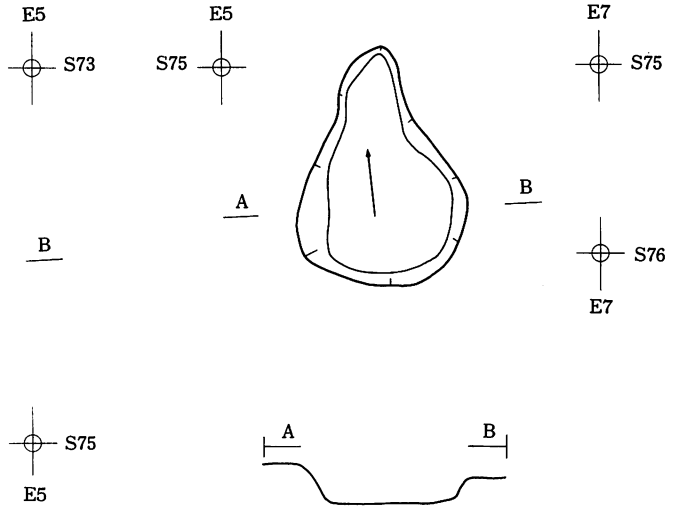
c. E-51ピット



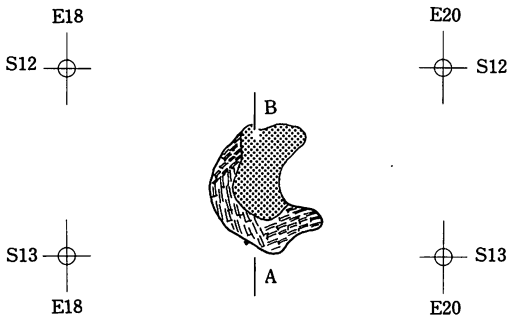
a. E-52ピット



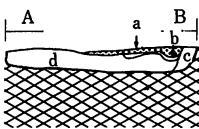
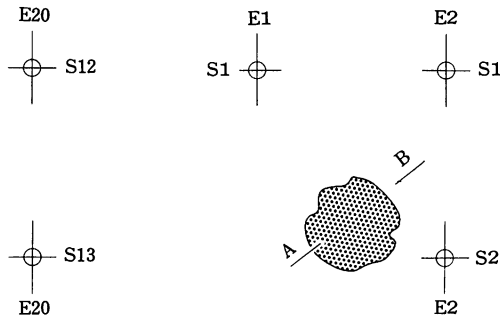
b. E-53ピット



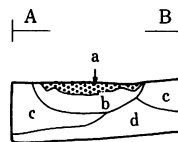
c. C-101焼土遺構



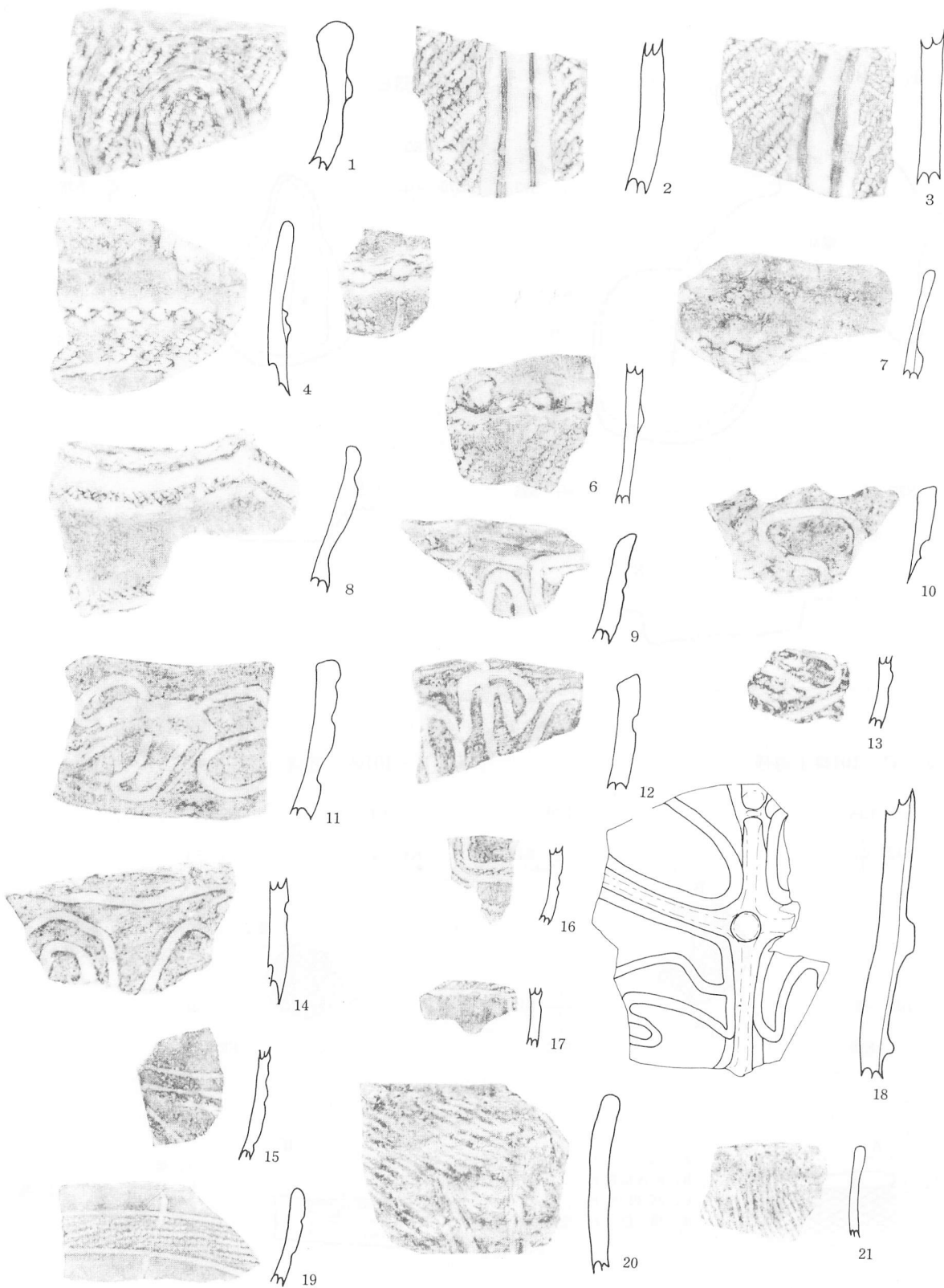
d. E-101焼土遺構



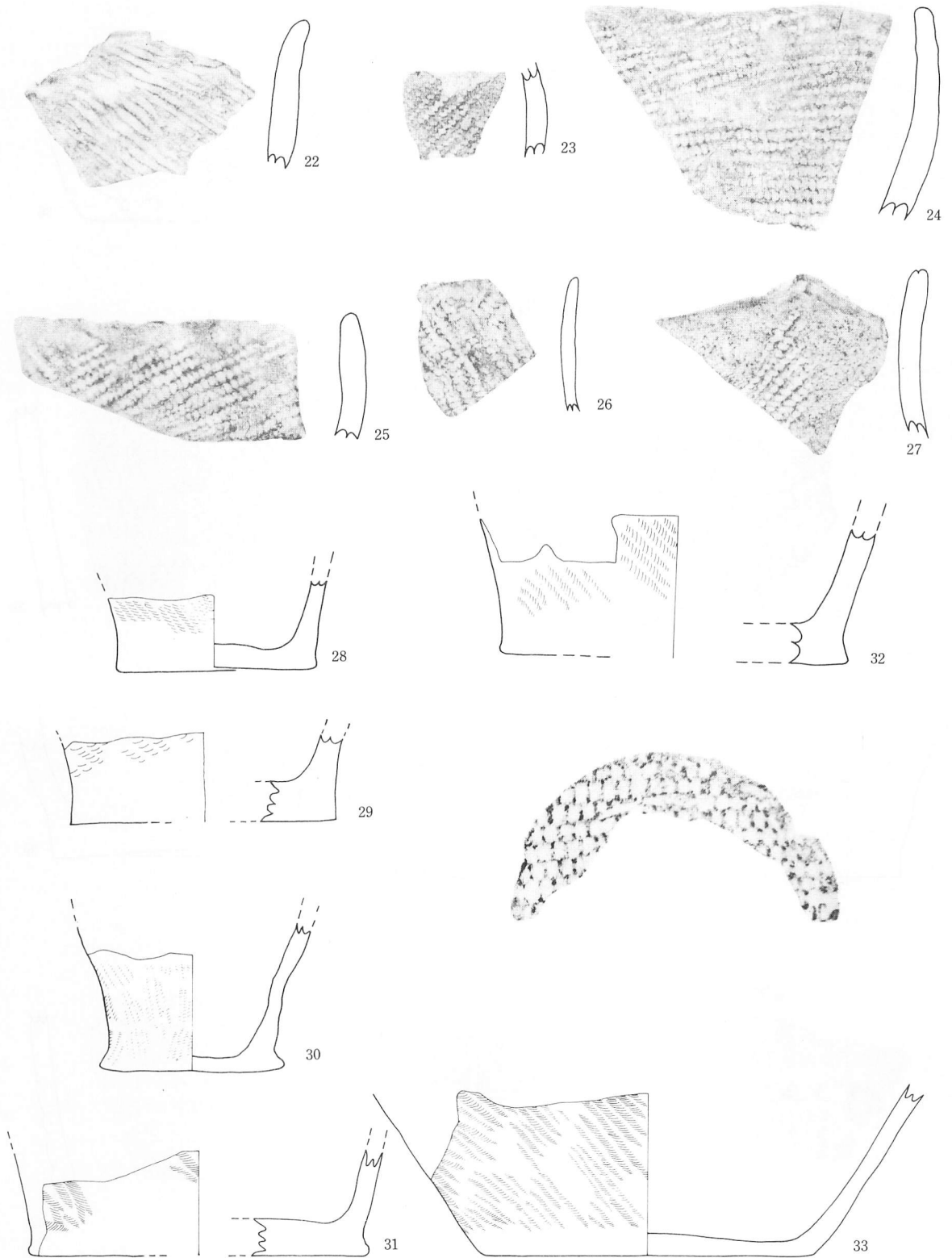
- a. 焼土
- b. 暗赤褐色土
- c. 暗褐色土
- d. 褐色土 (含炭化物)



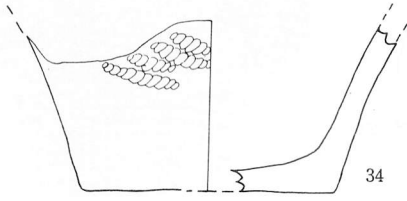
- a. 焼土
- b. 黒色土 (含炭化物)
- c. 黒褐色土
- d. 明赤褐色土



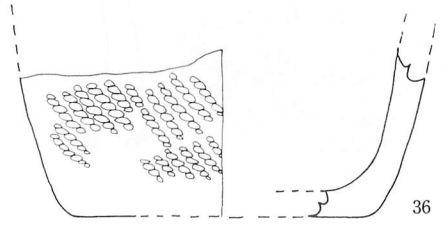
图版15 遺構内出土土器(1) (1~21 C-1住居址埋土)



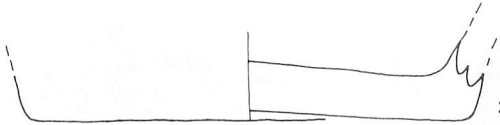
图版16 遺構内出土土器(2) (22 33·C-1住居址埋土)



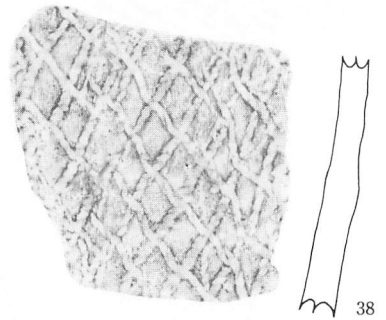
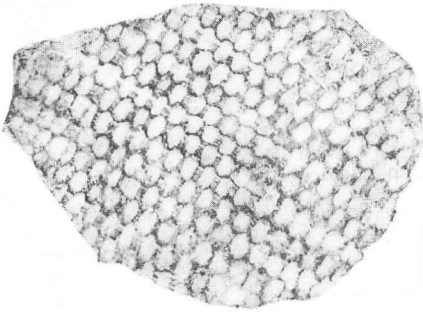
34



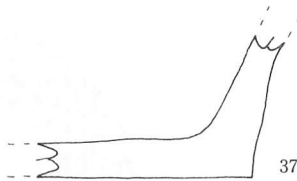
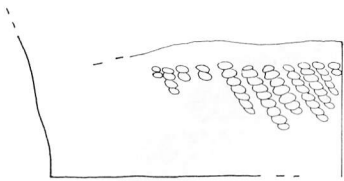
36



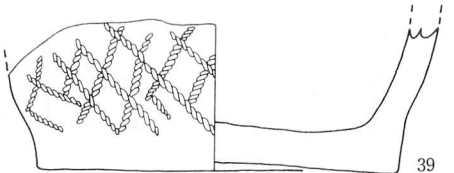
35



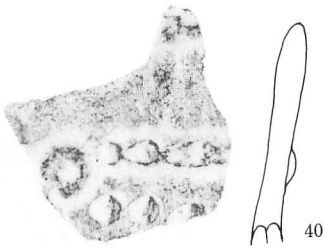
38



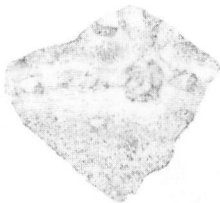
37



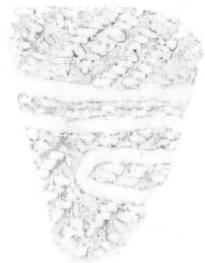
39



40

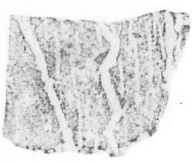
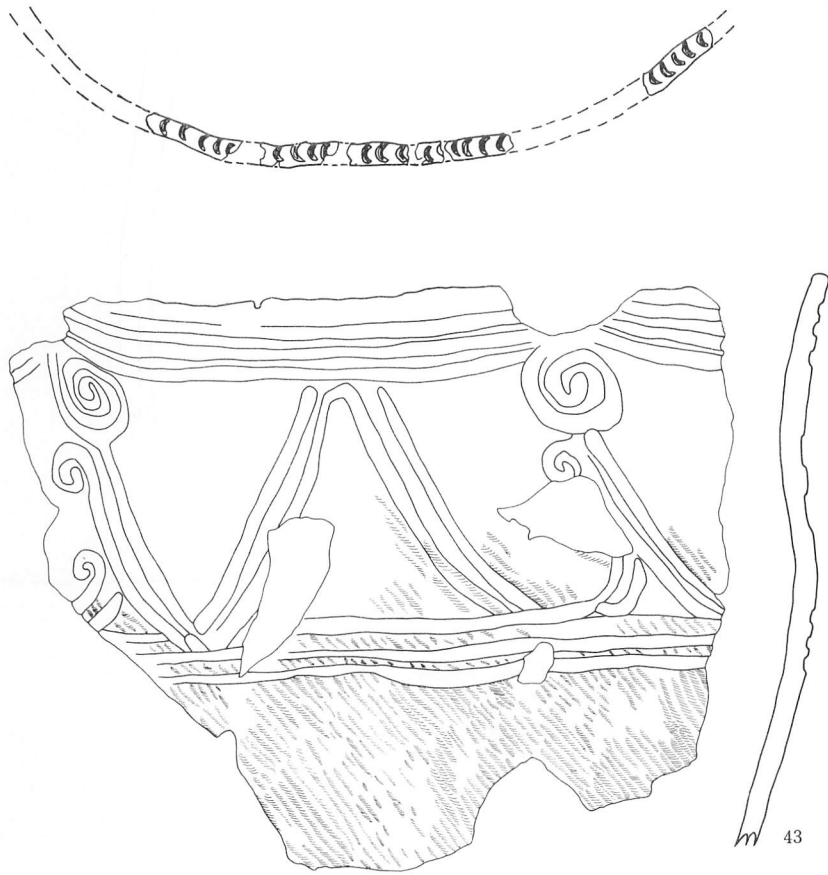


41

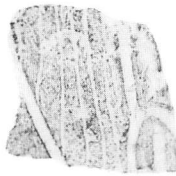


42

图版17 遺構内出土土器(3) (33~39·C-1住居址埋土、40~42·C-住居址埋土)



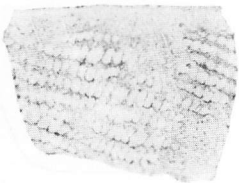
44



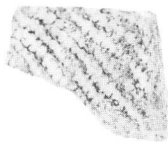
45



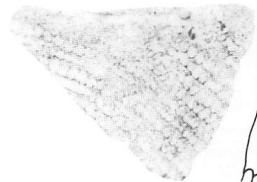
46



47

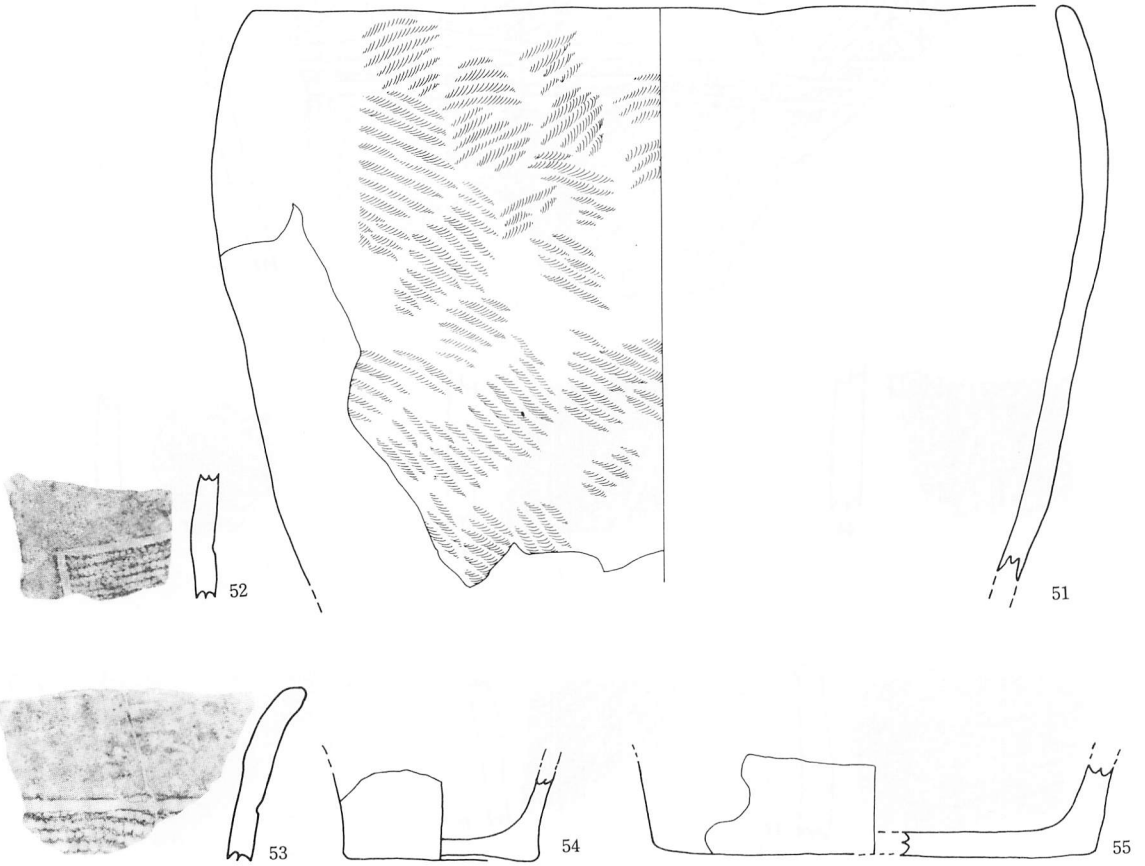
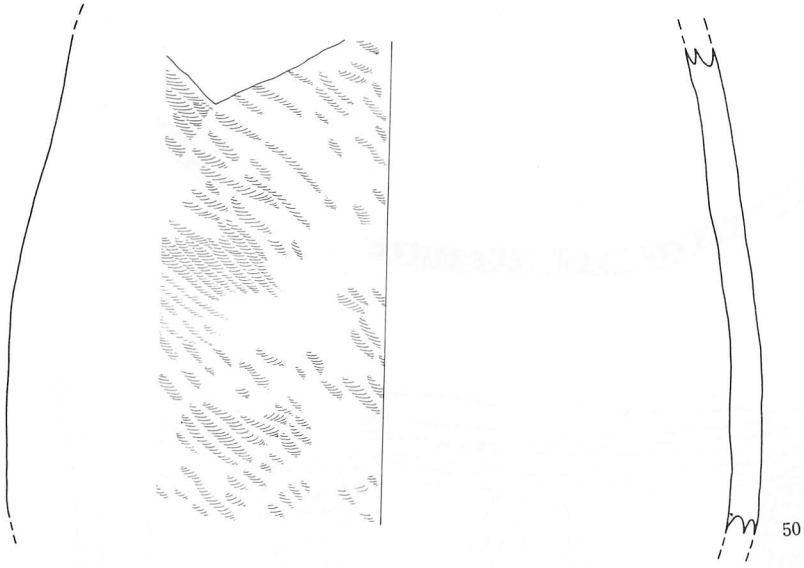


48

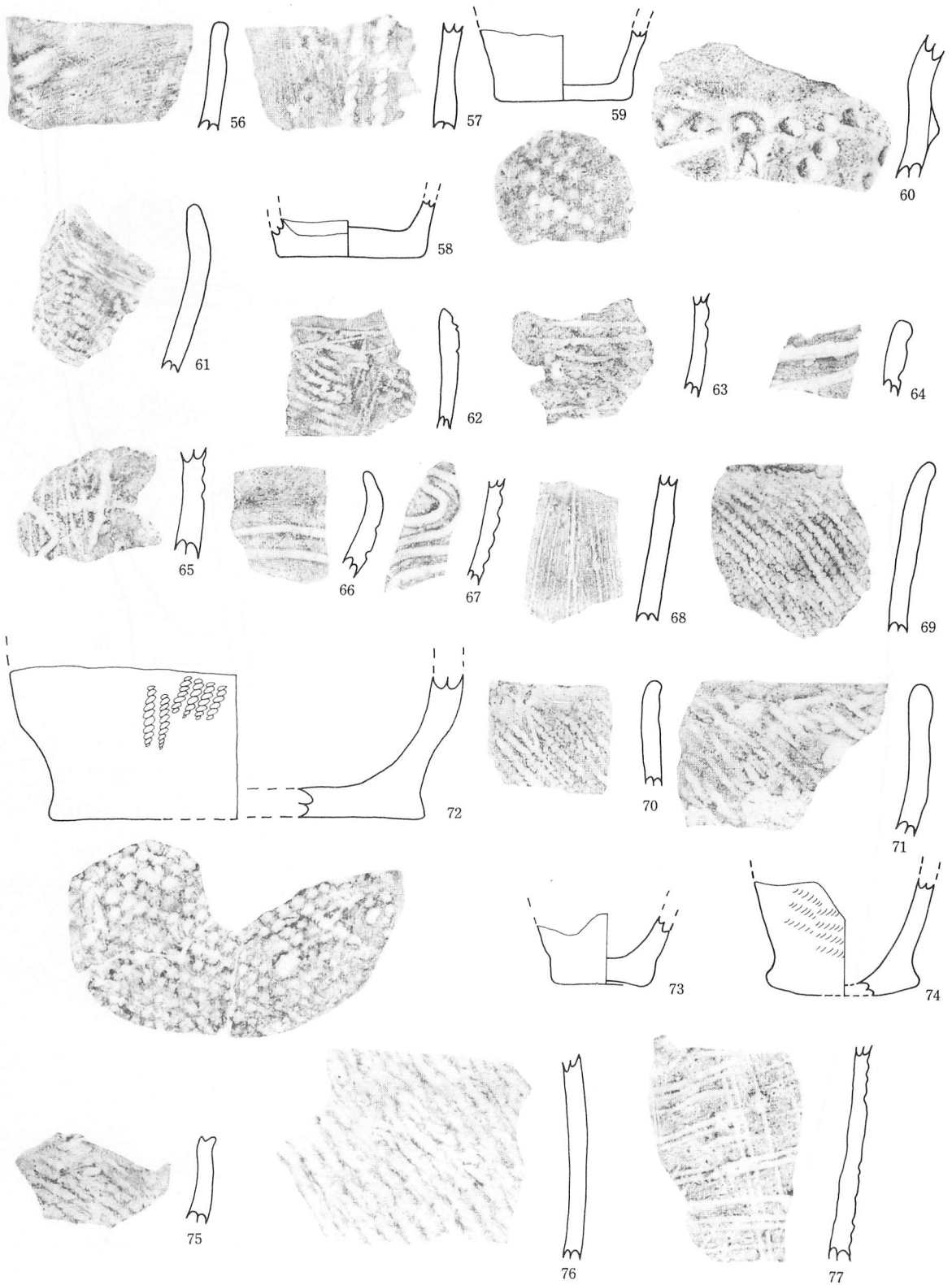


49

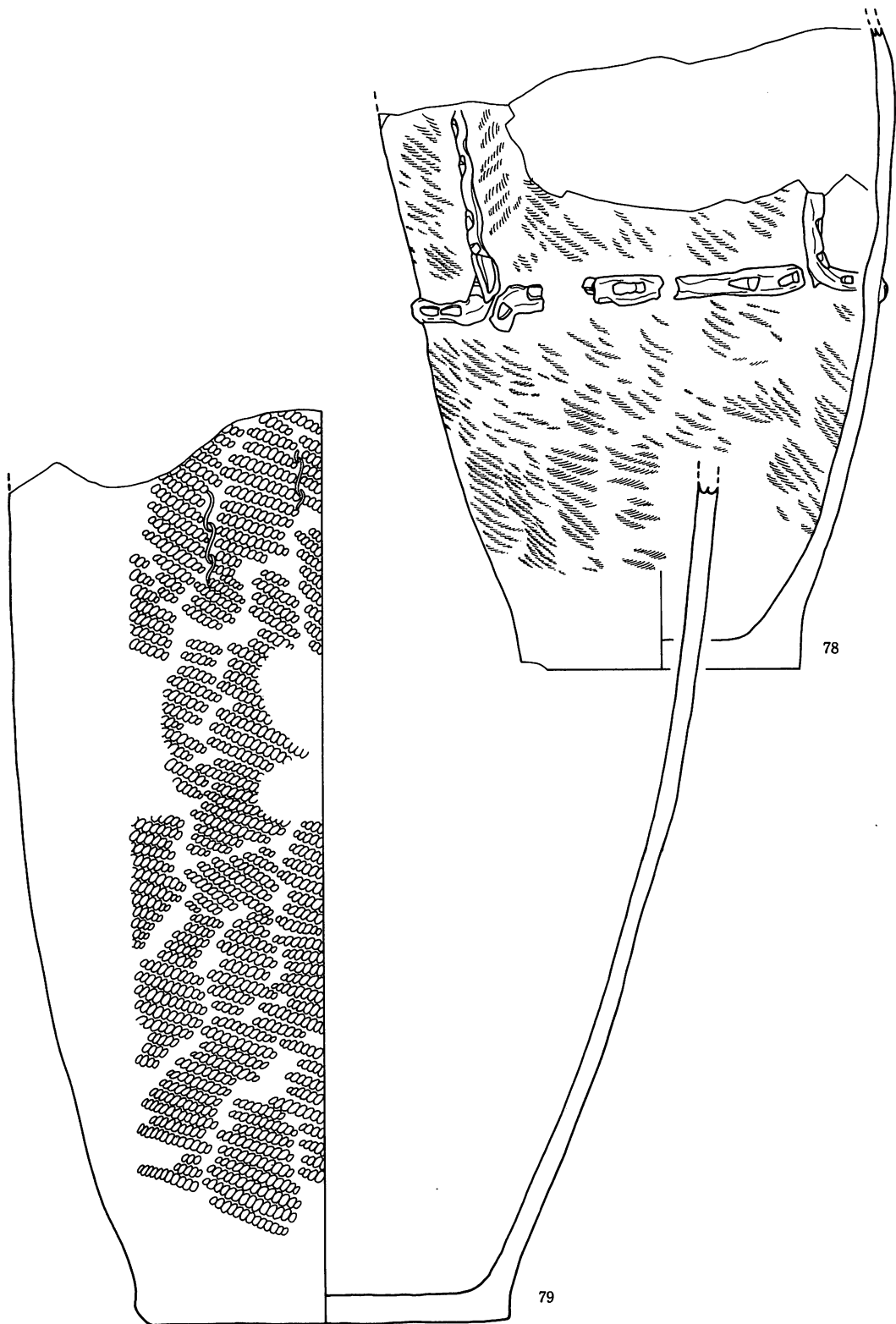
图版18 遺構内出土土器(4) (43・C-2住居址埋土, 44~49・C-3住居址埋土)



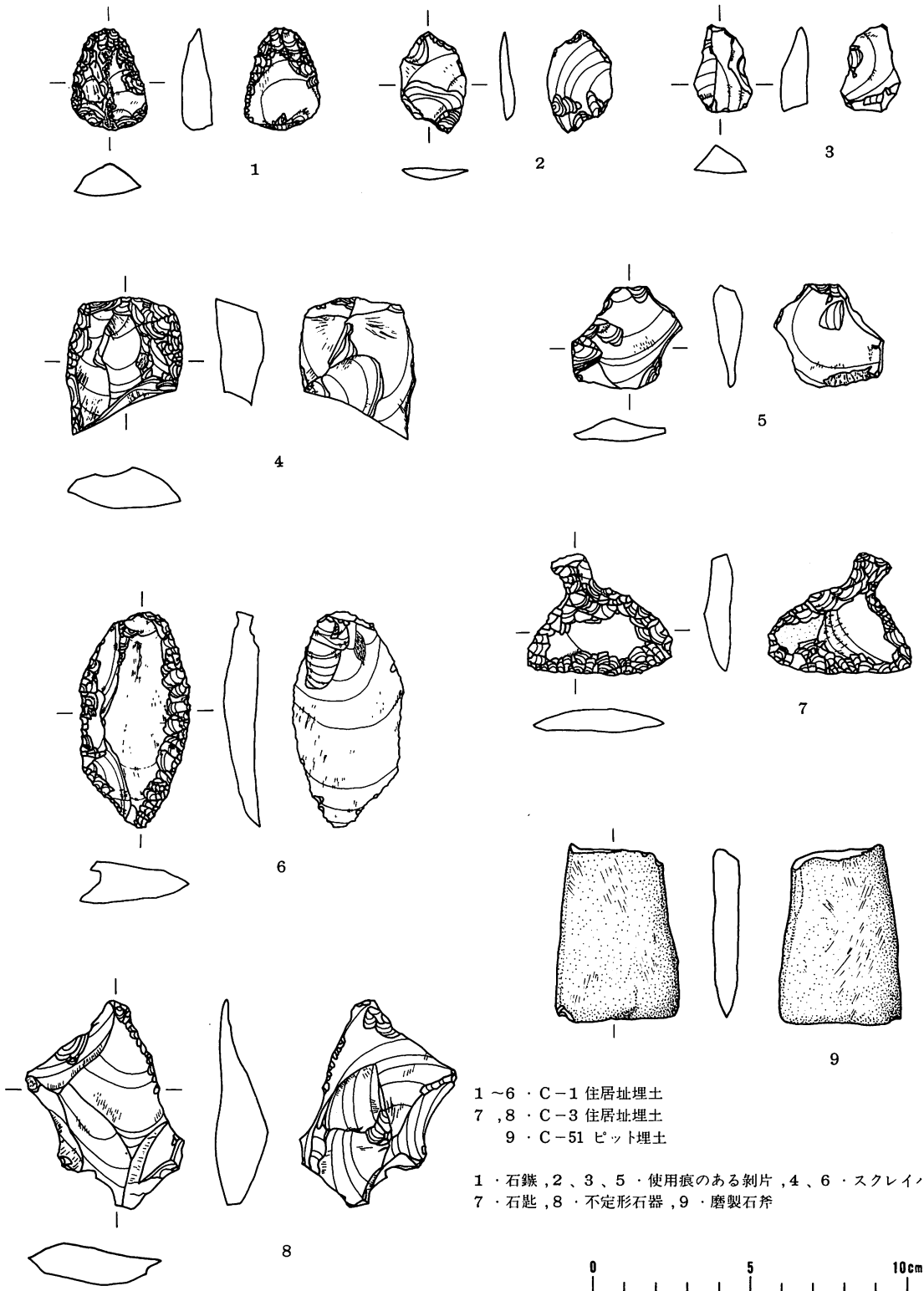
图版19 遺構内出土土器(5) (50·C-4住居址複式炉, 51·C-3住居址床面, 52~55·C-5住居址埋土)



図版20 遺構内出土土器(6) (56~59・C-6住居址埋土, 60~74・C-51ピット埋土, 75~77・C-54ピット埋土)



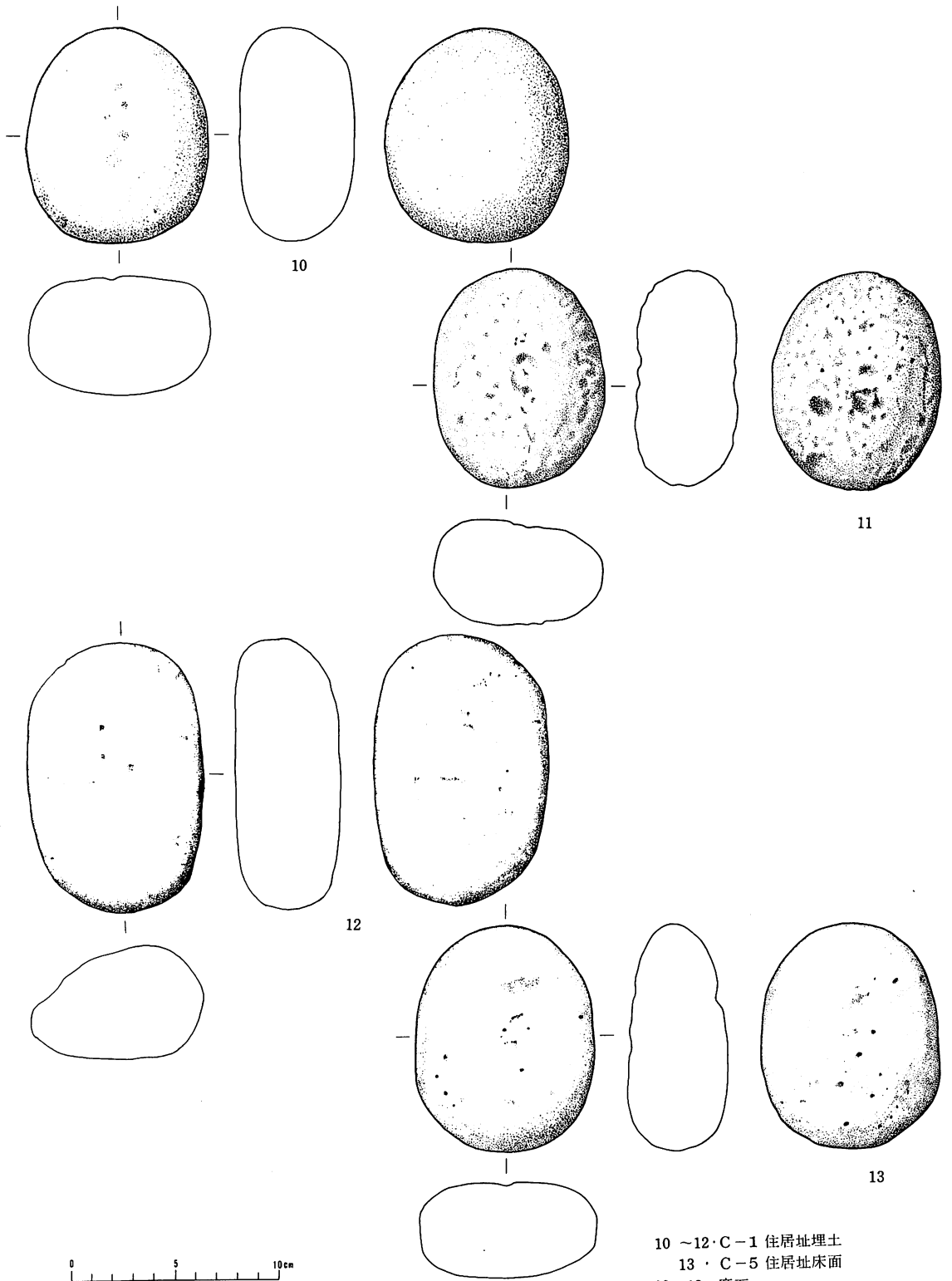
図版21 遺構内出土土器(7) (78,79・C-1住居址埋土)



1～6・C-1 住居址埋土
 7, 8・C-3 住居址埋土
 9・C-51 ピット埋土

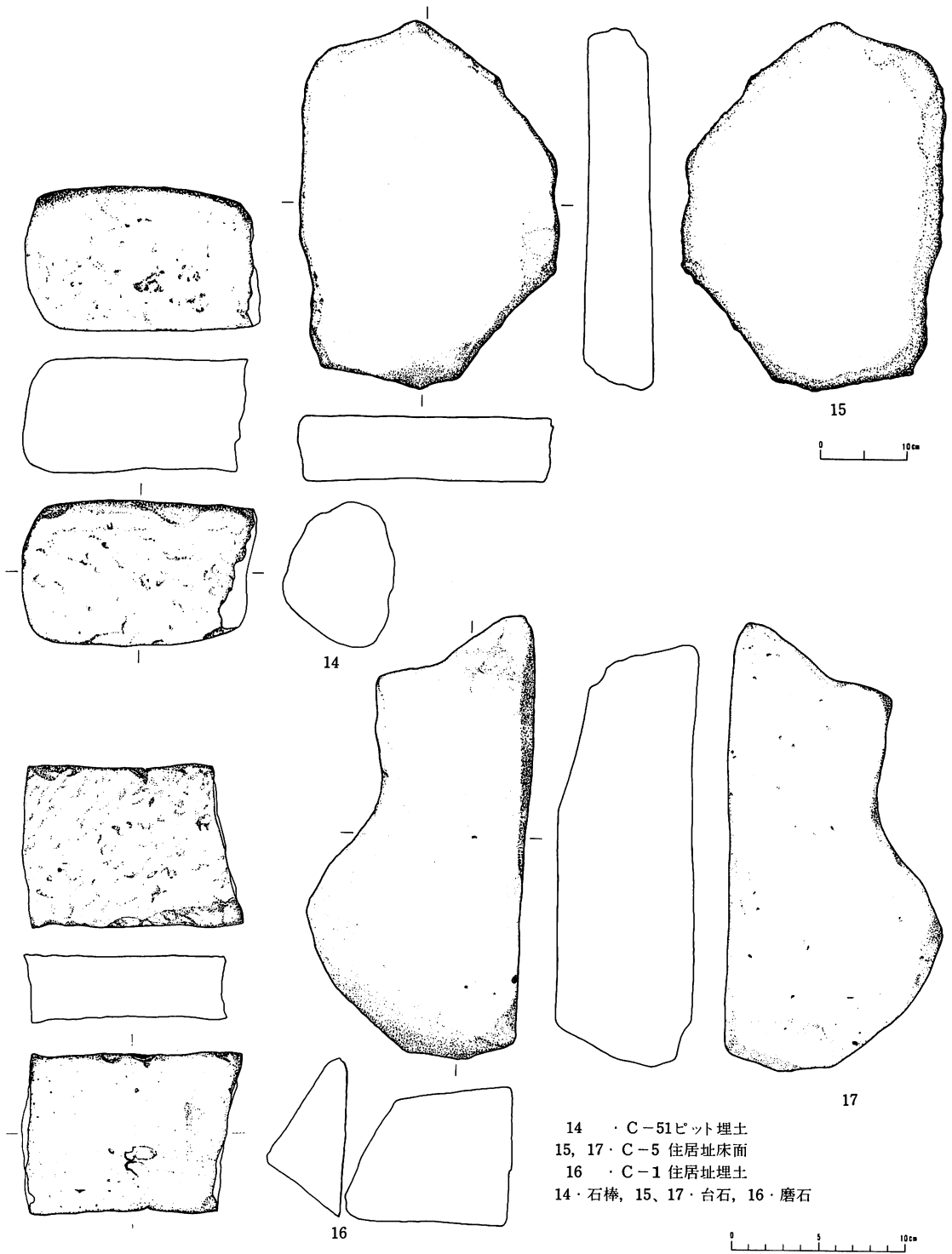
1・石鏃, 2, 3, 5・使用痕のある剥片, 4, 6・スクレイパー
 7・石匙, 8・不定形石器, 9・磨製石斧

図版22 遺構内出土石器類(1)



10 ~12·C-1 住居址埋土
 13·C-5 住居址床面
 10, 12·磨石
 11, 13·凹石

図版23 遺構内出土石器類(2)



図版24 遺構内出土石器類(3)

VI 遺構外出土遺物

遺構外遺物は縄文土器、弥生土器と石器で、土偶その他の土製品、木器などは出土していない。土器で完全に復元できるものは少なく、大半は破片である。それらは縄文中期後葉、後期前葉・中葉、晩期中葉・後葉、弥生中期の時期に位置づけられるものである。石器類としては、石匙、筧状石器、不定形石器、敲石、石棒、磨石、使用痕のある剥片が出土している。

(1)土 器

出土した土器を、縄文中期に属するものをⅠ群、後期に属するものをⅡ群、晩期に属するものをⅢ群、弥生期に属するものをⅣ群とし、大きく4つの群に分け、各群をさらに数類に分類した。

Ⅰ群（縄文中期土器）

1類（図版24-1～4・写真図版17）

沈線によって楕円文、「∩」字文を構成する土器を本類とした。ⅡC-1h・3d・5dのⅡ層下部・Ⅲ層から出土している。平縁で口縁部はやや内彎するもの（図24-3）と「く」の字に外反するもの（図24-1）とがある。縄文の地文の上に太い沈線で楕円文、「∩」字文を施し、沈線の外側を磨り消して文様をつくっている。口縁部には幅1～3cmの無文帯がつくられている。縄文の原体は単節のLRである。

2類（図版24-5～11・写真図版17）

主に口縁部に隆帯を付しているものを本類とした。ⅡC-3CのⅡ・Ⅲ層、ⅡC-2g・4g・4jのⅢ層から出土している。口縁は平縁と波状のものがある。隆帯は口縁部を主体に、縦位と横位との組み合わせによってめぐらせたものや、斜位に貼付したものなどがある。隆帯の面には、竹管状工具で連続的に圧痕を施しているもの、撚糸圧痕文を施文しているものがある。縄文の原体は単節のRLと複節のLR Lである。6、7、8は縦と横の浮線文をめぐらし、横の浮線から上を無文帯にしている。9は横の隆帯の下にそれと平行して刺突文が施されている。11は隆帯の面に撚糸圧痕文を施し、そのそばにボタン状突起を貼付している。

3類（図版25-12・写真図版17）

無文帯の口縁部に刺突文を施しているものを本類とした。ⅡB-5fのⅢ層から出土している。平縁で口縁部は大きく内彎している。幅4cm前後の無文帯をつくり、縄文の地文との境に横位の刺突文を施文している。縄文の原体は単節のLRである。

4類（図版30-46・写真図版19）

無文に縦位の撚糸圧痕文を施している土器を本類とした。遺構外から出土しているものは1点だけであるがC-6住居址の埋土からも出土している。46は波状口縁で、その頂部から縦位に3本の撚糸圧痕文が施されているものである。口縁部は外傾している。

5類 (図版30-47・写真図版19)

山形の口縁頂部に、波状文を隆帯によって施しているものを本類とした。48は小孔を中心に断面形が三角形状を呈する隆帯によって、交差する波状文を構成しているものである。体部片が検出されていないため、その詳細については不明である。本遺跡においては類例がなく、1片だけの出土であるが、1つの類をあえて設けた。

II群 (縄文後期土器)

1類 (図版25-13~16・写真図版17)

細沈線によって平行文、連続弧状文を構成する土器を本類とした。II C-2eのIII層からまともに出土している。口縁は波状を呈しているものと平縁のものがある。口縁部を擦り消して幅5cm前後の無文帯をつくり、その上に口縁に沿って2条の平行沈線をめぐらせ、さらに縦位に平行文、連続弧状文を施文している。沈線を施した上をまた擦り消しているものもみられる。縄文の原体は無節のLである。

2類 (図版26、27、28-17~33・写真図版18)

沈線によって平行文、渦巻文、入組文、曲線文、楕円文の文様を施文されている土器を本類とした。これらの土器はII C-2d・3d・3iのII層下部、II C-1i・3fのIII層、IE-4jのIV層から出土している。口縁は平縁のものと波状口縁のものがある。口縁部はやや内彎するものが主体を占め、頸部から大きく外傾するものやわずかに外傾するものが幾分みられる。縄文の原体は単節のRL、LRが大半を占め、無節のLがわずかにみられる。地文に撚糸圧痕文を施しているものもある。20は縄文の地文を体部下半に施し、上半を無文にし、その上に沈線によって平行文、稚拙な入組文の文様を施文している。23、24は口縁部の上半を無文、下半を撚糸圧痕文の地文として、また25は無文の地文として、その上に沈線で平行文・曲線文・稚拙な入組文を構成している。34は無節の縄文の地文に口縁部に3条の平行沈線を施し、体部に楕円文を施文している。

3類 (図版29-34~39・写真図版18、19)

口縁に沿って数条の平行沈線を施し、さらに縦位に弧状、波状の沈線文を施文する土器を本類とした。IE-4jのIV層からまともに出土している。口縁は平縁と波状のものがある。口縁部はやや外傾するものが多く、内彎するものがわずかにみられる。口唇部が脹らんでその断面形が逆三角形状を呈しているものもある。縄文の原体は単節のRLが主体を占め、LRがわずかにみられる。口縁部に幅1cm前後の無文帯をもつもの(36、38)、無文帯をもたず縄

文の地文に沈線が施されているものがある(35、37、39)。縦位に施された沈線は、その施文の仕方として、1段おきに弧状沈線の向きを変えたもの(35、36、37)、波状に近い沈線のもの(38、39)との2通りがみられる。

4類(図版29、30-40、42-45・写真図版19)

沈線によって曲線文を施し、沈線で区画された内側または外側を磨り消して文様を構成しているものを本類とした。出土地区は大半がI E-4jのIV層からで、II C-2eのII層からはわずかに出土している。平縁で口縁部はやや外傾するものが主で、頸部から内彎しながら立ち上がるものもみられる。縄文の原体は単節のR Lである。42-45は沈線で釣針状にかこみ、その内側を磨り消して施文している。

5類

II群に伴うと思われる精製土器を本類とした。地文の特徴からa・無節の縄文の土器、b・単節の縄文の土器、C・無文の土器、d・多条痕文の土器、e・多条線文の土器の5種に分けた。

a・無節の縄文の土器(図版30、31-48-54・写真図版19、20)

II C-2d・2g・4jのIII層、I E-4cのI層などから出土している。平縁で口縁部は直口するものとやや外傾するものがある。撚糸原体は一段右撚りのRと左撚りのLとの両者がある。沢を狭んで北側にあるC地区から出土のものはRで、南側にあるE地区から出土のものはLであるものが多い。平行沈線・入組状の沈線をもつ土器(II群2類)、数条の平行沈線に縦位の弧状・波状沈線をもつ土器(II群3類)、磨り消し縄文の土器(II群4類)と共伴している。無節の縄文の粗製土器は中期末葉にも存在しているが、遺構外遺物として明確に把握することはできなかった。ここでは確実に後期の土器と共伴すると思われる土器のみを取り扱った。

b・単節の縄文の土器(図版31-55-66・写真図版20)

II C地区よりもI E地区から多く出土している。平縁で口縁部は直口するものと、やや外傾するものがある。縄文の原体はL Rが大半を占め、R Lがわずかにみられる。

c・無文の土器(図版32-67-71・写真図版20)

I E-4j・5jのIV層から集中して出土している。平縁で口縁部はやや外傾するものが多い。色調は黒色で器面は磨かれていない。

d・多条痕文の土器(図版32-72、73・写真図版20、21)

横位に多条痕文を施文している土器で、I E-4jのIV層からまとまって出土している。平縁で口縁部はやや内彎している。

e・多条線文の土器(図版32-74-78・写真図版21)

櫛状のもので横位・縦位・斜位に引っ掻いたような多条線文の土器で、I E-4jのIV層から多くII C-3cのIII層からわずかに出土している。I E地区から出土のものは横位と斜位に多

条線文を施されたもので、縦位に施されたものはない。II C 地区からは縦位のものだけわずかに検出されており、ほかのものは出土していない。

III 群（縄文晩期の土器）

1 類（図版33-79-82・写真図版21）

晩期中葉に属すると思われる土器を本類とした。I E-2j・4jのIV層からまとまって出土している。80は口唇部にB突起（上からみるとS字状を呈している）といわれる小突起をもつものである。小波状口縁で口縁部は口唇部近くで大きく外傾している。口縁部には無文帯がつくりだされている。79は口縁が小波状を呈するもので、口縁に沿って刻み目帯が施されている。この刻み目帯は一定の間隔ごとに幅広部分を設けている。刻み目帯の下に2条の平行沈線文を施し、沈線から下部を無文帯にしている。81は台付鉢の脚の部分と思われるものである。82は小形浅鉢で口唇部が欠損している。口縁部に4条、底部近くに2条の平行沈線をめぐらしている。肩部にはB突起といわれる小突起がつけられている。体部全面に大腿骨文や三角文が磨り消し技法で施されている。底面には3条の同心円文が施されている。

2 類（図版33-83-85・写真図版21）

晩期後葉に属すると思われる土器を本類とした。I E-4jのIV層から出土している。83は単節の縄文の地文に変形工字文が施されたものである。84、85は中突起と小突起をもつ波状口縁である。文様は無文に浮線によって三角形の変形工字文が施されている。

3 類（図版33-86、87・写真図版21）

口縁部に無文帯をもつ粗製土器を本類とした。I E-4jのIV層から出土している。87、88は口縁部に幅3cm前後の無文帯をもつものである。口縁は指頭圧痕文により小波状を呈している。口縁部は内彎したものが頸部から外傾しているものである。地文の縄文の原体は単節のLRである。

IV 群（弥生土器）

1 類（図版29-41・写真図版19）

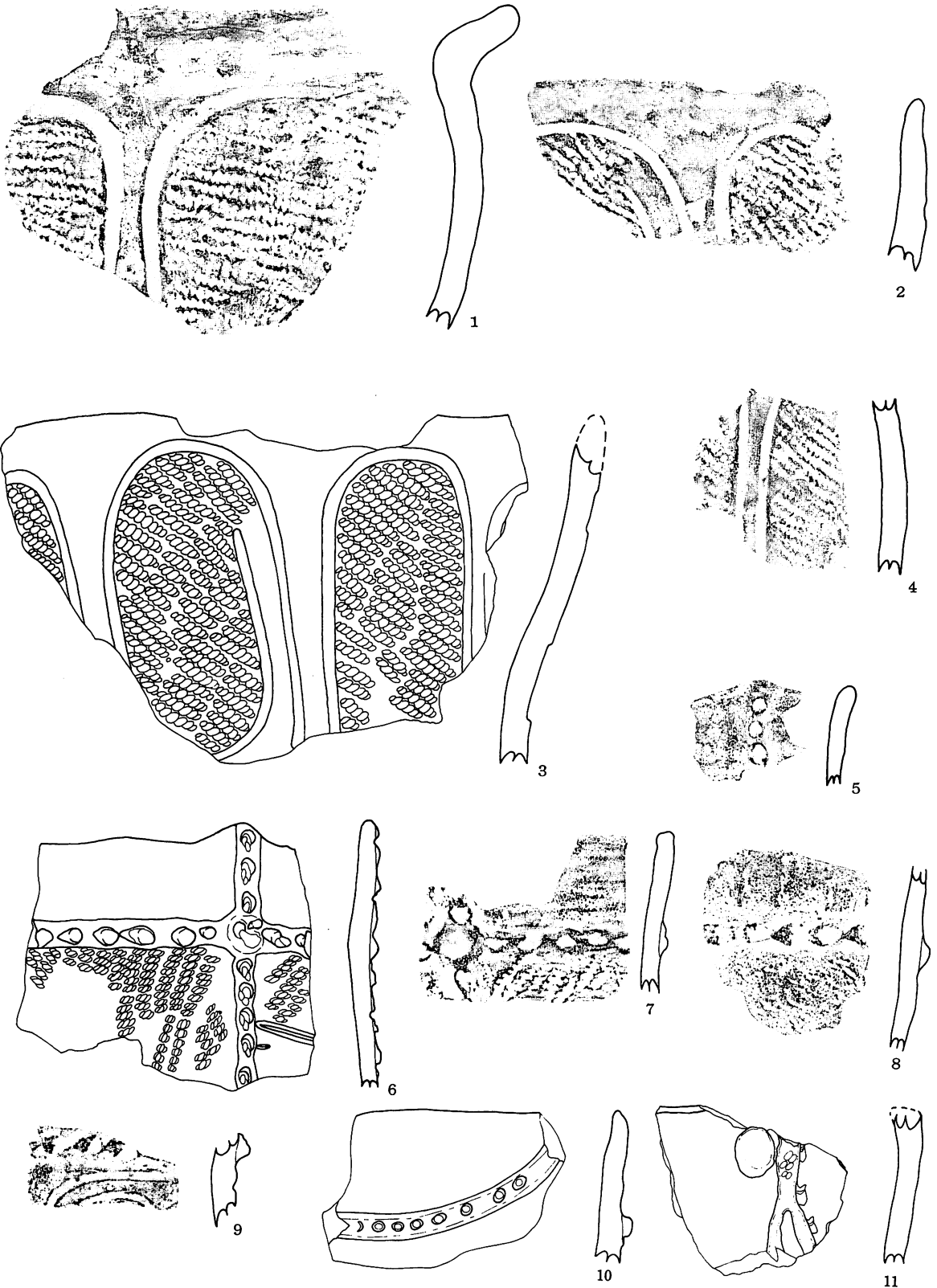
本類に属するものは1片で、II C-2fのII層から出土している。41は沈線で長形状に区画し、その外側を磨り消して文様を施しているものである。縄文の原体は単節のLRである。口縁部は頸部から内彎しながら立ち上がっている。土器には朱塗りが施されている。

(2) 石器（図版34-36・写真図版22、23）

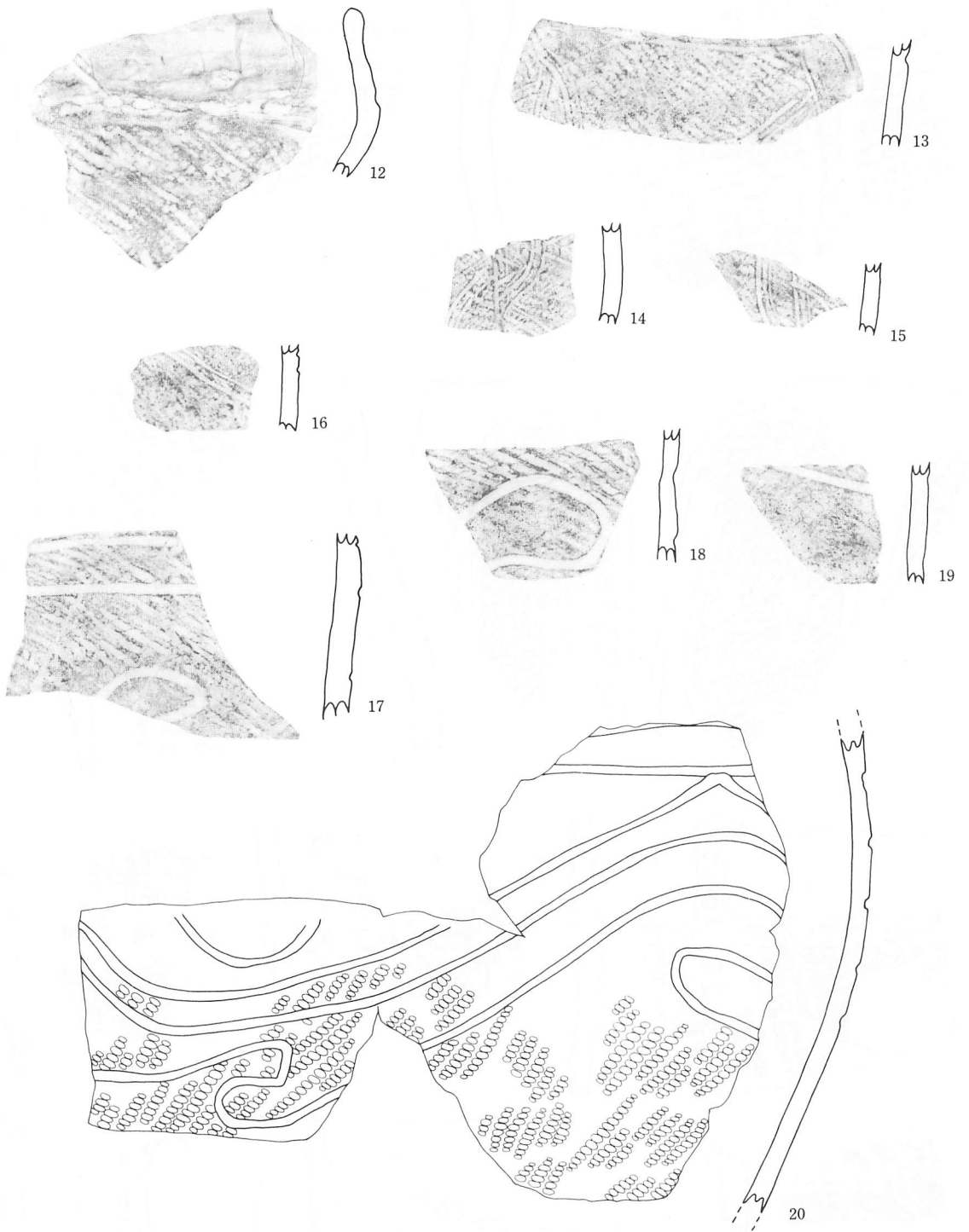
遺構外から出土した石器類は、石匙1点(1)、篋状石器3点(2-4)、不定形石器4点(5)

～8)、使用痕のある剥片7点(9～15)、敲石2点(16、26)、石棒1点(25)、磨石8点(17～24)、
が出土している。

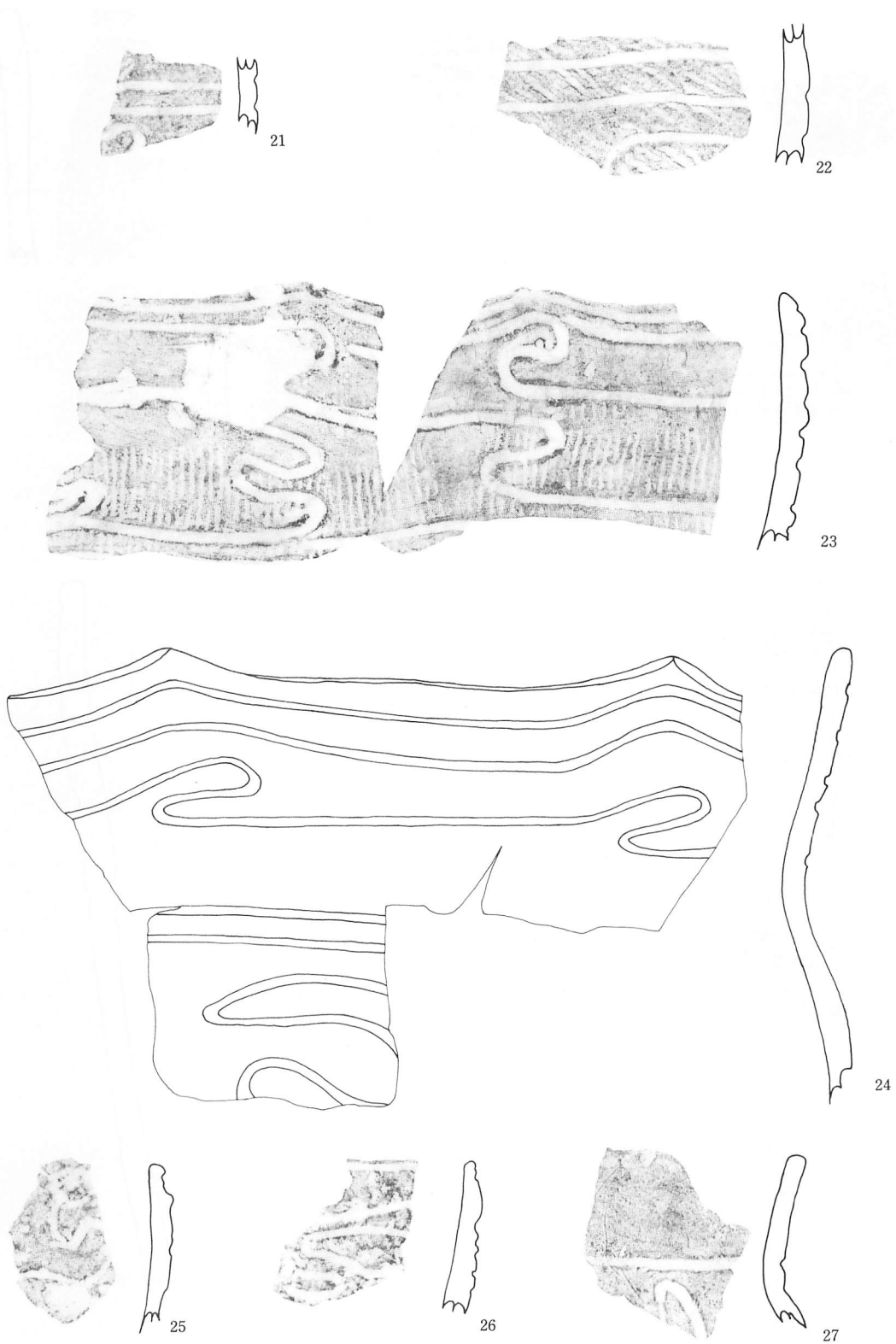
1はつまみ部を上にした場合、縦長の形を呈するもので刃部の軸に対してつまみが斜めについている。2、3は左右対称の細長い打製石器で最大幅が刃部付近にあるものである。平面形は基部から刃部に広がる三角形状を呈するもの(3)と、基部があまり狭ばらない台形状のもの(4)とがある。2は3と同じ形状のもので刃部が破損したものである。5はpick状石器といわれるものである。6は鋸歯縁石器、7はスクレイパーである。8は不定形の剥片の1辺の両面に二次加工が施されているものである。9～15は不定形な剥片の1辺または2辺に使用痕の認められるものである。16は平面形が円形状のもの、26は平面形が不整長方形を呈するもので、ともに縁辺に多くの敲打痕が認められる。25は端部がやや脹んでいる石棒の一部である。17～24は多くの擦痕を縁辺や面に認められるものである。平面形は円、楕円、長方形、不整形ときまざままである。



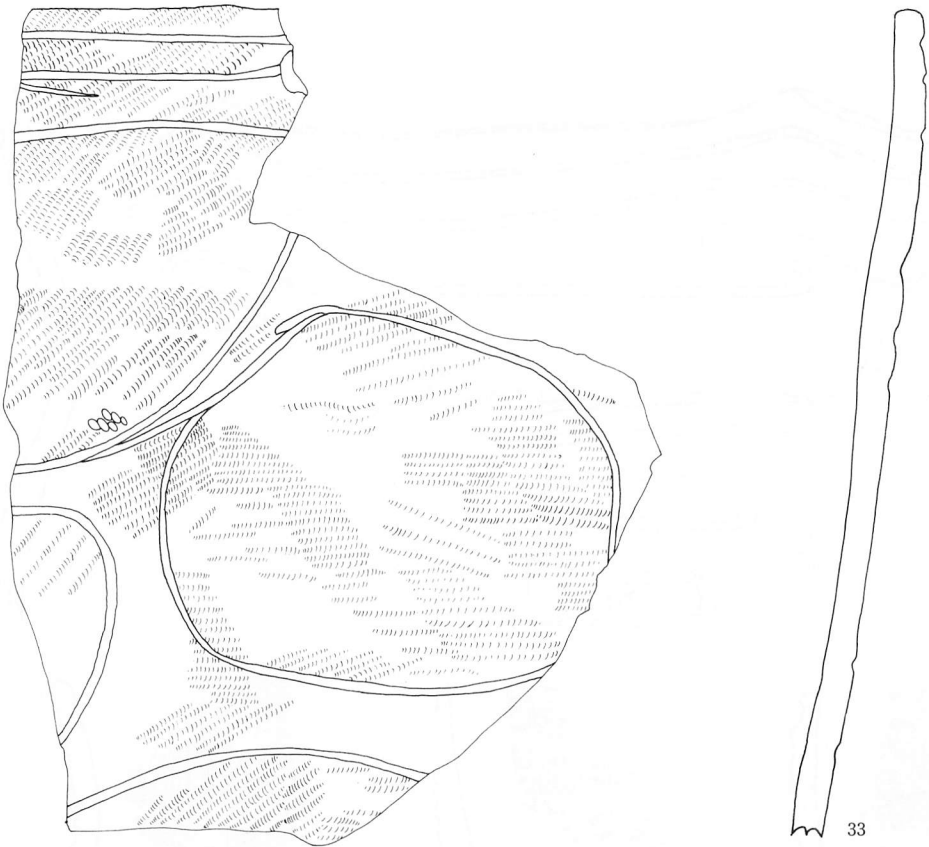
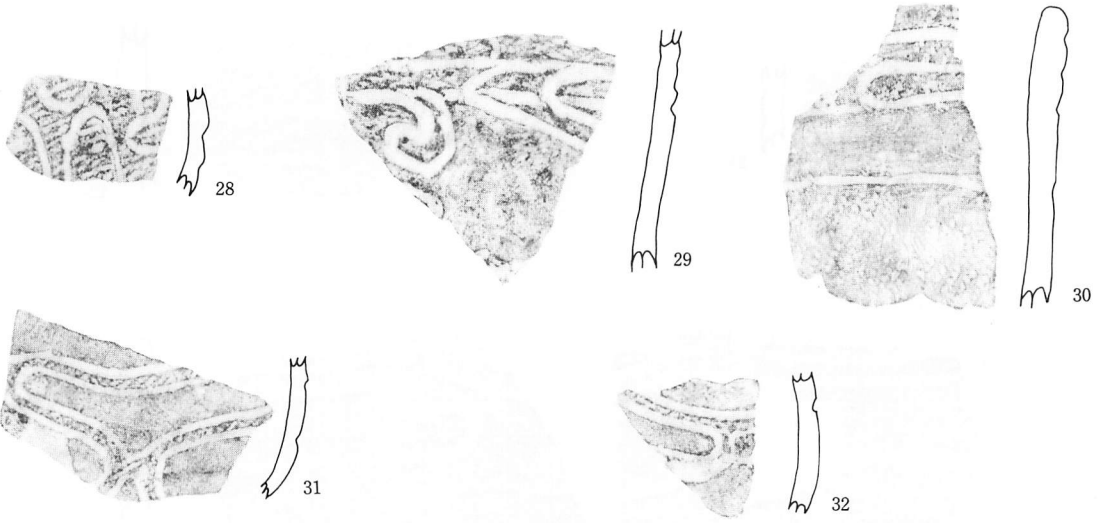
图版25 遺構外出土土器(1) (1~4·I群1類, 5~11·I群2類)



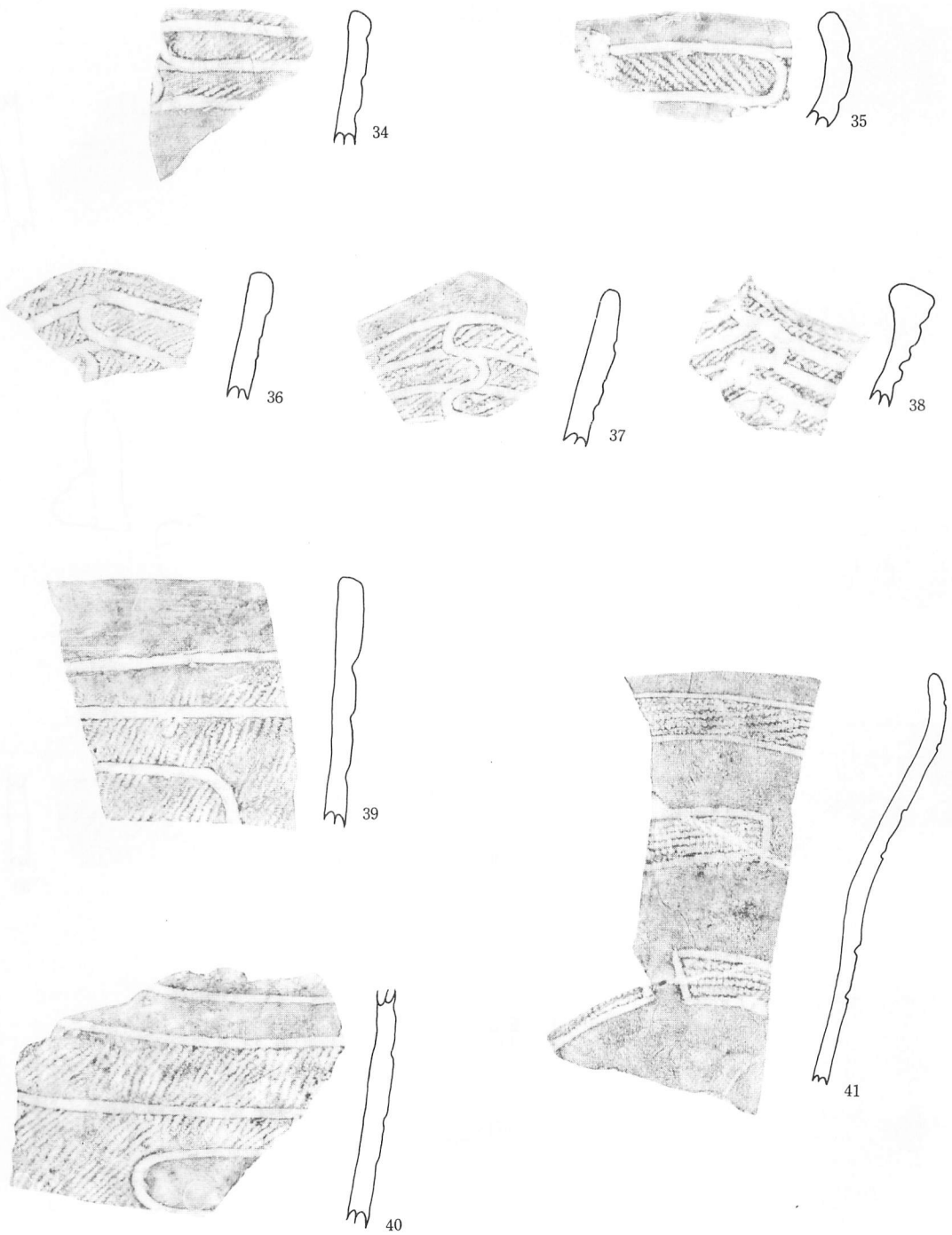
图版26 遺構外出土土器(2) (12・I群3類, 13~18・II群1類, 19~20・II群2類)



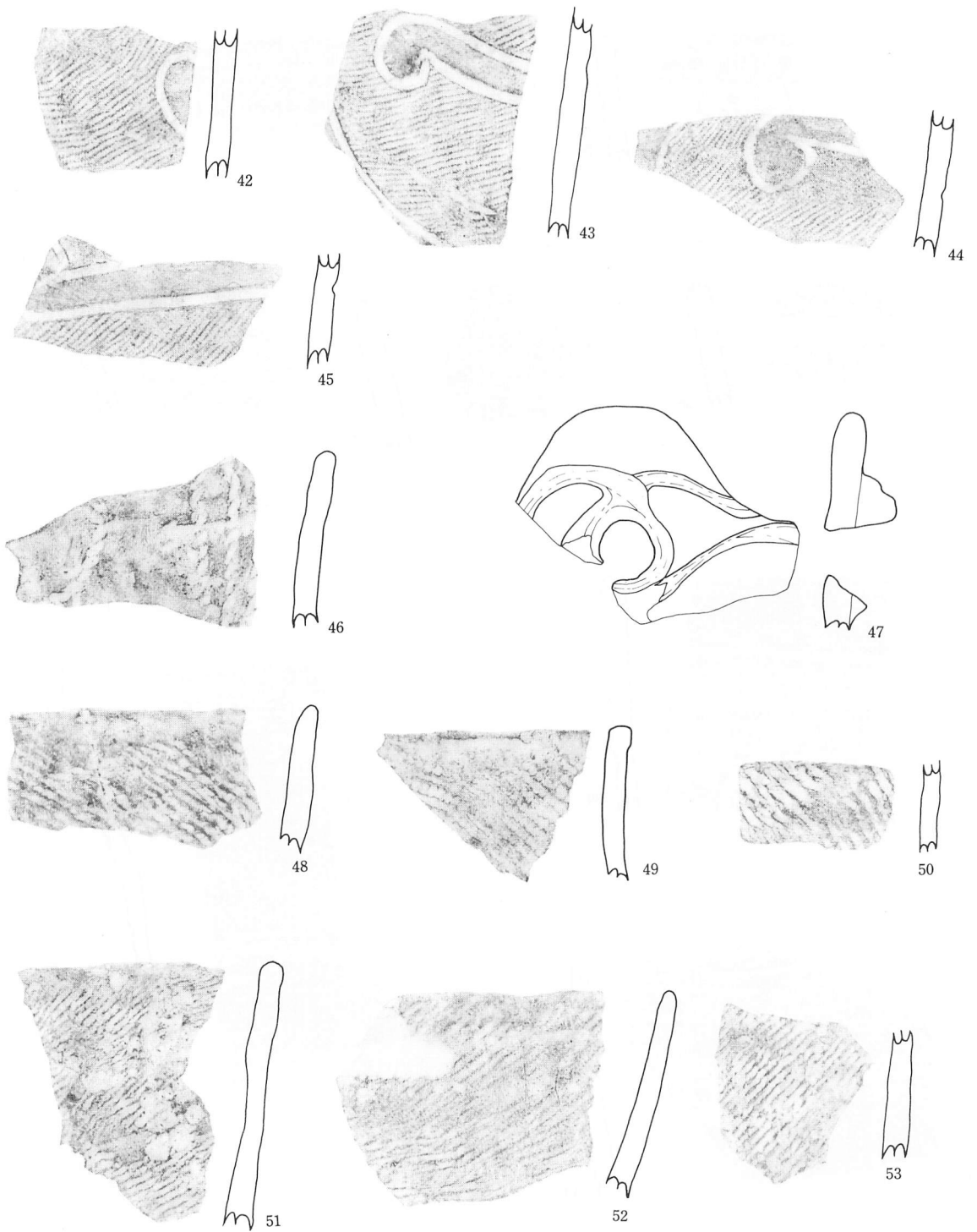
图版27 遺構外出土土器(3) (21~27·II群2類)



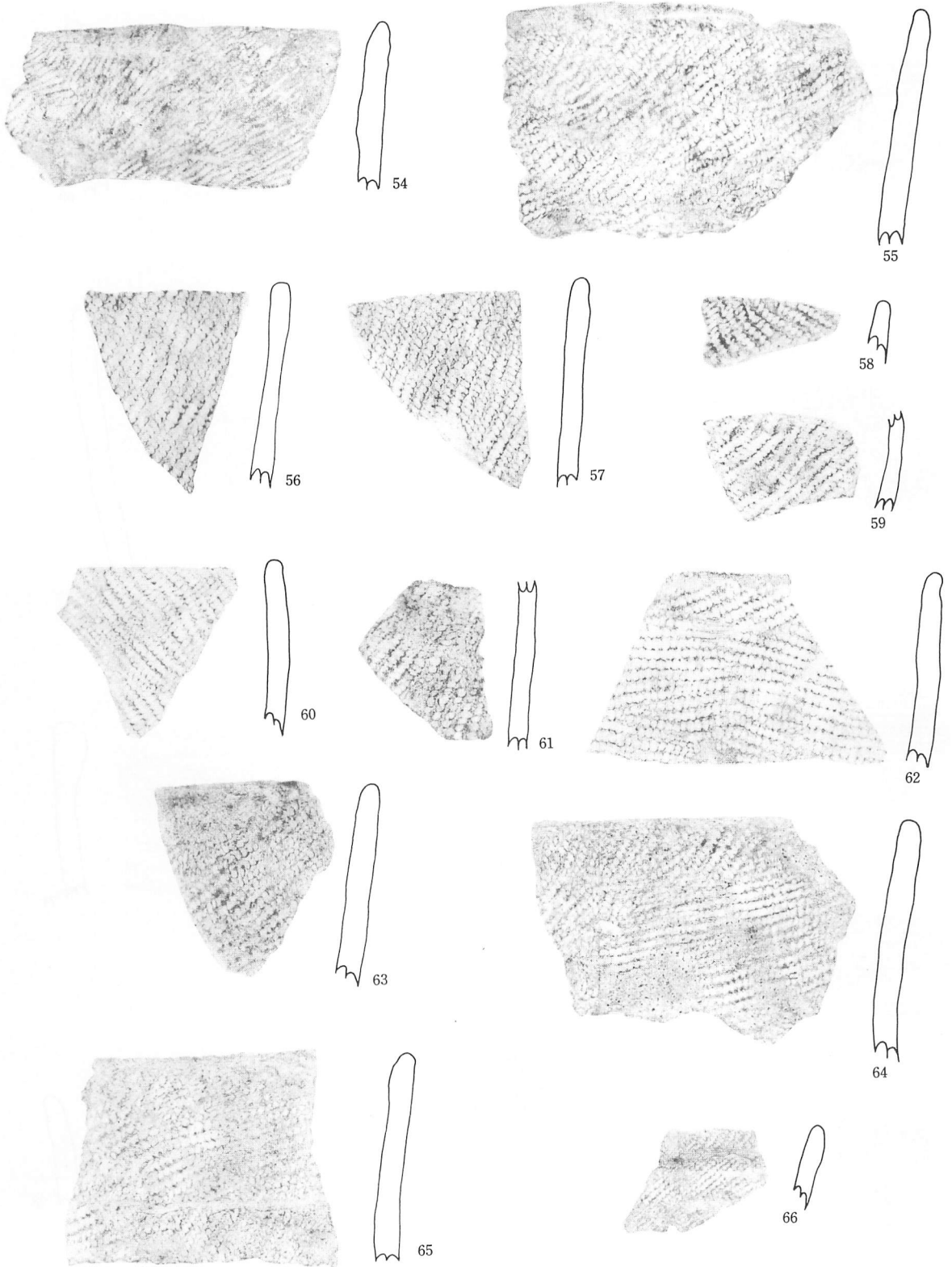
圖版28 遺構外出土土器(4) (28~33·II群2類)



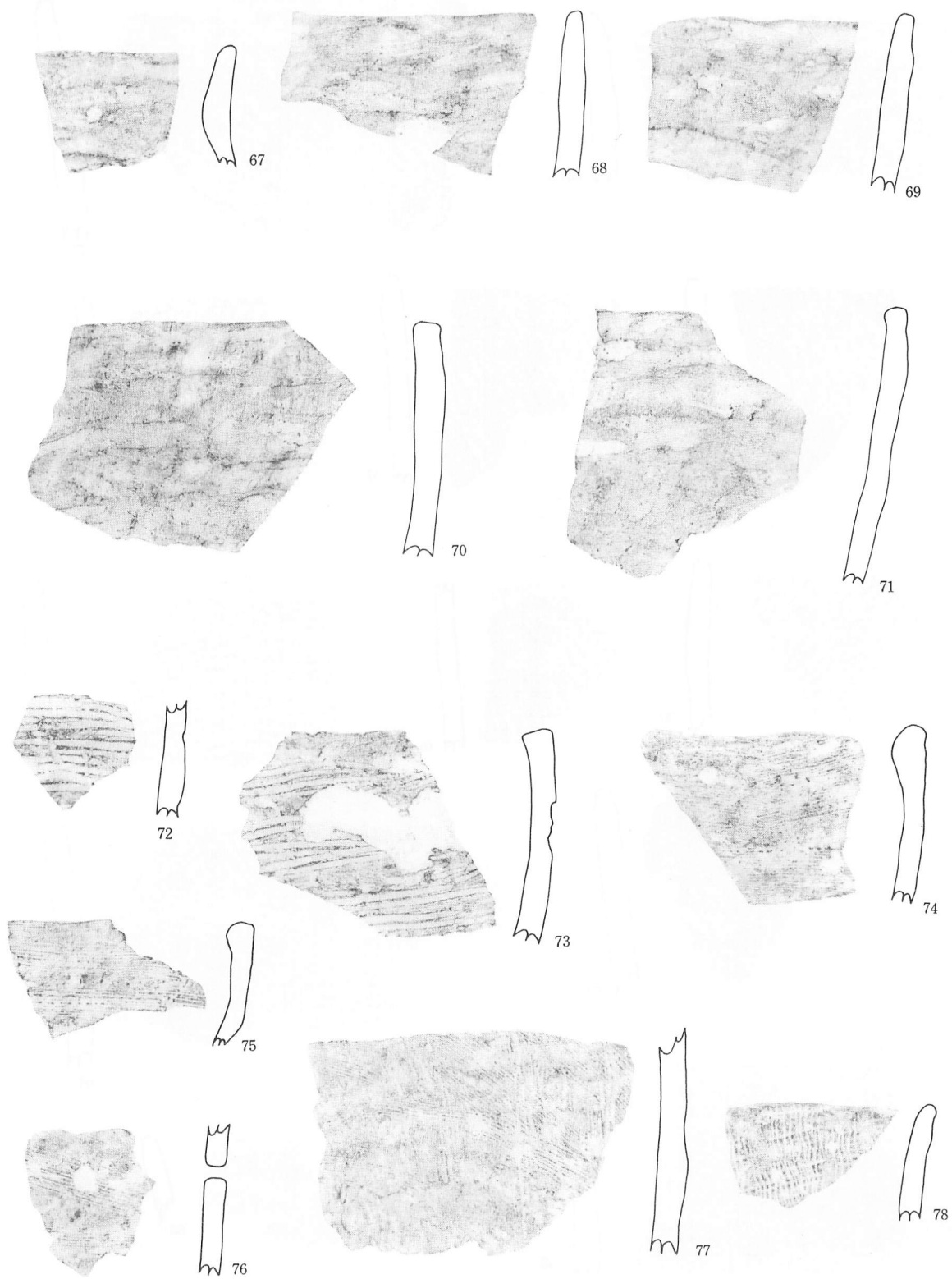
图版29 遺構外出土土器(5) (34~38 II群3類, 39~40·II群4類, 41·IV群1類)



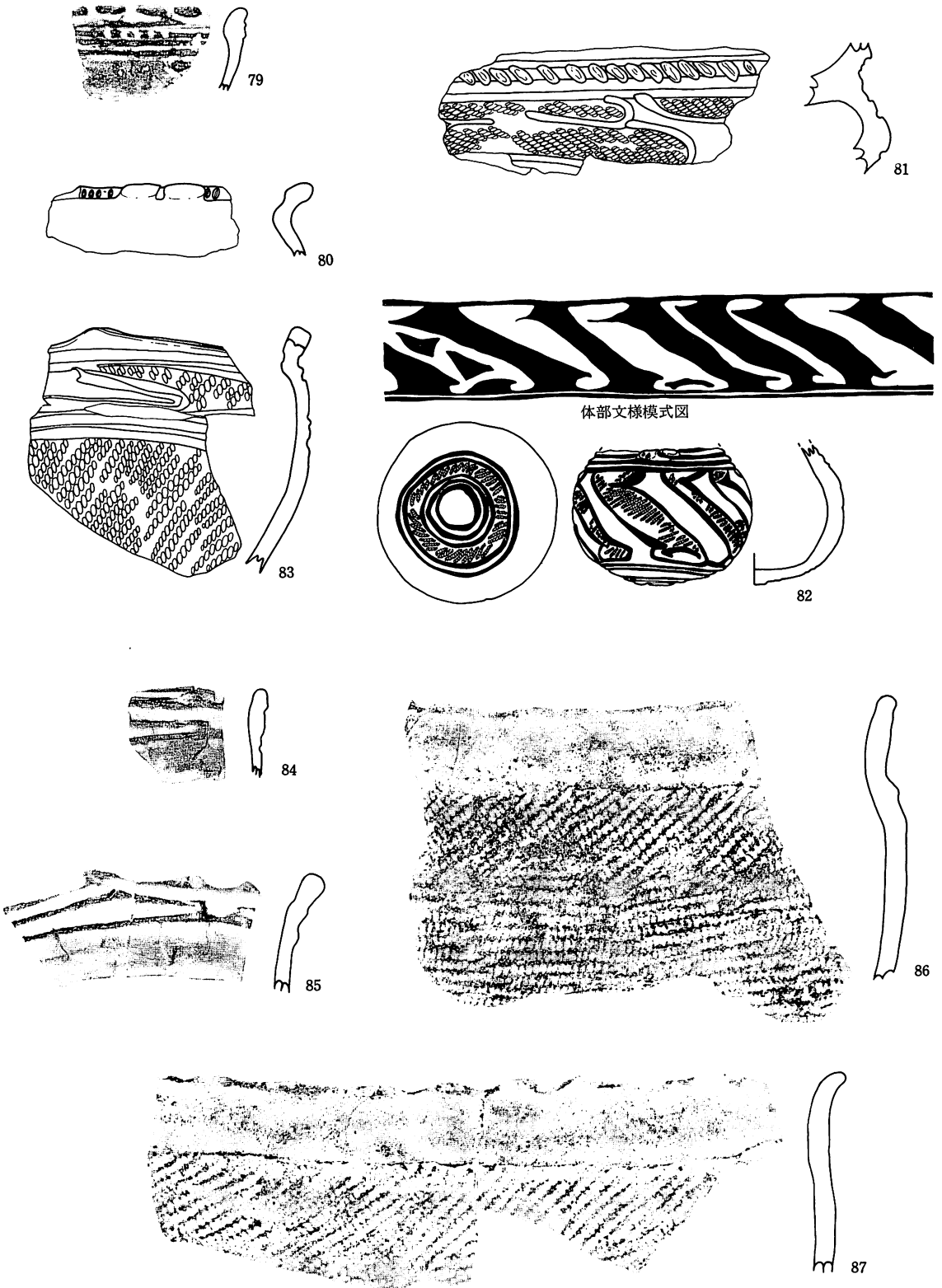
图版30 遺構外出土土器(6) (42~45・II群4類, 46・I群4類, 47・I群5類, 48~53・II群5a)



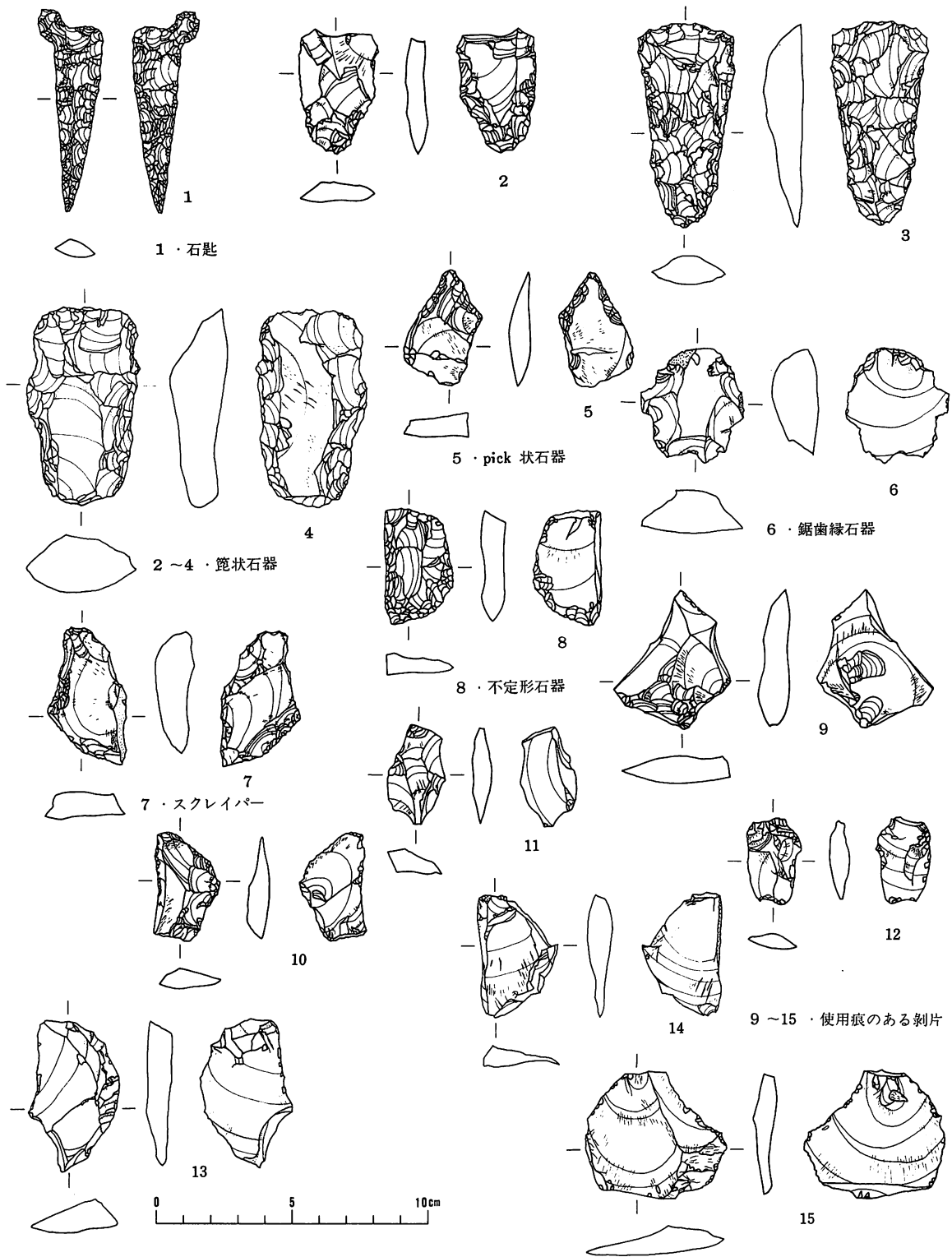
图版31 遺構外出土土器(7) (54・II群5類a, 55~66・II群5類b)



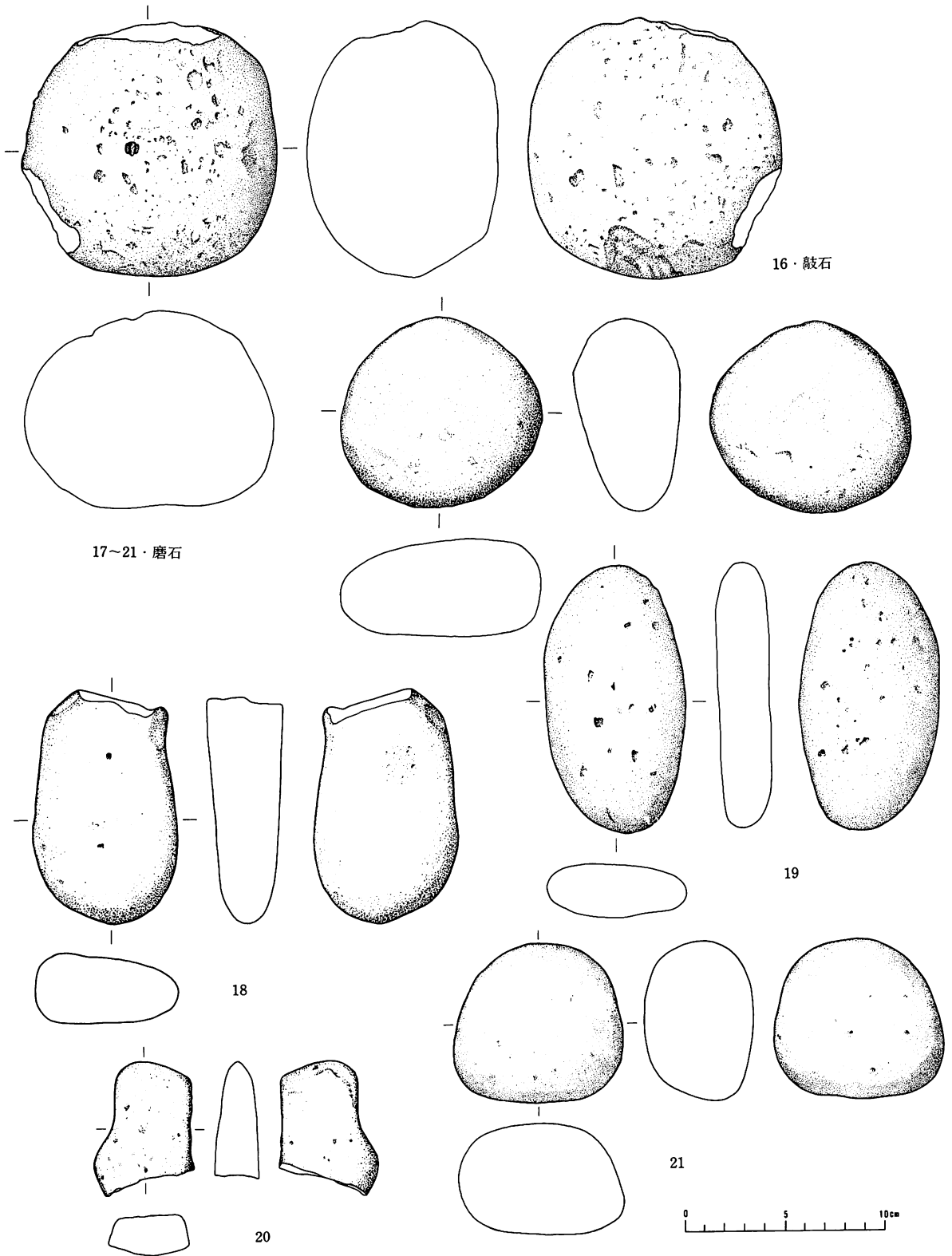
图版32 遺構外出土土器(8) (67~71・II群5類c, 72、73・II群5類d, 74~78・II群5類e)



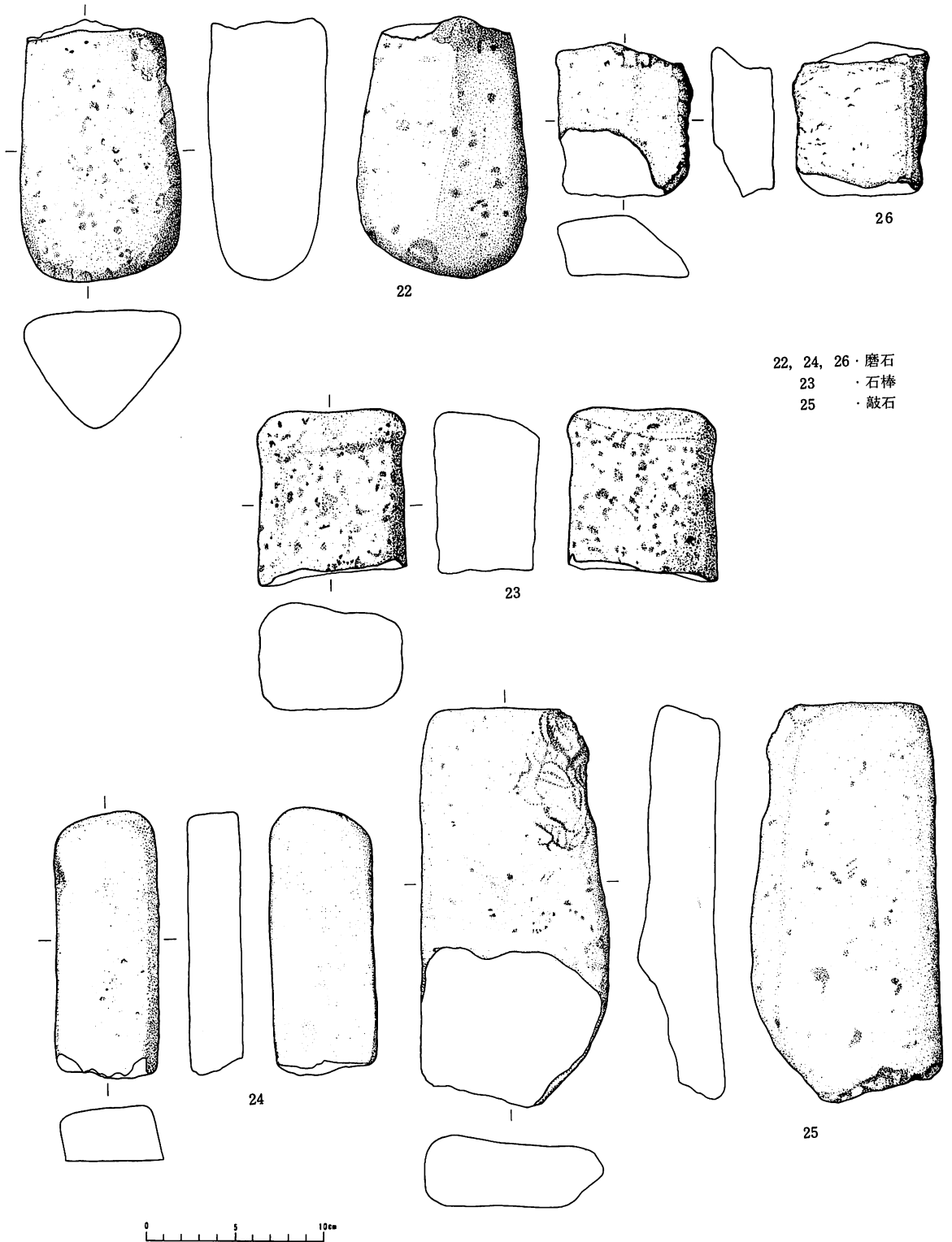
图版33 遺構外出土土器(9) (79~82・Ⅲ群1類, 83~85・Ⅲ群2類, 86, 87・Ⅲ群3類)



図版34 遺構外出土石器類(1)



图版35 遺構外出土石器類(2)



图版36 遺構外出土石器類(3)

表1 遺構内出土石器類計測表

図版番号	出土地区	器種	法量			石質
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	
22-1	C-1(住)埋土	石 鎌	3.2	2.4	0.9	珪質頁岩
22-2	C-1(住)埋土	使用痕のある剥片	2.9	2.1	0.4	珪質頁岩
22-3	C-1(住)埋土	使用痕のある剥片	2.7	1.7	0.8	硬質頁岩
22-4	C-1(住)埋土	スクレイパー	4.1	3.6	1.3	硬質頁岩
22-5	C-1(住)埋土	使用痕のある剥片	3.2	3.0	0.7	珪質頁岩
22-6	C-1(住)埋土	スクレイパー	6.9	3.5	1.2	珪質頁岩
22-7	C-3(住)埋土	石 匙	3.8	4.5	0.9	珪質頁岩
22-8	C-3(住)埋土	不定形石器	6.5	4.1	1.5	硬質頁岩
22-9	C-51ピット埋土	磨製石斧	5.7	3.9	0.9	流紋岩
23-10	C-1(住)埋土	磨 石	10.2	8.8	5.6	安山岩
23-11	C-1(住)埋土	凹 石	10.5	8.1	5.0	安山岩
23-12	C-1(住)埋土	磨 石	13.1	8.4	5.4	安山岩
23-13	C-5(住)床面	凹 石	10.8	8.6	4.6	安山岩
24-14	C-51ピット埋土	石 棒	13.1	8.5	6.4	石英安山岩
24-15	C-5(住)炉構成礫	台 石	24.5	12.3	8.1	輝石安山岩
24-16	C-1(住)埋土	磨 石	12.7	9.4	4.5	輝石安山岩
24-17	C-5(住)床面	台 石	41.4	29.9	6.2	安山岩

石質鑑定 当埋蔵文化財センター 専門調査員 種市 進

床

第2 遺構外出土石器類計測表

図版番号	出土地区	器種	法量			石質
			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	
34-1	II C-2e	石 匙	6.7	2.2	0.8	珪質頁岩
34-2	II C-2c	筥状石器	4.3	2.8	0.8	珪質頁岩
34-3	II C-2e	筥状石器	7.5	3.5	1.4	硬質頁岩
34-4	I E-3h	筥状石器	7.2	4.0	2.0	硬質頁岩
34-5	II C-1i	Pick状石器	4.2	2.4	0.9	珪質頁岩
34-6	II C-2g	鋸齒縁石器	4.2	3.8	1.7	硬質頁岩
34-7	II C-2g	スクレイパー	2.9	4.6	1.3	珪質頁岩
34-8	II C-2g	不定形石器	4.2	2.4	1.0	珪質頁岩
34-9	II C区 表採	使用痕のある剝片	5.1	4.1	1.1	珪質頁岩
34-10	II C-2f	使用痕のある剝片	3.8	2.3	0.7	硬質頁岩
34-11	II C-3c	使用痕のある剝片	3.6	2.1	0.9	珪質頁岩
34-12	II C-5c	使用痕のある剝片	3.2	1.9	0.6	珪質頁岩
34-13	II C-2e	使用痕のある剝片	5.5	3.1	1.2	珪質凝灰岩
34-14	II C-3c	使用痕のある剝片	4.4	2.8	0.8	珪質頁岩
34-15	I E-4j	使用痕のある剝片	4.7	5.2	0.9	硬質頁岩
35-16	II C-2d	敲 石	12.7	12.6	9.7	2,240 安山岩
35-17	II C区 表採	磨 石	9.5	10.1	4.9	700 安山岩
35-18	II C区 表採	磨 石	11.4	7.2	3.5	520 安山岩
35-19	II C区 表採	磨 石	13.4	6.9	3.8	400 輝石安山岩
35-20	II C区 表採	磨 石	6.1	5.1	2.1	100 安山岩
35-21	II C区 表採	磨 石	8.1	8.5	5.6	590 安山岩
36-22	II C-2d	磨 石	14.8	6.8	6.5	1,250 安山岩
36-23	II C-2d	石 棒	10.9	8.3	6.0	770 石英安山岩
36-24	II C区 表採	磨 石	15.1	3.2	3.2	540 輝石安山岩
36-25	II C区 表採	敲 石	22.6	10.6	4.0	1,660 安山岩
36-26	II C区 表採	磨 石	8.6	3.4	3.4	330 輝石安山岩

Ⅶ ま と め

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代住居址7棟、ピット13基、焼土遺構2基であり、1978年度調査・検出された遺構に、さらに貴重な資料を付け加えることができた。

この2カ年間の調査で検出された遺構は、次の通りである。

縄文時代住居址 19棟 平安時代住居址 1棟 ピット 30基 焼土遺構 2基
炉址 6基 陥し穴状遺構 1基 埋設土器遺構 1基

これらのうち、今回検出された縄文時代住居址、ピット、焼土遺構について若干のまとめを記したい。

(1) 遺 構

(1) 縄文時代住居址

● 時期について この19棟を時期別に見ると、前期末葉に位置づけられるもの3棟、中期中葉に位置づけられるもの1棟、中期後葉から中期末葉に位置づけられるもの4棟、後期初頭に位置づけられるもの2棟、後期末葉に位置づけられるもの3棟、晩期中葉に位置づけられるもの3棟、時期決定ができないもの3棟となる。

● 規模及び形状 規模については前期末葉のもの約3m～4m、中期中葉のもの約3m、中期後葉から中期末葉のもの約3m～5m、後期初頭のもの約3m～5m、後期末葉のもの約4m、晩期中葉のもの約4mとなり、時期は異なるにせよ、検出されたほとんどの住居址は長軸の長さが、約3m～5mの規模をもつものである。(但し、前期末葉のものに約8m、後期末葉のものに約7mの規模をもつ住居址が各1棟ずつある。)

形状については、平面形が、前期末葉のもの隅丸方形、不整形、長方形各1棟、中期中葉のもの隅丸方形1棟、中期後葉から中期末葉のもの楕円形、円形各1棟、後期初頭のもの楕円形、円形各1棟、後期末葉のもの円形3棟、晩期中葉のもの円形3棟となり、前回の報告書の『まとめ』で記述されているように、当遺跡で見ると、平面形は、方形状(前期中葉)→隅丸方形状(中期中葉)→楕円形・円形(中期後葉から中期末葉及び後期初頭)、円形(後期末葉から晩期中葉)と変化するようである。

● 柱穴配置 今回の調査で柱穴配置が明らかになった住居址は1棟であったが、前回の調査で明らかになっているもの3棟を含めると、柱穴配置は五角形の配置を示すもの(後期初頭)、七角形の配置を示すもの(後期末葉)、円形の配置を示すもの(晩期中葉)とに大別される。

(2) ピット

今回の調査で検出されたピットは計13基である。形状は断面形がフラスコ形を呈するもの3基、ビーカー形を呈するもの4基、皿形を呈するもの6基である。規模は開口部長軸が約100cm～150cm、深さ約20cm～50cmのものが大半を占める。

これらのうち、住居址内から検出されたものはC-51ピットとC-54ピットであるが、いずれもビーカー形ピットである。この2基以外のピットは住居址と近接した位置にある。時期決定に足りる出土遺物はほとんど得られていないが、C-6住居址とC-54ピットの関連及びC-56ピット底部から出土した炭化材のC-14年代の測定結果から、これらのピットは縄文時代中期から後期に位置づけられると思われる。

● 炭化材のC-14年代 C-56ピット底部から出土した炭化材のC-14年代の測定を社団法人日本アイソトープ協会に依頼した。その測定結果は下記の通りである。

C-56ピット（底部炭化材）……3900±65y B.P. (3780±60y B.P.) N-3878

(3) 焼土遺構

今回の調査で検出された焼土遺構は2基である。いずれも現地性の焼土であり、この遺構の周囲には壁、柱穴及び床面と思われる一定の堅さは確認できなかった。出土遺物は得られず、時期は不明である。

(2) 出土遺物

土器を層位的また遺構の重複関係による相対的な、編年を組み立てることはできなかった。ここでは、文様の諸形式から形式分類を行ったものである。

I群1類の土器は沈線によって「∧」字文や楕円文を施しているものである。縄文中期後葉の大木9式に比定される。隆起線より沈線による文様構成が主体を占めていることから、同じ大木9式の中でも新しい方に属するものと思われる。前回の野駄遺跡の調査での遺構外出土遺物の中のIV群-C類のbに相当する。

I群2類の土器は主に口縁部に隆帯を貼付しているものである。隆帯の面を、a・へら状のもの、b・半截竹官のもの、c・竹管状のもので連続的に圧痕を施したものや、撚糸圧痕文を施したものがあ。これらは、いずれも口縁部に施されているものが大半で、わずかに体部中央まで隆帯がのびているものもある。本類は縄文中期末から後期初頭へ継ぐ重要な土器類と思われる。

東北地方のある限られた範囲に分布している門前式（定義が曖昧であって不明確な点が多いが）の前段階としてとらえることができる。本類は前回の調査でも遺構外から検出されているほか、周辺の遺跡としては、安代町荒屋Ⅰ・Ⅱ・越戸遺跡などから出土している。越戸遺跡からのものは、複式炉をもつ竪穴住居址から出土したものである。本類は上記のことなどから縄文中期末葉に位置づけられるであろう。

Ⅰ群Ⅲ類の土器は口縁部の無文帯と体部の地文の境に刺突文を施しているものである。Ⅱ類と同じく中期末葉に位置づけられるものと思われる。

Ⅰ群のⅣ・Ⅴ類は縄文中期に属するものと思われるが詳細については不明である。

Ⅱ群のⅠ・Ⅱ類の土器は、無文、縄文や撚糸圧痕文を地文として、細沈線や沈線によって平行文、曲線文、入組文を施したものである。広い意味での縄文後期初頭の+腰内Ⅰ式に併行するものと思われる。この時期には、土器の様相から東北北半の影響を強く受けていることがわかる。

Ⅱ群のⅢ類は、加曾利Ⅰ式、Ⅳ類は加曾利Ⅱ式に併行するもので縄文後期中葉に位置づけられる。

Ⅲ群のⅠ類は縄文晩期大洞Ⅰ式、Ⅱ類は大洞Ⅰ'式に併行するものである。

Ⅳ群のⅠ類の土器は、文様の構成からみて弥生中期の柵形罫式に比定されるものと思われる。類似するものが出土している遺構として、岩手県内では大船渡市長谷堂貝塚遺跡、紫波町上平沢新田遺跡などがある。

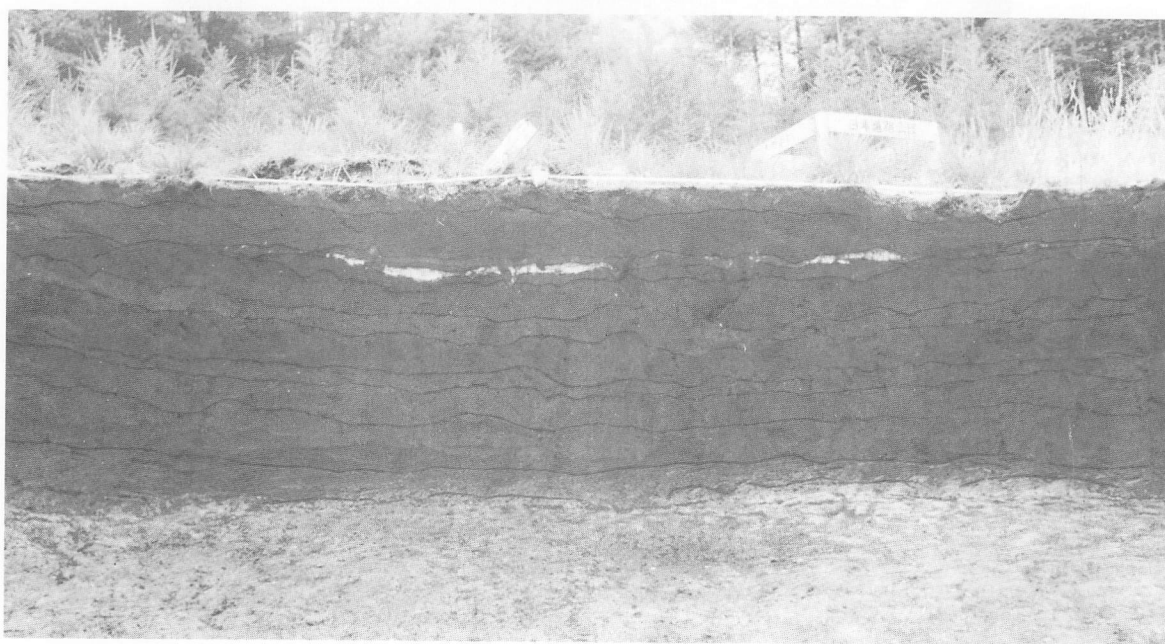
今回の調査で出土した石器類は合計43点である。そのうち磨石が最も多く20点出土している。石質をみると、石鏃、石匙、不定形石器（スクレイパー、鋸歯縁石器などを含め）、篋状石器には、珪質頁岩が多く、次いで硬質頁岩が使用されている。凹石、敲石は安山岩、石棒は石英、安山岩、磨石は安山岩が主体を占めそのほかに輝石安山岩、台石には安山岩、輝石安山岩が使用されている。

参考・引用文献

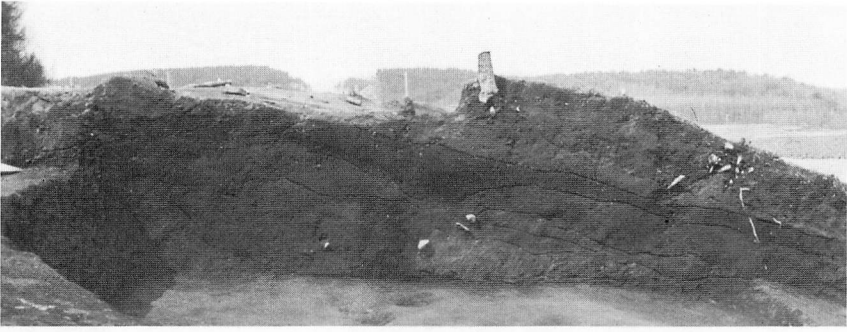
- 田村誠一 1968 『十腰内遺跡』 岩木山刊行会
- 今井富士雄・磯崎正彦 1968 『大曲 I 号遺跡』 岩木山刊行会
- 草間俊一・他 1971 『貝鳥貝塚』 岩手県花泉町教育委員会
- 草間俊一・鈴鹿良一・玉川一郎・他 1974 『崎山弁天遺跡』 岩手県大槌町教育委員会
- 鈴木克彦・他 1974 『中ノ平遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会
- 及川 洵・遠藤勝博・他 1974 『門前貝塚』 岩手県陸前高田教育委員会
- 葛西 励・他 1979 『蛸沢遺跡』 青森市蛸沢遺跡発掘調査団
- 芹沢長介編 1979 『聖山』 東北大学文学部考古学研究会
- 本堂寿一 1980 『八天遺跡』 岩手県北上市教育委員会
- 中村良幸 1980 『観音堂遺跡』 岩手県大迫町教育委員会
- 四井謙吉 1980 『野駄遺跡』 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋文夫・他 1980 『松尾村長者屋敷遺跡(1)』(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 吉田 努・千葉周秋 1980 『上平沢新田遺跡』 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-III」 岩手県教育委員会
- 四井謙吉 1981 『荒屋 I 遺跡』 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- 小平忠孝・他 1981 『越戸 II 遺跡』(財)岩手県埋蔵文化財センター



a. 遺跡航空写真



b. 深掘土層断面



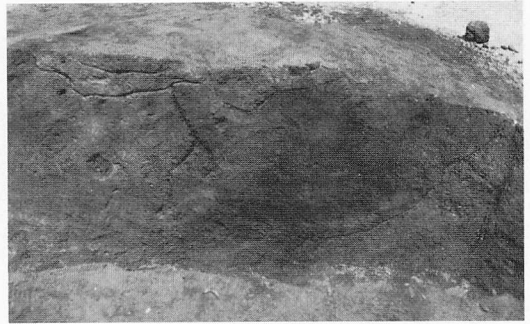
a. C-1 住居址 (土層断面)



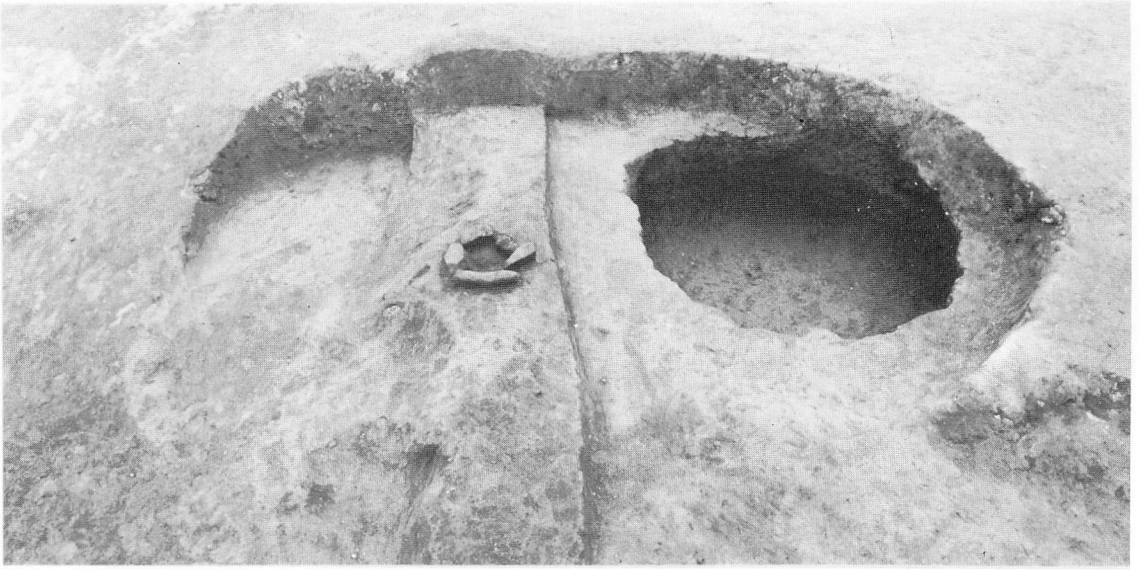
b. C-1 住居址



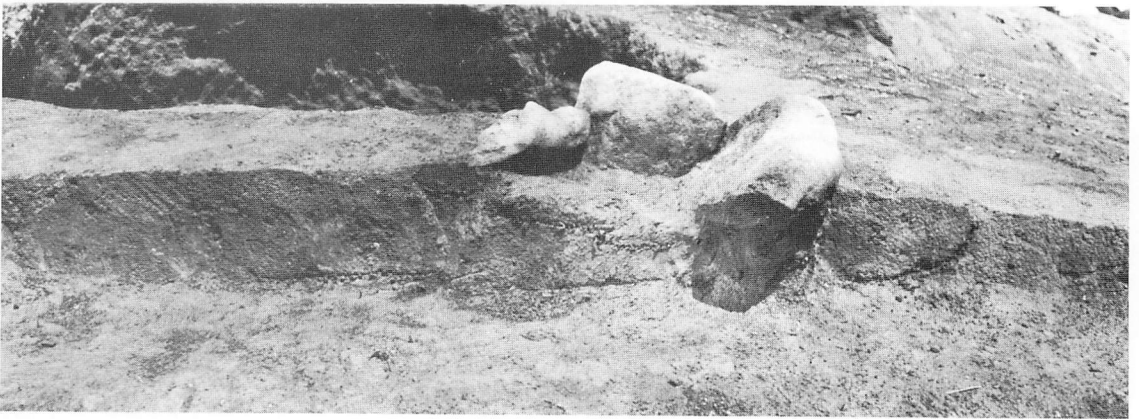
c. C-1 住居址炉



d. C-1 住居址炉 (断面)



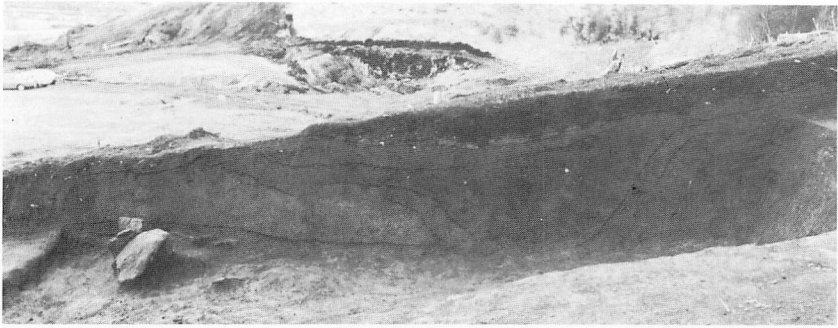
a. C-2住居址



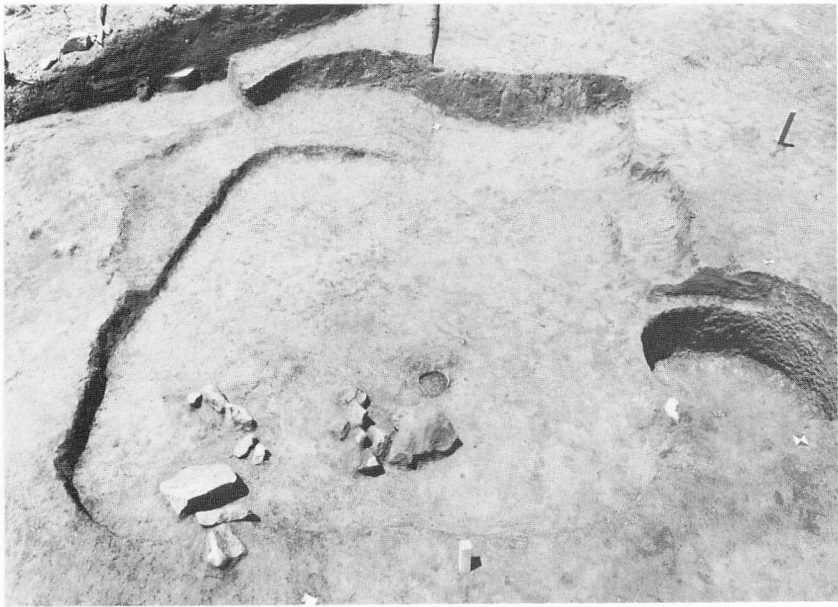
b. C-2住居址炉(断面)



c. C-2住居址炉



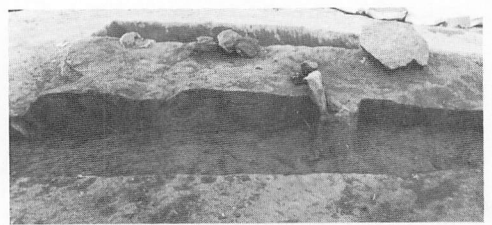
a. C-3·4住居址(土層断面)



b. C-3·4住居址



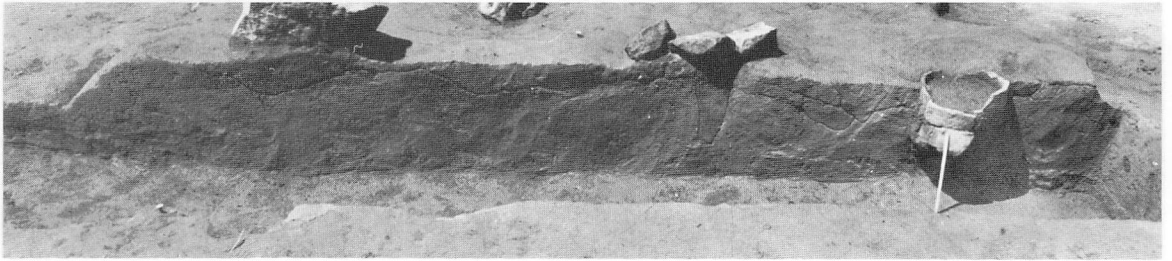
c. C-3住居址炉



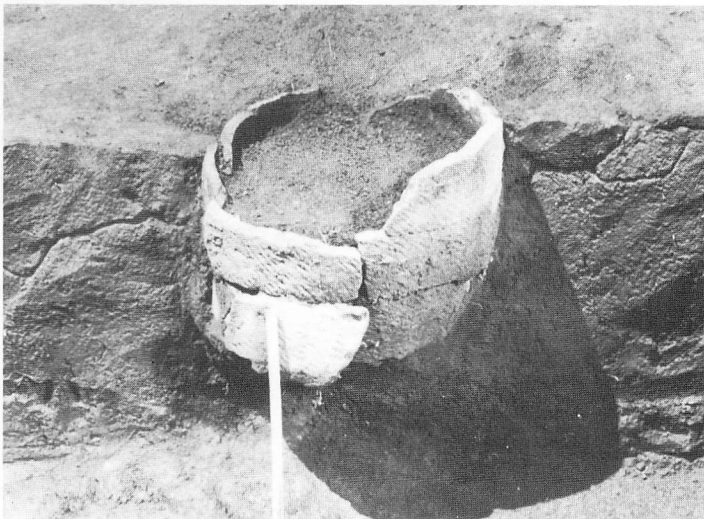
d. C-3住居址炉(断面)



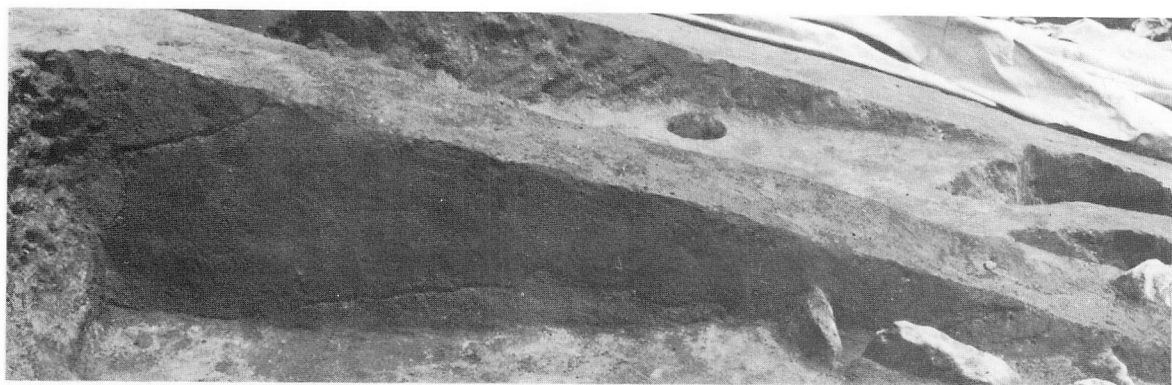
a. C-4住居址炉



b. C-4住居址炉（断面）



c. C-4住居址埋設土器（断面）



a. C-5住居址（土層断面）

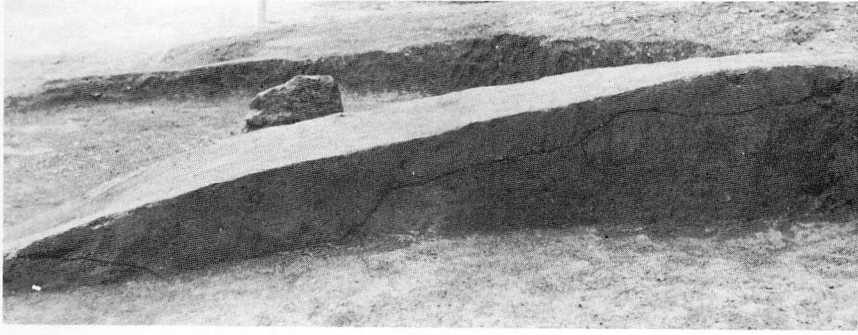


b. C-5住居址

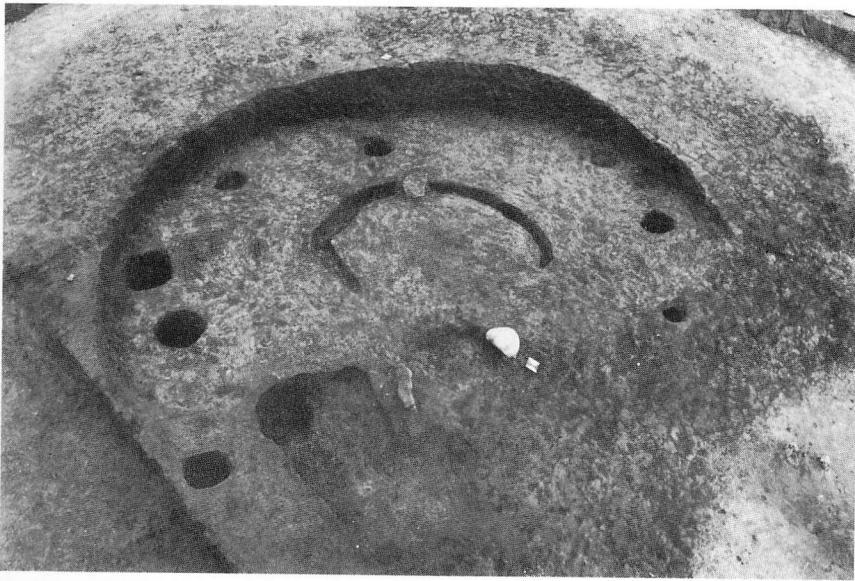


d. C-5住居址炉（断面）

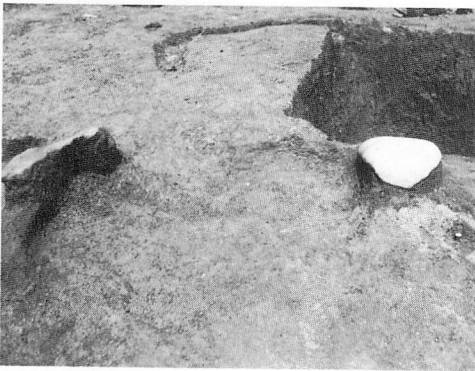
c. C-5住居址炉



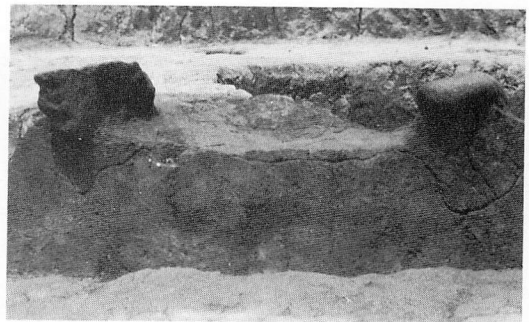
a. C-6住居址（土層断面）



b. C-6住居址



c. C-6住居址炉



d. C-6住居址炉（断面）



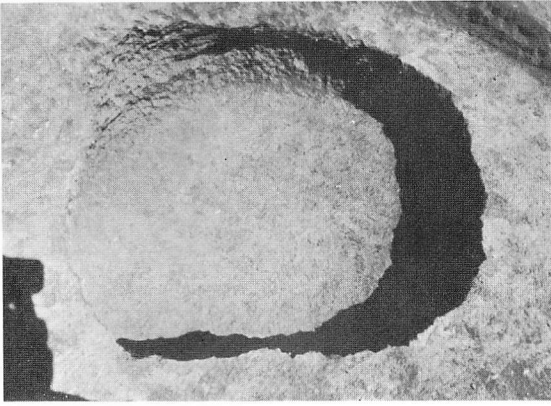
a. D-1 住居址 (土層断面)



b. D-1 住居址



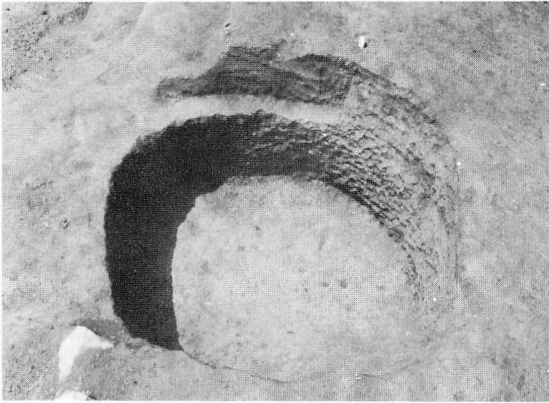
c. D-1 住居址炉



a. C-51ピット



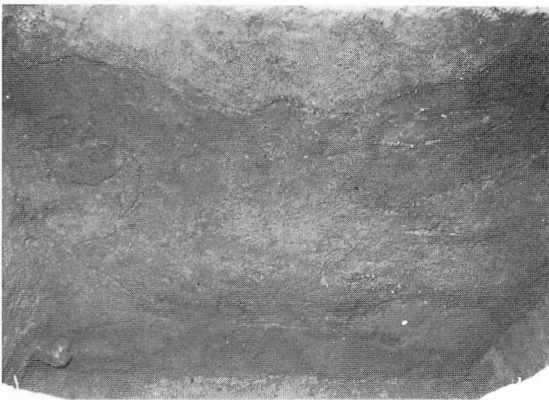
b. C-52ピット (土層断面)



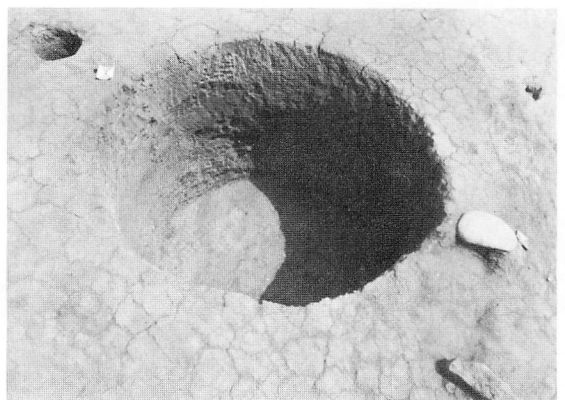
c. C-52ピット



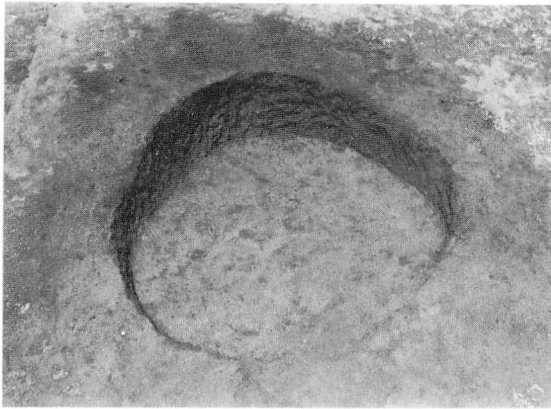
d. C-53ピット



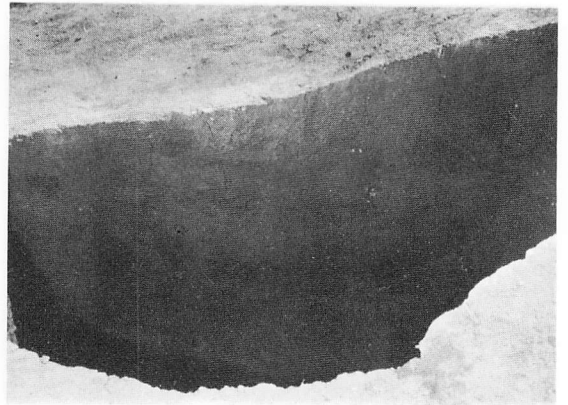
e. C-54ピット (土層断面)



f. C-54ピット



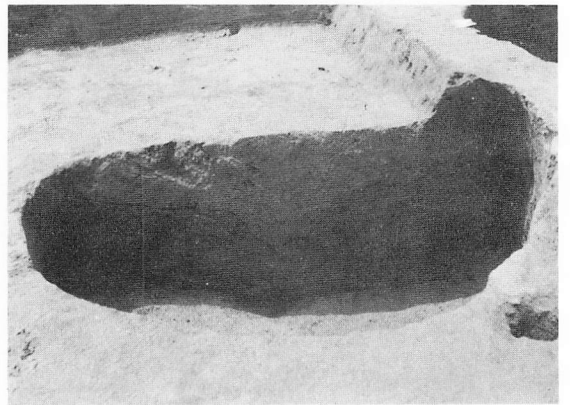
a. C-55 ピット



b. C-56 ピット (土層断面)



c. C-56 ピット



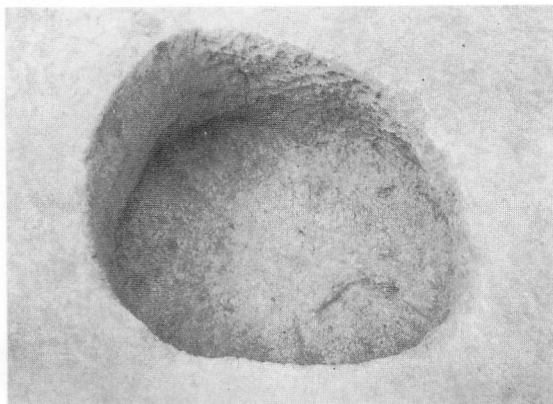
d. C-57 ピット (土層断面)



e. C-57 ピット



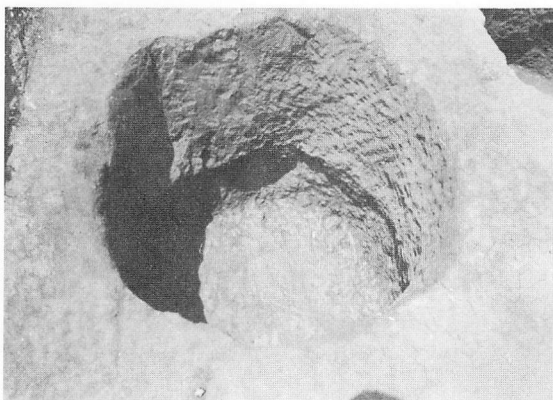
f. C-58 ピット



a. D-51 ピット



b. D-52 ピット (土層断面)



c. D-52 ピット



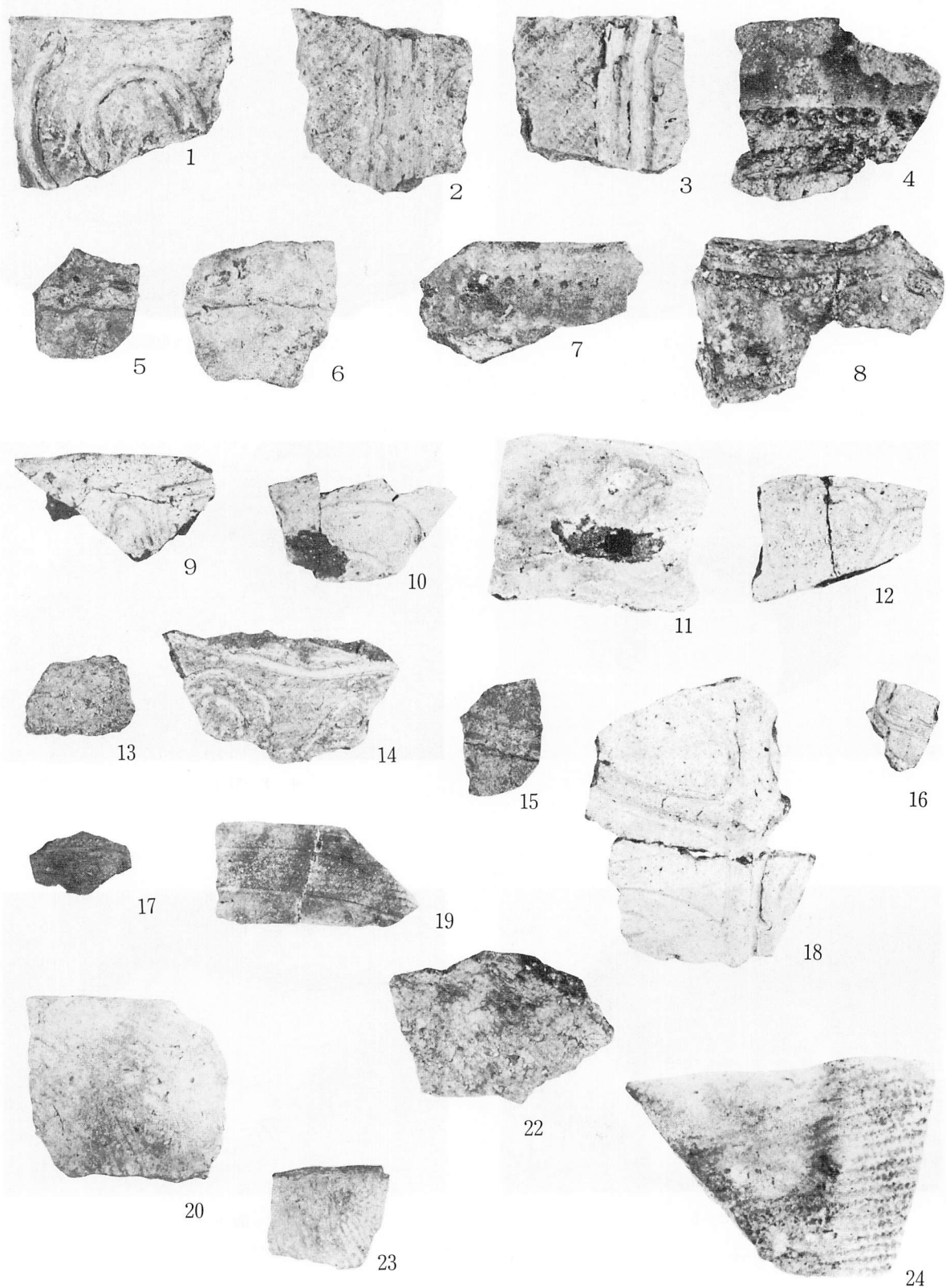
d. E-51 ピット



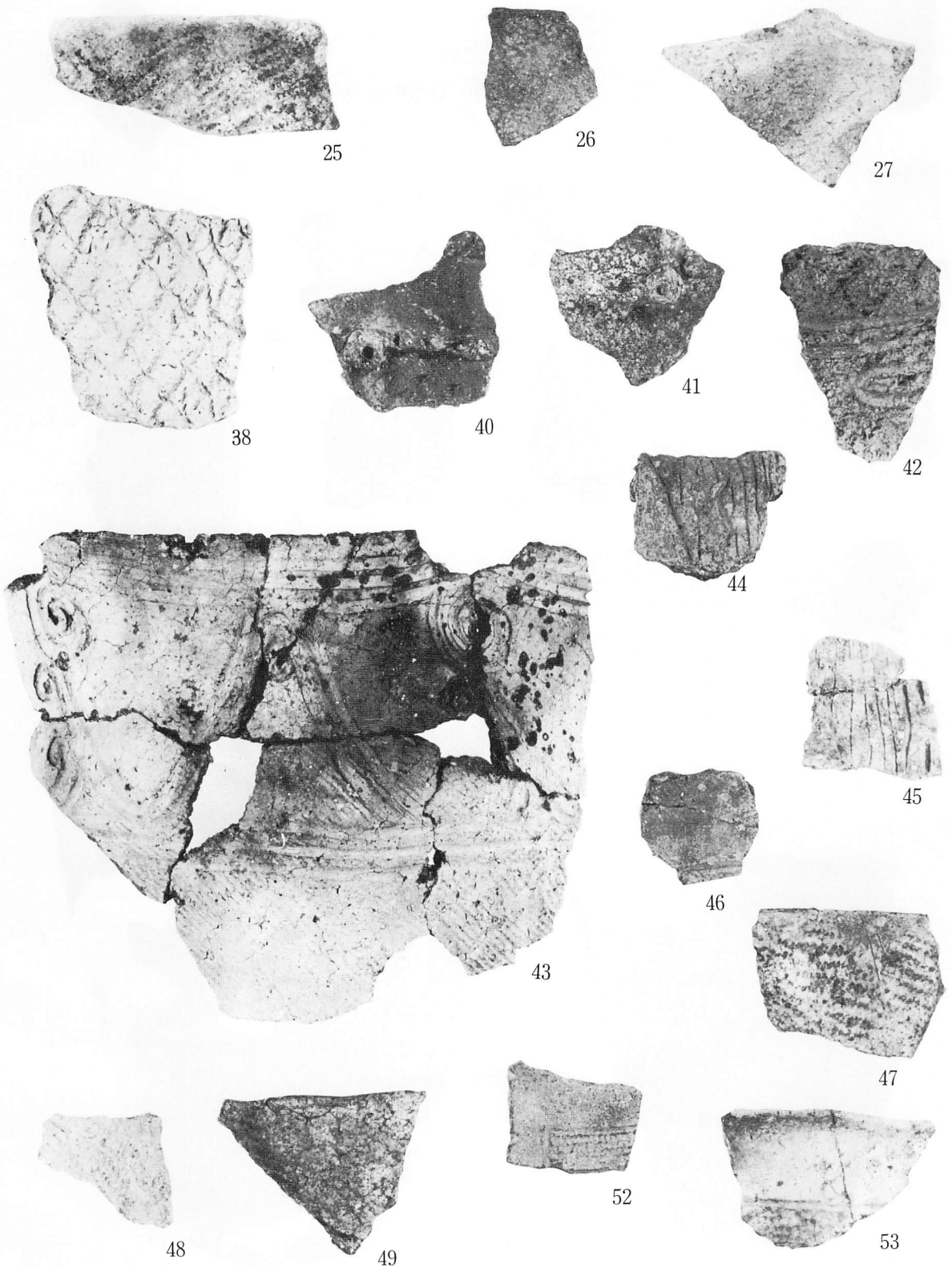
e. E-52 ピット



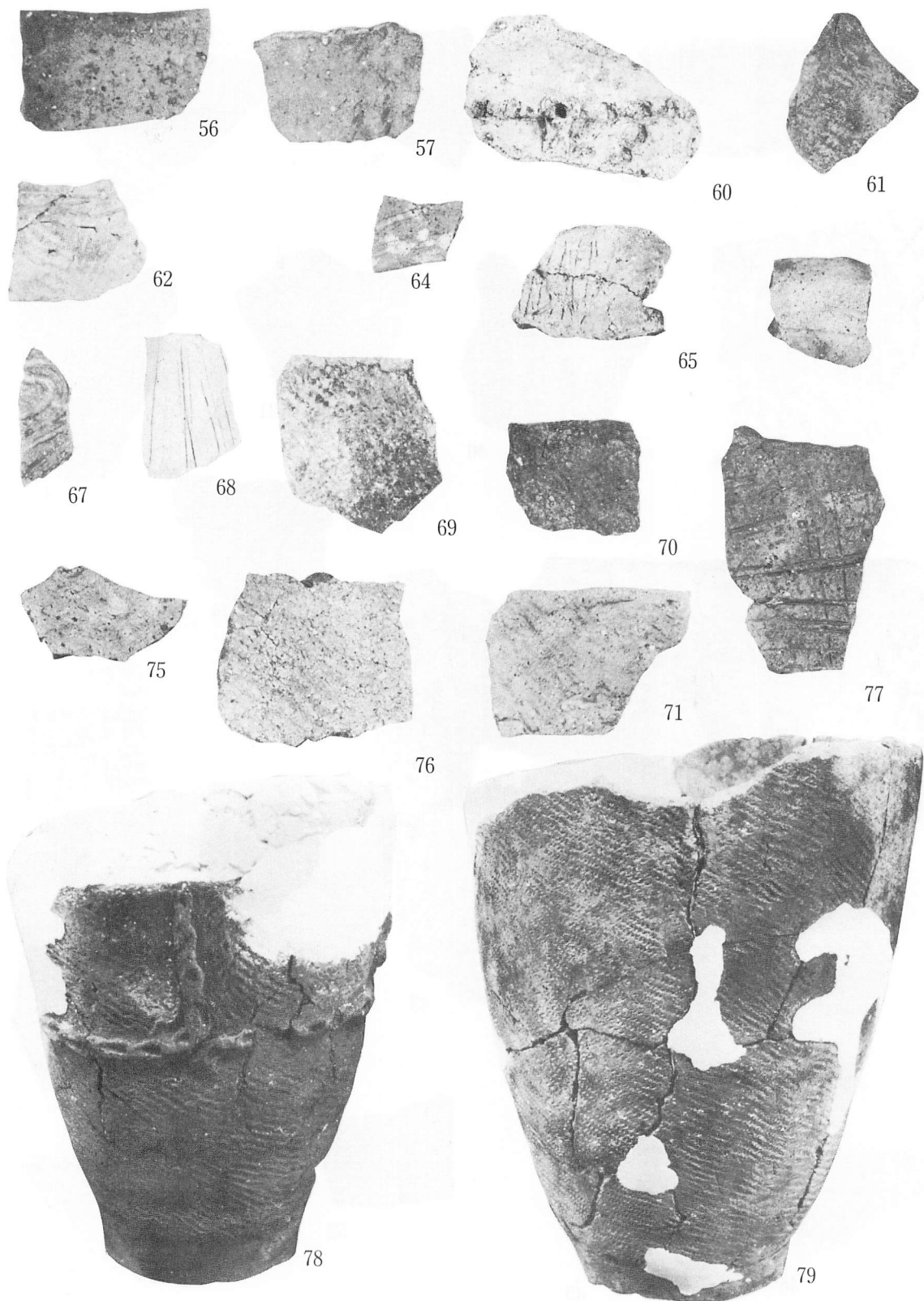
f. E-53 ピット



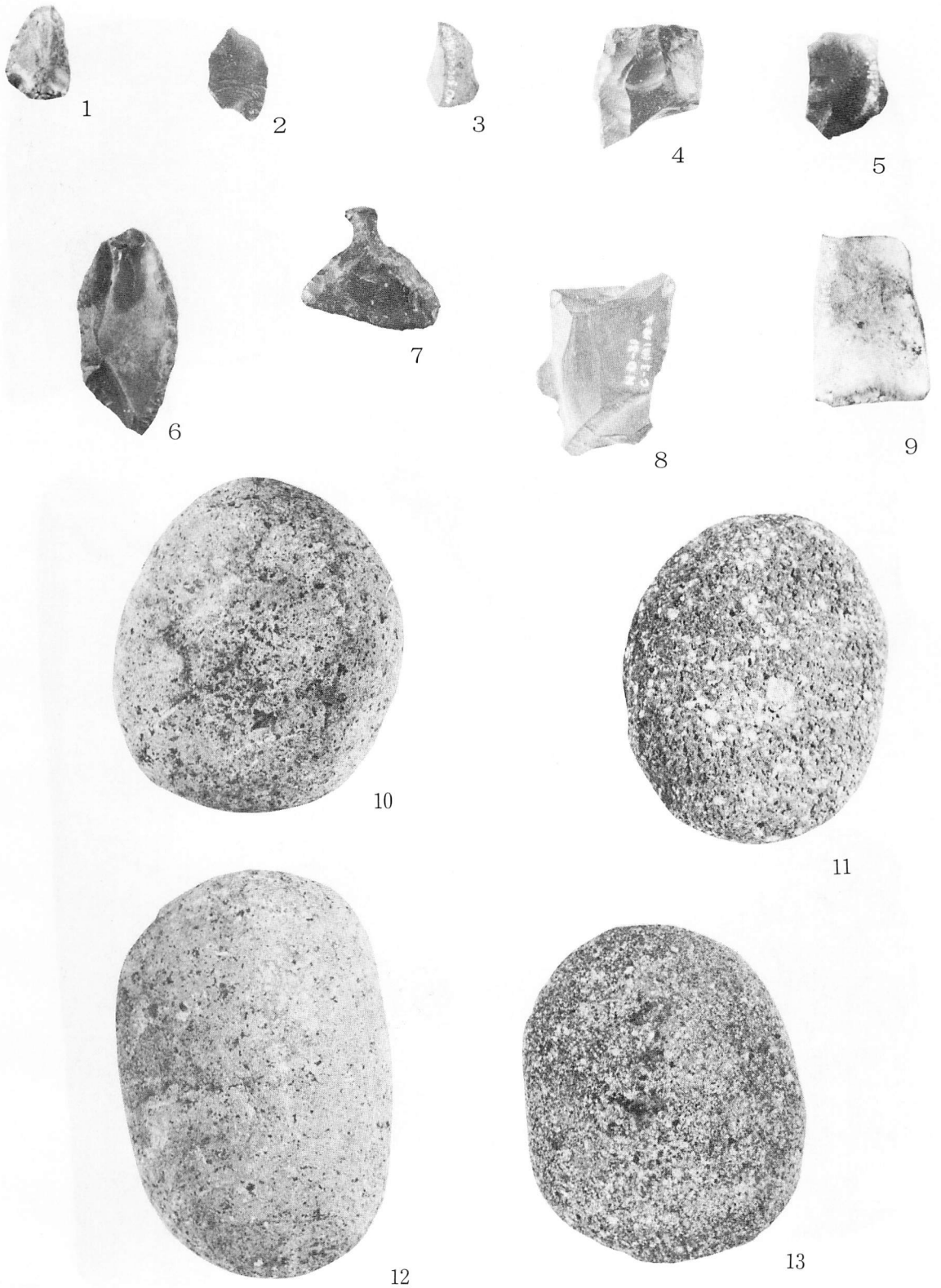
写真図版12 遺構内出土土器(1)〔1~24・C-1(併)〕



写真図版13 遺構内出土土器(2)〔26~38・C-1(缶), 40~43・C-2(缶), 44~49・C-3(缶), 52~53・C-5(缶)〕



写真図版14 遺構内出土土器(3) [56,57・C-6(俵),60~71・C-51ピット,75~77・C-54ピット,78,79C-1(俵)]



写真図版15 遺構内出土石器類(1)〔1~6、10~12・C-1(住)、7、8・C-3(住)、9、13・C-5(住)〕



15



16

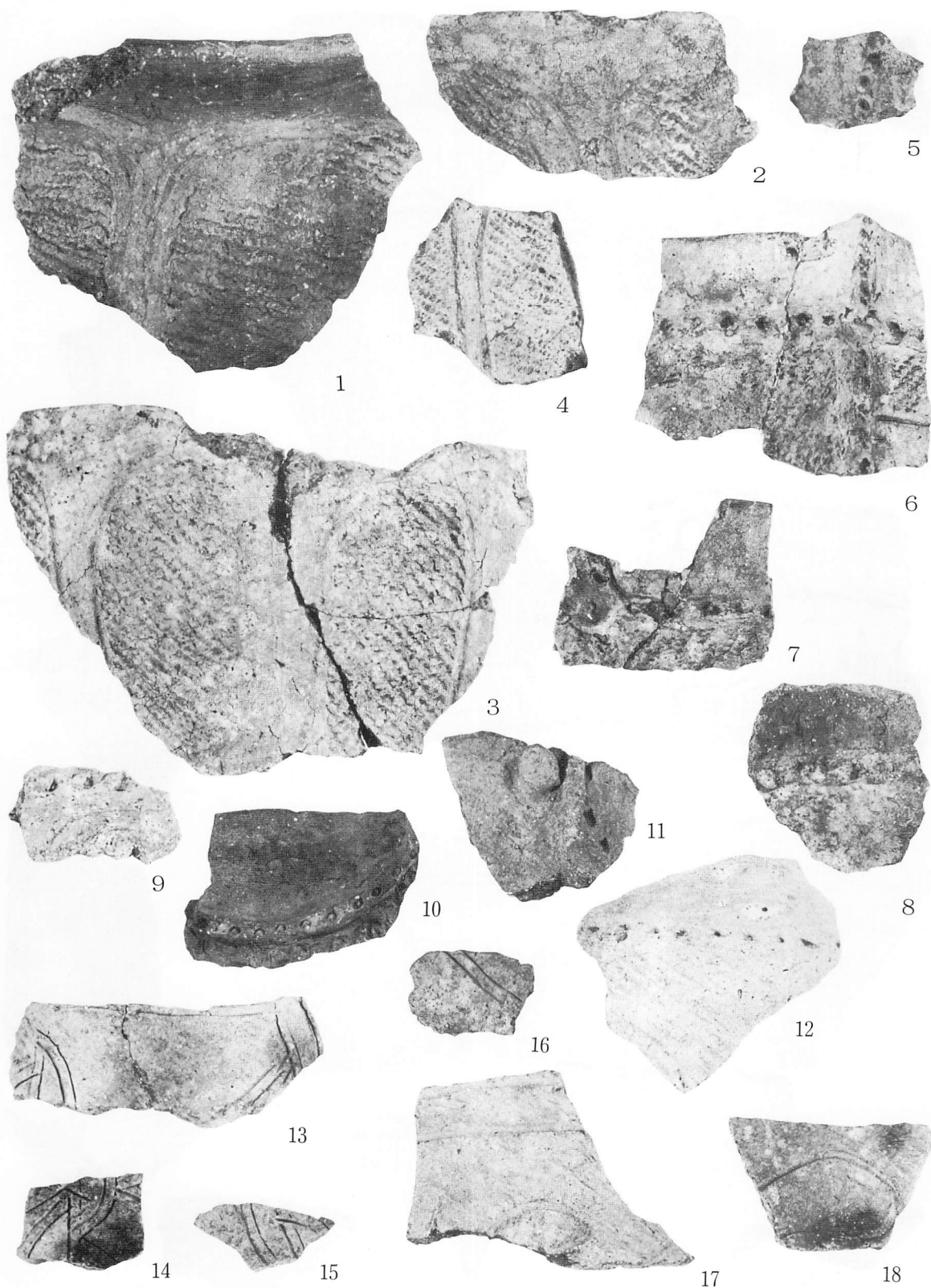


14

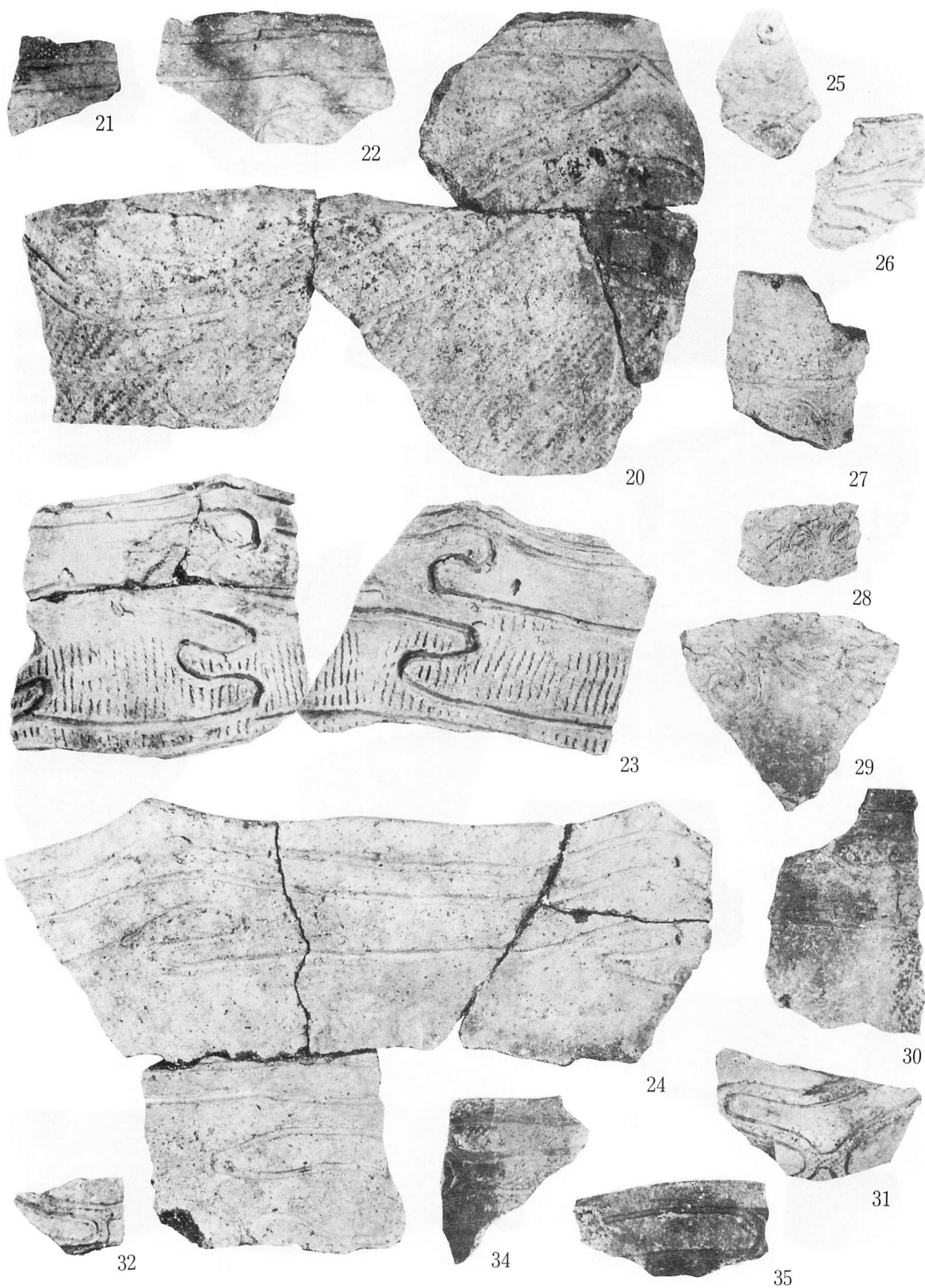


17

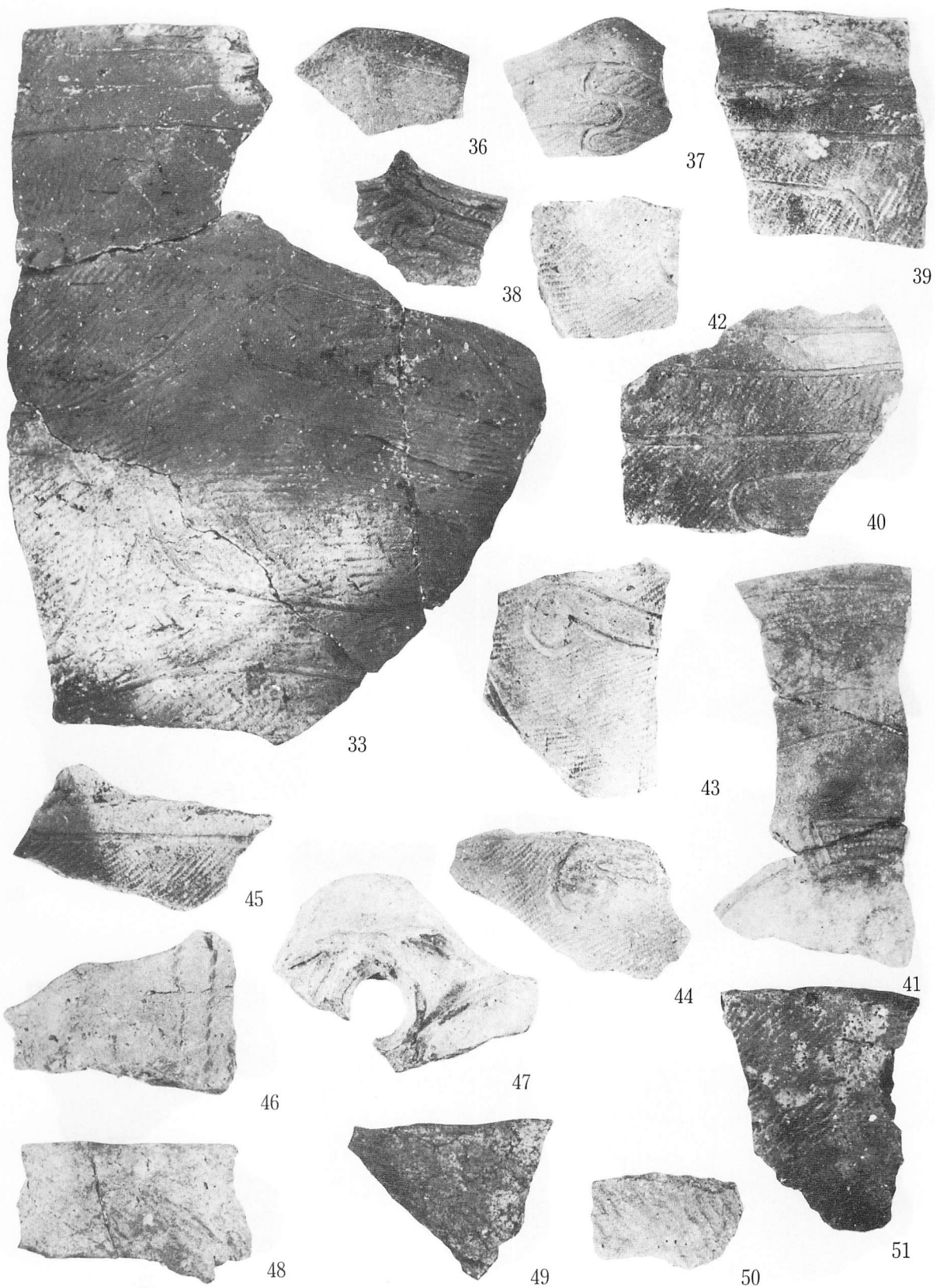
図版写真図版16 遺構内出土石器類(2) [14・C-51ピット, 15、17・C-5(併), 16・C-1(併)]



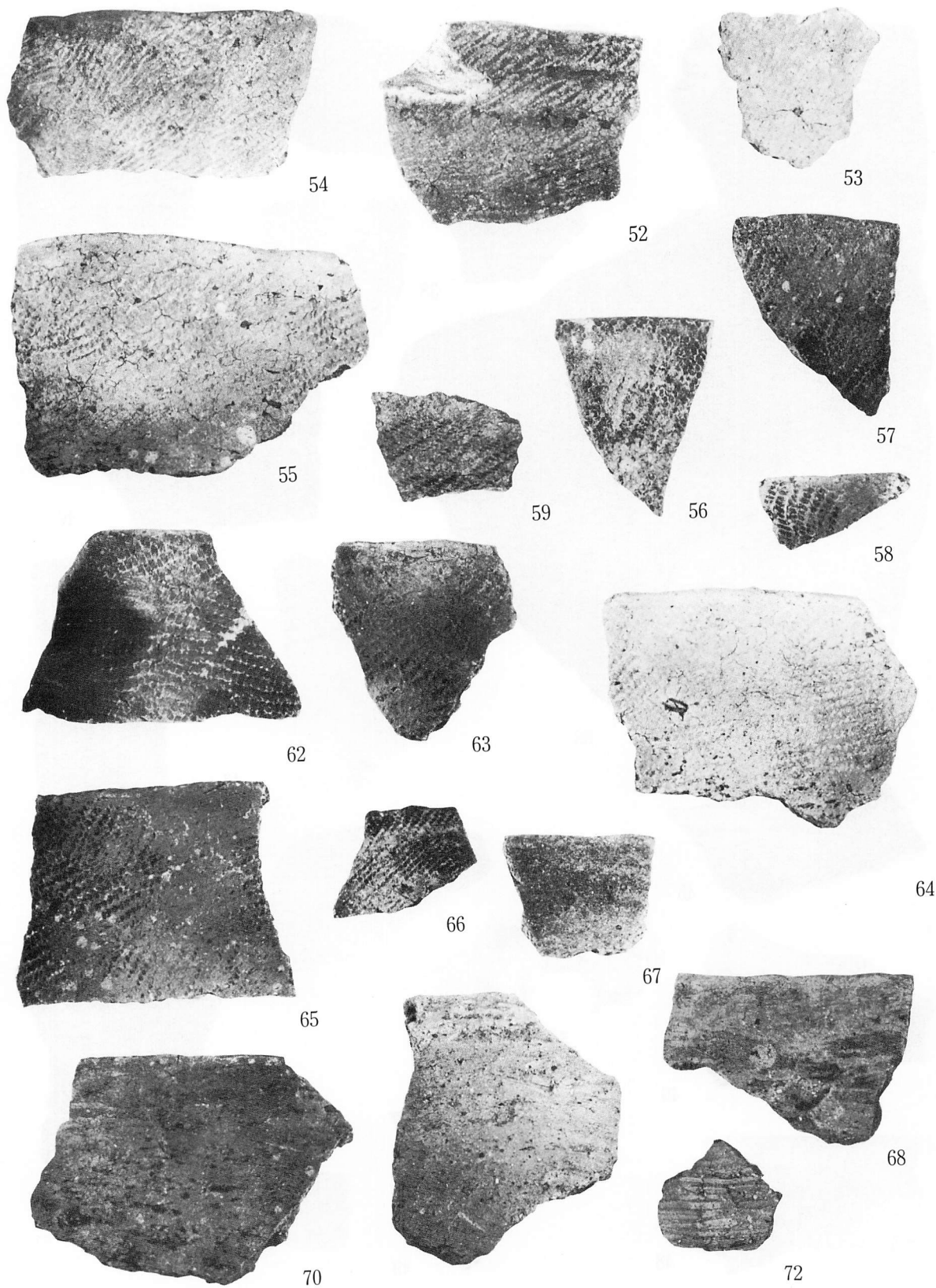
写真図版17 遺構外出土土器(1)〔I群1~4・1類, 5~11・2類, 12・3類; II群13~16・1類, 17, 18・2類〕



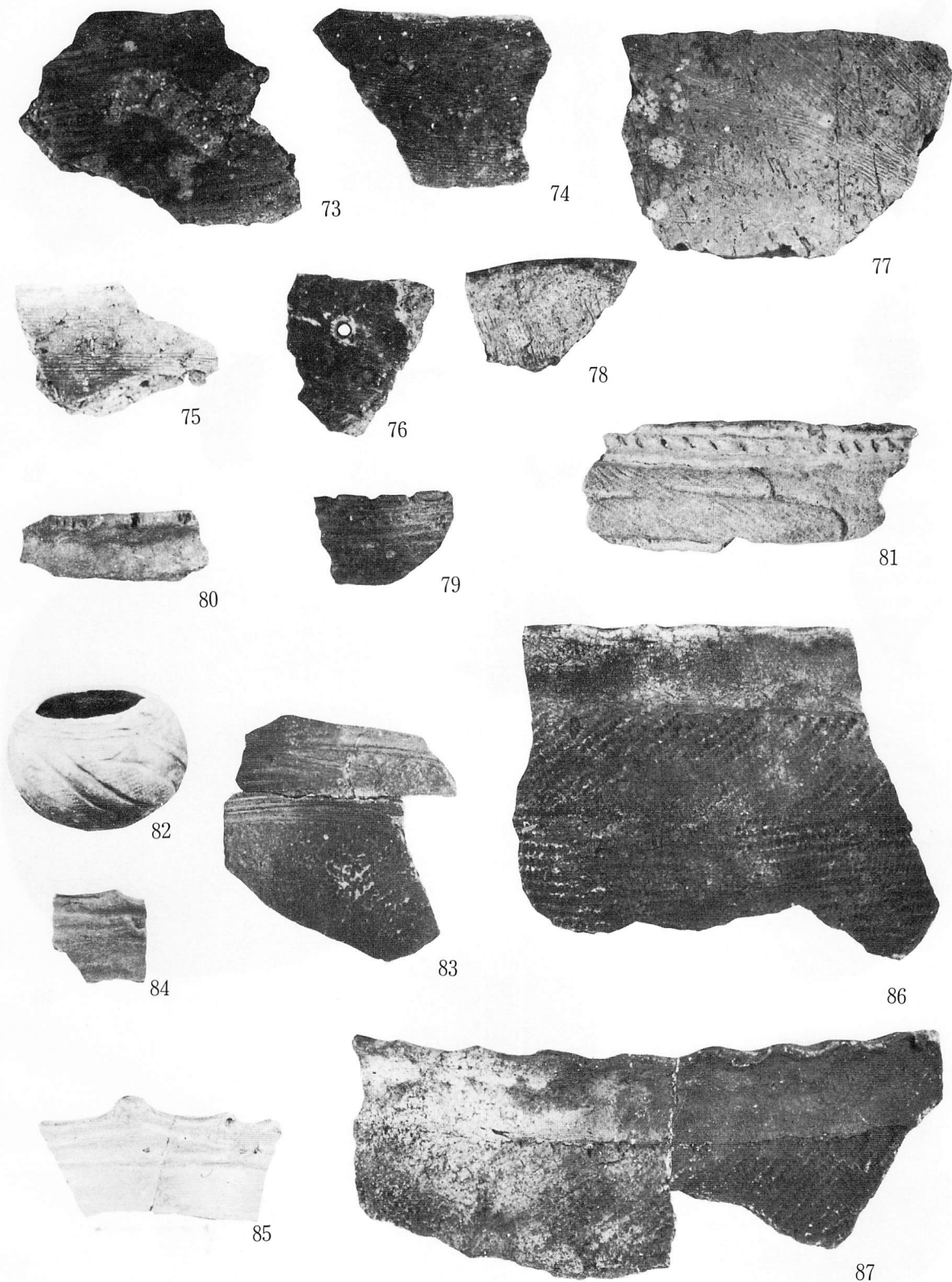
写真図版18 遺構外出土土器(2)〔II群21~32・2類, 34, 35・3類〕



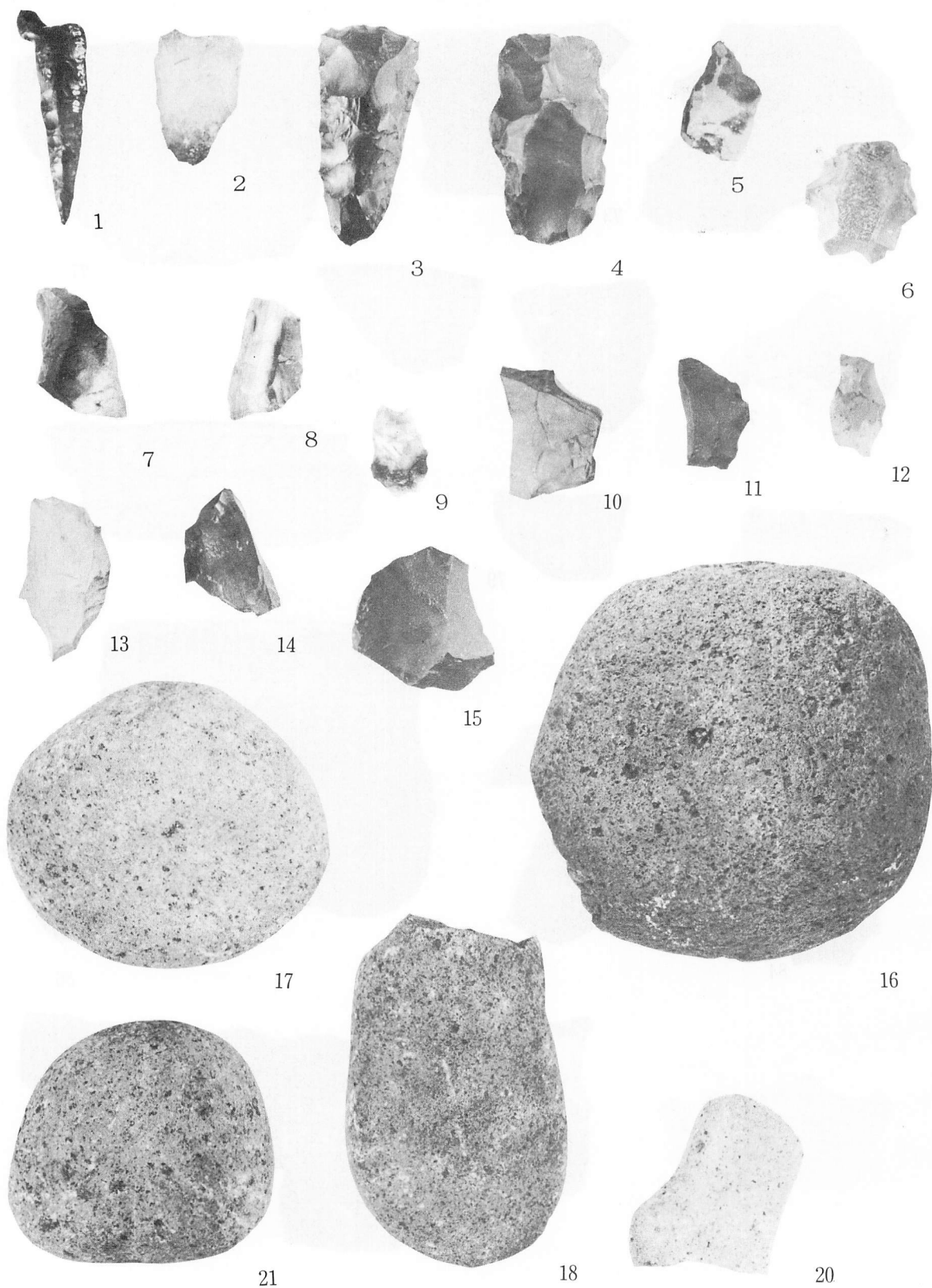
写真図版19 遺構外出土土器(3)〔II群36~38・3類, 39、40, 42~45・4類, 48~51・5a類;
I群46・4類, 47・5類; IV群41・1類〕



写真図版20 遺構外出土土器(4)〔II群52~54・5a類, 55~66・5b類, 67~71・5c類, 72・5d類〕



写真図版21 遺構外出土土器(5)〔II群73・5d類, 74~78・5e類; III群79~82・1類, 83~85・2類, 86、87・3類〕

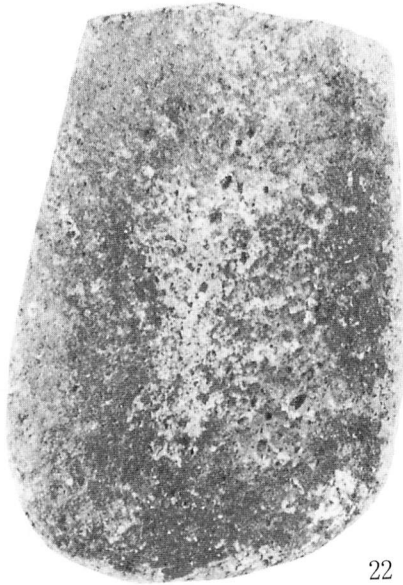


写真図版22 遺構外出土石器類(1)

(1・石匙, 2~4・筥状石器, 5・pick状石器, 6・鋸齒縁石器, 7・スクレイパー, 8・不定形石器, 9~15・使用痕のある剥片, 16・敲石, 17, 18, 20, 21・磨石)



19



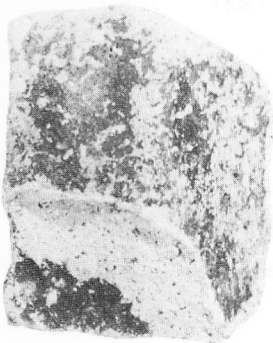
22



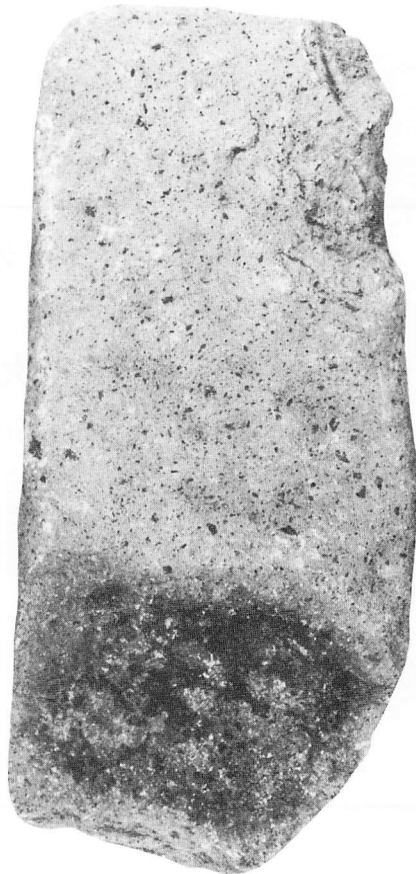
24



23



26



25

写真図版23 遺構外出土石器類(2) (19,22,24,26・磨石, 23・石棒, 25・鼓石)

岩手県埋文センター文化財調査報告書第42集
岩手県松尾村
野駄遺跡第2次発掘調査報告書
東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

昭和57年3月20日 印刷

昭和57年3月25日 発行

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷

TEL (0196) 38-9001

印刷 川口印刷工業株式会社
